

文化財調査報告書第171輯

—主要地方道庄内久住線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

長湯横穴墓群 桑畑遺跡

2004年3月

大分県教育委員会

—主要地方道庄内久住線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

長湯横穴墓群 桑畑遺跡

2004年3月

大分県教育委員会

序 文

本書は、大分県教育委員会が大分県竹川土木事務所の依頼を受けて実施した主要地方道庄内久住線道路改良工事に伴う直入町長湯横穴墓群ならびに桑畑遺跡の発掘調査報告書です。

直入町は大分県のほぼ中央に位置し、町内には縄文時代の三反田遺跡をはじめ、横枕遺跡、日向塚遺跡など数多くの遺跡が所在し、古代においては「豊後国風土記」に球軍郷、「日本書紀」に來田見邑、「万葉集」には朽網と記された古い歴史を持つ地域です。

今回調査した長湯横穴墓群や桑畑遺跡は、いずれも直入町の中心部を流れる岸川左岸の丘陵上にあり、長湯横穴墓群からは、古墳時代の横穴墓9基とそれに伴う多数の人骨や副葬品が、また桑畑遺跡では縄文時代の陥し穴10基が発見され、縄文時代から古墳時代にわたる人々の長い営みを明らかにすることができました。

本書が、埋蔵文化財の保護並びに地域の先人の生活を理解する資料として、さらには、学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、長期間にわたる発掘調査にご支援、ご協力をいただきました関係各位に、衷心から感謝申し上げます。

平成16年3月31日

大分県教育委員会教育長

深 田 秀 生

卷頭図版 長湯横穴墓群

PL - 1



長湯横穴墓群全景（調査前）



長湯横穴墓群全景（調査後）



1号墓閉塞状況



1号墓前庭部完掘状況



1号墓女室内屍床



2号墓閉塞状況及び前庭部遺物出土状況



2号墓前庭部完掘状況



2号墓屍床 (奥壁に向かって右)



3号墓封塞状況及び前底部遺物出土状況



3号墓前底部完掘状況



4号墓閉塞状況



4号墓文室内人骨出土状況



5号墓羨門部



6号墓閉塞状況



5・6号横穴墓前庭部



6号墓道部刺突刀子



6号墓前底部遺物出土状況



7号墓閉塞状況



7号墓狭道部



7号墓前庭部



7号墓屍床 (奥壁に向かって左)



7号墓屍床 (奥壁に向かって右)



8号墓完備状況



8号墓女室



9号墓閉塞状況



9号墓前底部



2号墓人骨出土状況（奥壁に向かって左）



2号墓人骨出土状況（奥壁に向かって左）



3号墓人骨出土状況（文室内）



3号墓人骨出土状況（奥壁に向かって右）



3号墓人骨出土状況（奥壁に向かって左）



3号墓人骨出土状況（集骨）



4号墓人骨出土状況



6号墓人骨出土状況 (奥壁に向かって右)



6号墓人骨出土状況 (奥壁に向かって右)



7号墓人骨出土状況 (奥壁に向かって右)



7号墓人骨出土状況 (玄室中央)



9号墓人骨出土状況

PL-8



1号前庭部・女室出土須恵器



2号墓前庭出土須恵器



14-7



14-8



14-9



14-10



14-14



14-17



14-18



14-19



14-21



14-22

2号墓的底部出土须惠器

PL -10



14-23



14-24



14-25



15-19

2号墓前庭部出土须志器

PL -11

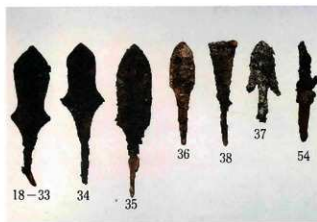


17-31

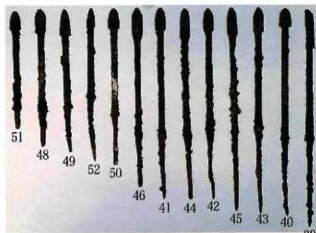


17-32

玄室内出土須志器

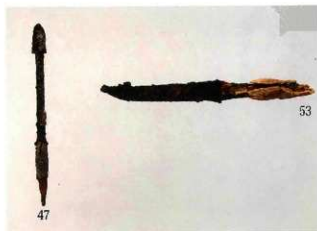


鉄 鏃



鉄 鏃

39



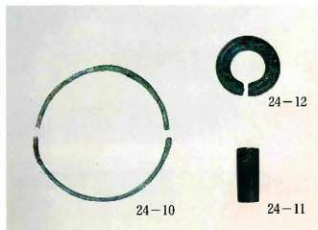
刀子

2号墓玄室内出土遺物

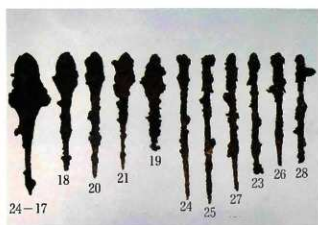
PL-12



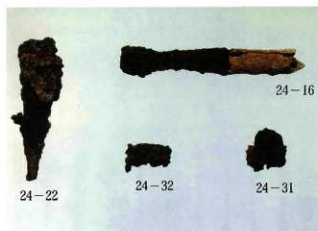
3号墓前庭部出土須惠器・土師器



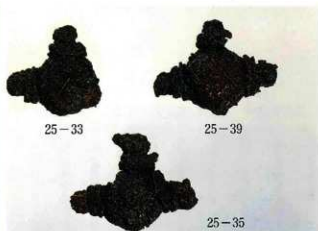
装身具類



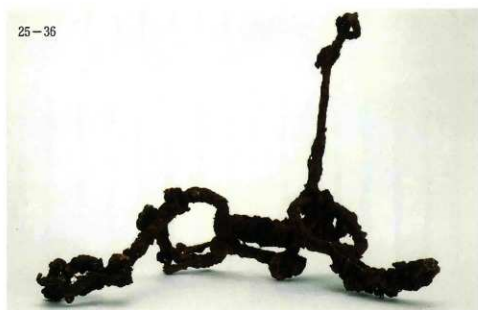
鉄 鏃



鉄 鏃



馬具 (辻金具)



環状鏡板付髯

3号墓滅失出土遺物



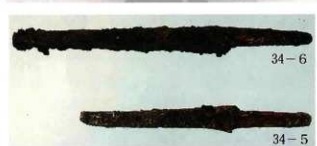
31-1



31-2



31-3



34-6

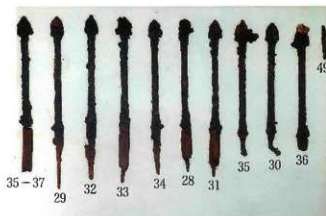


34-5

6号墓前庭部出土土師器



34-4



35-37

29

32

33

34

28

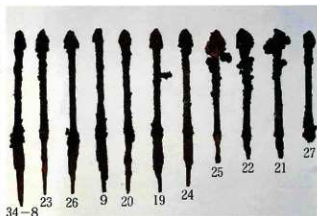
31

35

30

36

49



34-8

23

26

9

20

19

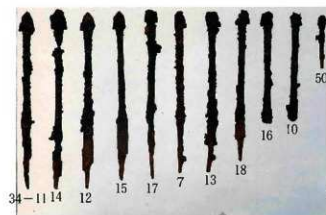
24

25

22

21

27



34-11

14

12

15

17

7

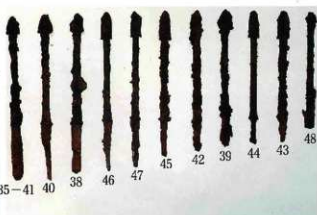
13

18

16

10

50



35-41

40

38

46

47

45

42

39

44

43

48

鉄 鏃

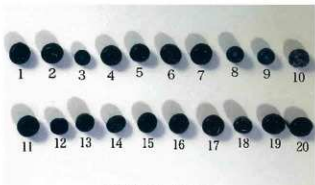
鉄 鏃

6号墓女室内出土遺物



38-21

前底部出土須恵器



前庭部出土ガラス玉



40-25

40-23



40-24

鹿角刺鉄刀・鉄剣



鉄件把頭基部・突起部、鞘口部直弧文



鉄剣鞘尻部直弧文(外周)



鉄剣鞘尻部直弧文(端)

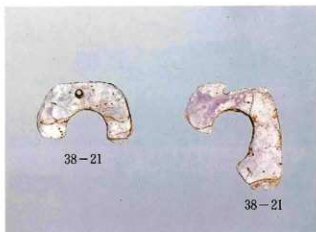


鉄刀鞘尻文直弧文(外周)

PL-16



石枕



夜光貝製品



ゴホウラ製貝輪・石枕



7号墓玄室内出土遺物



長湯横穴墓群遺景



遺跡見学会



遺跡見学会



作業風景



発掘調査に参加した皆さん

例 言

- 1、本書は平成13年に実施した主要地方道庄内久住線道路改良工事に伴う長湯横穴墓群・桑畑遺跡の報告書である。
- 2、調査は、大分県教育委員会が大分県竹田土木事務所の委託を受け実施した。
- 3、遺跡・遺物の実測と撮影は調査担当者の甲斐寿義・五十川雄也が主に行った。遺物の実測及びトレースは大分県文化課文化財資料室で行い、遺物写真は甲斐・五十川による。
- 4、遺構写真は甲斐・五十川によるが、空中写真は、長湯横穴墓群は株式会社九州航空に、桑畑遺跡は株式会社スカイサーベイに、地形測量は㈱エスピー・シーテクノ九州に委託した。
- 5、本書で用いた方位はすべて磁北である。
- 6、出土した人骨の自然科学的分析を九州大学大学院基盤構造講座に、7号墓出土貝製品は木下尚子氏（熊本大学）に依頼し、玉輪を得た。
- 7、本遺跡の出土遺物並びに図面・写真等は、大分県教育庁文化課文化財資料室に保管している。
- 7、本書の執筆は第3章4節3③を五十川が担当し、その他の執筆及び編集は、甲斐寿義が行った。

目 次

第1章	はじめに	1
第2章	遺跡の立地と環境	2
第3章	長湯横穴墓群	5
第1節	調査の経緯と概要	5
第2節	報告に当たって	6
第3節	遺構と遺物	7
1号墓		7
2号墓		7
3号墓		21
4号墓		27
5号墓		29
6号墓		30
7号墓		36
8号墓		47
9号墓		48
第4節	考察	50
第5節	付篇	
	長湯横穴群7号墓出土のゴホウラ銅とヤコウガイ製品	77
	長湯横穴墓出土人骨について	82
第4章	桑畑遺跡	135
第1節	調査の経緯と概要	135
第2節	基本の層序	135
第3節	検出した遺構と遺物	135
第4節	まとめ	139

図版目次

長湯横穴墓群

第1図	遺跡の位置	2
第2図	遺跡周辺地形図と調査区	3
第3図	長湯横穴墓群と周辺の遺跡	4
第4図	各部位の名称	5
第5図	長湯横穴墓群遺構配置図	6
第6図	1号墓土層図	7
第7図	平・断面図	8
第8図	前庭部遺物出土状況	9
第9図	前庭部遺物出土遺物実測図	10
第10図	玄室内出土遺物実測図	11
第11図	2号墓土層図	11
第12図	平・断面図	13
第13図	前庭部遺物出土状況	14
第14図	前庭部出土遺物実測図	15
第15図	前庭部出土遺物実測図	16
第16図	玄室内人骨・遺物等出土状況	17
第17図	玄室内出土遺物実測図	18
第18図	玄室内出土遺物実測図	19
第19図	長湯横穴墓群3号墓土層図	20
第20図	平・断面図	21
第21図	前庭部遺物出土状況	22
第22図	前庭部出土遺物実測図	23
第23図	玄室内人骨・遺物等出土状況	24
第24図	玄室内出土遺物実測図	25
第25図	玄室内出土遺物実測図	26
第26図	4号墓平・断面図	27
第27図	玄室内人骨出土状況	28
第28図	5号墓平・断面図	29
第29図	6号墓上層図	30
第30図	6号墓平・断面図土層図	31
第31図	前庭部遺物出土状況	32
第32図	前庭部遺物出土遺物実測図	32
第33図	玄室内人骨・遺物等出土状況	33
第34図	前庭部出土遺物実測図	34
第35図	前庭部出土遺物実測図	35
第36図	7号墓平・断面図	37
第37図	前庭部遺物出土状況	38
第38図	前庭部遺物出土遺物実測図	38
第39図	玄室内人骨・遺物等出土状況	39

第40図	前庭部出土遺物実測図	40
第41図	前庭部出土遺物実測図	41
第42図	前庭部出土遺物実測図	42
第43図	前庭部出土遺物実測図	43
第44図	前庭部出土遺物実測図	44
第45図	前庭部出土遺物実測図	45
第46図	前庭部出土遺物実測図	46
第47図	8号墓平・断面図	47
第48図	9号墓平・断面図	48
第49図	女室内人骨出土状況	49
第50図	長湯横穴墓群編年表	51
第51図	長湯横穴墓群出土土器	54
第52図	環状鏡板付轡(県内出土)及び別造り引手壺付環状鏡板轡	56
第53図	県内出土鹿角製刀剣装具	58
第54図	鹿角製剣装具直弧文展開図	58

桑畑遺跡

第1図	桑畑遺跡遺構配置図	136
第2図	◇ 遺構実測図	137
第3図	◇ 遺構実測図	138

表 目 次

第1表	須恵器実年代比較表	53
第2表	県内横穴墓出土銅劍一覧	55
第3表	鹿角製刀剣装具直弧文比較一覧	57
第4表	横穴墓刺突刀子一覧	59
第5表	長湯横穴墓出土土器観察表	68
第6表	長湯横穴墓出土土器観察表	69
第7表	長湯横穴墓出土土器観察表	70
第8表	長湯横穴墓出土土器観察表	71
第9表	長湯横穴墓群出土鉄器計測表	72
第10表	長湯横穴墓群出土鉄器計測表	73
第11表	◇ 鉄器・装身具・馬具・ガラス計測表	74
第12表	7号墓出土ガラス玉分析結果	75
第13表	長湯横穴墓群赤色顔料分析結果	76

図版目次

巻頭図表 長湯横穴墓群

- PL-1 長湯横穴墓群全景
- PL-2 1号墓閉塞状況・前庭部完掘状況・屍床、2号墓閉塞状況・遺物出土状況・完掘状況・屍床
- PL-3 3号墓閉塞状況及び遺物出土状況・前庭部完掘状況、4号墓閉塞状況・人骨出土状況、5号墓羨門部、6号閉塞状況
- PL-4 5・6号墓前庭部、6号羨道部刺突刀子、前庭部遺物出土状況、7号墓閉塞状況・羨道部・前庭部
- PL-5 7号墓屍床（左・右）、8号墓完掘状況・玄室、9号墓閉塞状況・前庭部
- PL-6 2号墓人骨出土状況・3号墓人骨出土状況
- PL-7 4号墓・6号墓・7号墓・9号墓人骨出土状況
- PL-8 1号前庭部・玄室出土須恵器、2号墓前庭部出土須恵器
- PL-9 2号墓前庭部出土須恵器
- PL-10 2号墓前庭部出土須恵器
- PL-11 2号墓前庭部出土須恵器・鉄鎌・刀子
- PL-12 3号墓玄室出土鉄須恵器
- PL-13 3号墓玄室内鉄鎌・馬具
- PL-14 6号墓前庭部出土土師器、玄室内鉄鎌・刀子
- PL-15 7号墓玄室出土鹿角装鉄刀・鉄劍
- PL-16 7号墓出土玄室内出土夜光貝製品・ゴホウラ製貝輪・石枕
- PL-17 長湯横穴墓群遠景、見学会、作業風景

桑畑遺跡

- 第1図 桑畑遺跡全景……………140
- 第2図 桑畑遺跡北側、遺跡南側……………141

第1章

1. 調査にいたる経過

長湯横穴墓群・桑畑遺跡は、大分県直入郡直入町大字長湯宇桑畑に所在する。これらの遺跡の調査は、主要地方道庄内久住線長湯Ⅰ区道路改良工事に伴う、緊急発掘調査として実施した。主要地方道庄内久住線は、大分県と直入郡を結ぶ主要道路としてその重要な役割を担ってきた。しかし、道路の幅員の狭さと近年の交通量の増加に伴い、主要地方道としての機能は低下し、特に長湯地区については道路が町の中心部を通ることから拡幅が困難なため、町中心部を迂回するように総延長2.8kmのバイパスが計画され、平成8年度より事業が開始された。この計画に伴い、平成11年度末に県土木建築部企画検査室を通じ県竹田土木事務所から事前の分布調査の依頼があり、これを受けた県教育委員会文化課では、平成12年度当初に分布調査を行い、当地区が周知遺跡である長湯横穴墓群であることから事前の確認調査が必要であると判断した。確認調査は、用地買収等の終了した平成12年2月に、県竹田土木事務所からの依頼により行なわれた。試掘調査の結果、4基の横穴墓が確認されたため、県竹田土木事務所と協議して遺跡が確認された部分について本調査を実施することとなった。また、桑畑遺跡については、平成13年度の分布調査の際に当地区が遺跡の存在する可能性が高いと判断されたため、長湯横穴墓群の本調査と平行して平成13年12月に試掘調査を実施した。その結果、時期不明の大型土坑を5基確認したため県竹田土木事務所と協議し、本調査を実施することとなった。

2. 調査団の構成

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	大分県教育委員会教育長		田中恒治（平成12年度）
	大分県教育委員会教育長		石川公一（平成13年度）
	大分県教育庁文化課課長		山本芳直（平成12年度）
	同	課長	工藤正徳（平成13年度）
	同	参事兼課長補佐	伊藤正行（平成12年度）
	同	参事兼課長補佐	麻生智治（平成13年度）
	同	参事兼課長補佐	清水宗昭
	同	主幹兼歴史文化財第2係長	柴田勝弘（平成12年度）
調査員	同	主幹	高橋 徹（平成13年度）
	同	主幹	高橋信武
	同	主査	後藤一重
	同	主査	甲斐寿義（調査担当）
調査委員	同	嘱託	五十川雄也
	小田富士雄（福岡大学教授、県文化財保護審議委員）		
	田中 良之（九州大学教授）		
	渋谷 忠章（文化課参事兼課長補佐）		

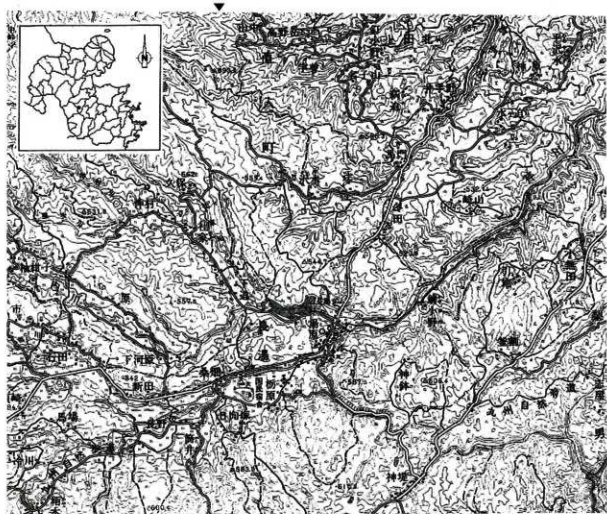
第2章 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

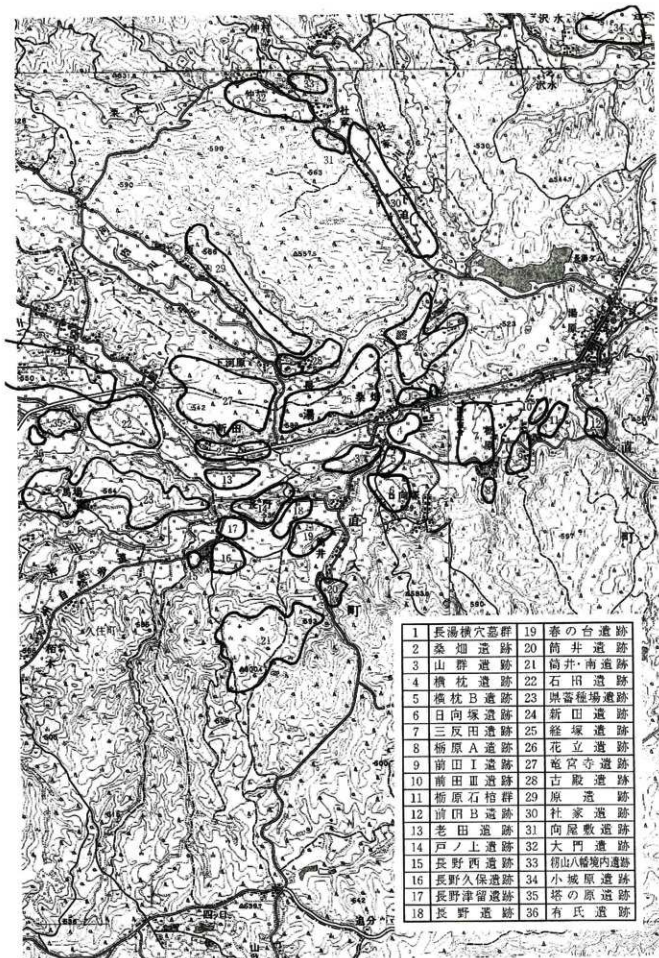
長湊横穴墓群や桑畑遺跡の所在する直入町は、大分県のはば中央、大分川の支流芹川流域にひらけた町で、直入郡の東部、くじょう連山の西側にあたる。西北方向には大船山がそびえ、右手前には原生林で覆われた黒岳がせまり、西南方向には鏡ヶ岳を主峰とする大野山地が北東から南西方向に走る。直入町の中心部はこの二つの山地の間にあって、北東から南西方向の長大な断層を伴った独特の帯状地質構造を持って広がる。そしてその西方は久住町都野地区から久住高原へと続き、標高500～600mの高原状の緩傾斜地が開けるが、北東方向は大分郡野津原町・庄内町へと開けるものの全般的に高度は下がり、河川の浸食が激しく、深い渓谷で溪流の現れているところが多い。この構造線に沿って直入町の中心部を大分川上支流である芹川が流れる。芹川はその源を大船山や黒岳に発し湯原地区で社家川と合流し、さらによって大分郡庄内町で大分川の本流と合流する。直入町のほとんどの遺跡はこの芹川や社家川流域の台地や段丘上に位置しており、原始から古代における多くの足跡をみることが出来る。

2. 歴史的環境

この地域の歴史は古く、古代においては「豊後国風土記」に球軍（くたみ）郷、「日本書紀」に桑田見邑、「万葉集」には朽網と記され、また、芹川は「豊後国風土記」の湯河にあたり、町の中心部である湯原地区は古くから湯治場として知られている。この地域の考古学的調査は、決して多いものではなく工事中や工作中に発見され一部が調査されただけであったが（長湊横穴墓群、牧ノ原遺跡、橋原遺跡）、1982年度から始まった大規模掘場



第1図 遺跡の位置



第2図 長湯横穴墓群と周辺の遺跡

整備事業により、数多くの遺跡の調査が行なわれた（三反田遺跡、長野津留遺跡、横枕遺跡、日向塚遺跡、横枕B遺跡、前田遺跡など）。

旧石器時代

日向塚や飛竜野で流紋岩や角閃安山岩製の三稜尖頭器や縦長刺片が、長野南口で流紋岩製の刺片、神鉢入Iでは流紋岩製の石核が出土している。このほか嶋山、神堤、棚原などでも刺片が出土し、三反田遺跡では腰筋産と思われる礫石核・細石刃が出土している。

縄文時代

早期としては嶋山C遺跡で押型土器や手向山式土器、山中A遺跡では平棒式土器、バノ上遺跡では壺ノ神式土器、三反田遺跡では兼石遺構7基が検出されている。前期では戸ノ上遺跡、神ノ原遺跡、大門遺跡などでは壺式土器が、三反田遺跡では壺式以外に曾加式土器が出土している。中期になるとの三反田遺跡で新元式が、後期になるとバノ上遺跡で鐘崎式土器、三反田遺跡では向高系土器や小池原上層式、鐘崎式、片粕式、北久根山式土器、横枕遺跡では西平式・三方山式土器などの後期の土器が出土しているおり、横枕遺跡で晩期の方形竈穴住居が検出されている。

弥生時代

この時代になるとこの地域も大野川上流域と同じように北部九州や肥後、東九州沿岸部や大野川上流域の影響を受けた土器が見られるようになる。神ノ原遺跡では、須玖式土器・黒髪式土器・下城式土器、辻遺跡では須玖式や下城式土器が採集されており、牧ノ原遺跡では弥生時代後期の住居跡2棟が検出されている。また、棚原遺跡では耕作中に弥生時代後期の石指が発見された。

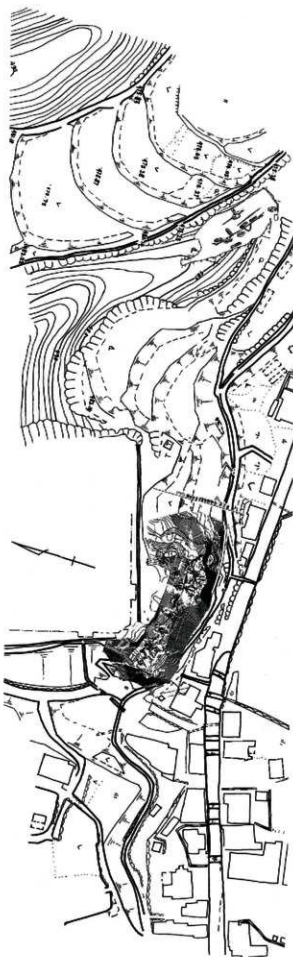
古墳時代

長湯横穴墓群、牧ノ原方形周溝墓群や久保方形周溝墓群など墳墓群は確認されているが、隣接する久住町野地区の千人塚遺跡のような前方後円墳や前方後方墳などはまだ確認ができていない。三反田遺跡、前田遺跡、釘小野遺跡などでは集落跡が検出されている。長野津留遺跡では古墳時代の溝状遺構が、上野地区では銅鏃などが出土している。また、日向塚遺跡で9世紀頃の鏡治知遺構が多数検出されている。

以上の記述にあたっては特に次の文献を参照した。

- 渋谷忠章「直入の夜明け」「直入町史」1984
 直入町教育委員会「三反田遺跡発掘調査概報」1985
 直入町教育委員会「長野津留遺跡」「直入地区遺跡群発掘調査概報I」1986

直入町教育委員会「横枕B遺跡・前田遺跡」1989



第3図 遺跡周辺地形図と調査図

第3章 長湯横穴墓群

第1節 報告にあたって

1. 横穴墓等の名称

横穴墓の名称については、明治期に古見百穴を巡る坪井正五郎氏の穴居説と白井光太郎氏の墓穴説の論争に始まるが、現在では有力な家族墓の一形態として位置づけられている。九州においても、1974（昭和49年）の福岡県行橋市の竹並遺跡の調査後、急激な進展を見せしており、その歴史的意義と文化的評価が高まってきた。今回調査した長湯横穴墓群に見られる横穴の形態は、明らかに埋葬施設であることから「横穴」と呼称するものではなく、「横穴墓」の名称を用いることとする。

つづいて、横穴墓各部の名称についてであるが、上ノ原横穴墓群で用いられた名称を踏襲するが、墓道については、今回確認できなかったので、羨門前方部の掘削部については前庭部で統一することとする。玄室平面形態・天井形・屍床については、基本的には池邊千太郎氏の分類に従って分類する（註1）。

玄室平面形態

- 1、方形…玄室の奥行と幅がほぼ同じである 2、平入り長方形…玄室の奥行よりも幅が広いもの
3、妻入り長方形…玄室の奥行が幅よりも長い 4、小形…玄室と羨道の境もなく埋葬する空間を持たないもの
天井形

- 1、穹棟形 2、鴨居形 3、切妻形 4、四角錐方形 5、尖頭形 6、平方 7、アーチ形 8、平天井形
9、ドーム形

屍床

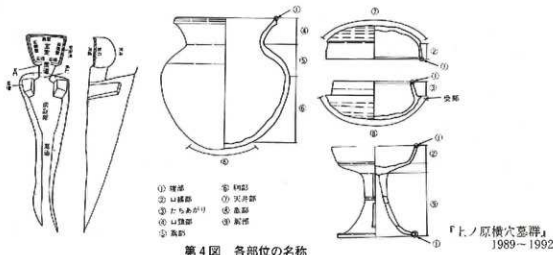
- I類 奥壁に平行して奥壁に接して造られるもの II類 奥壁に直行して玄室の片側に造られるもの
III類 奥壁に直行して玄室の両側に造られるもの IV類 玄室を取り巻くようにコ字形に造られるもの

2. 発掘調査の方法

近年の横穴墓の調査で、横穴墓の墓道には墓前祭祀や道祭の痕跡が残されていることが明らかとなり、今回の調査でも前庭部については慎重に調査を行うこととした。遺物はなるべく原位置で捉えることとし、土層については縦方向に断面を残し、上層観察を行うことを原則とした。ただし、樹根等の攪乱等により所在が子測できず、土層観察ができなかった横穴墓もある。玄室内の遺物については、原位置で取り上げることを基本にしたが、床面の覆土や盗掘による攪乱跡については上巻袋に採集し篩いにかけて遺物の検出を行った。

なお、埋葬人骨については埋葬順位、年齢性別を明らかにし、被葬者の性格や集団構成などを検討するために九州大学基礎構造学講座の田中良之教授に取り上げ、鑑定を依頼した。

註1 池邊千太郎 2001『豊後地域における横穴墓の様相』『九州の横穴墓と地下式横穴墓 第1分冊』九州前
方後田墳研究会



第4図 各部位の名称

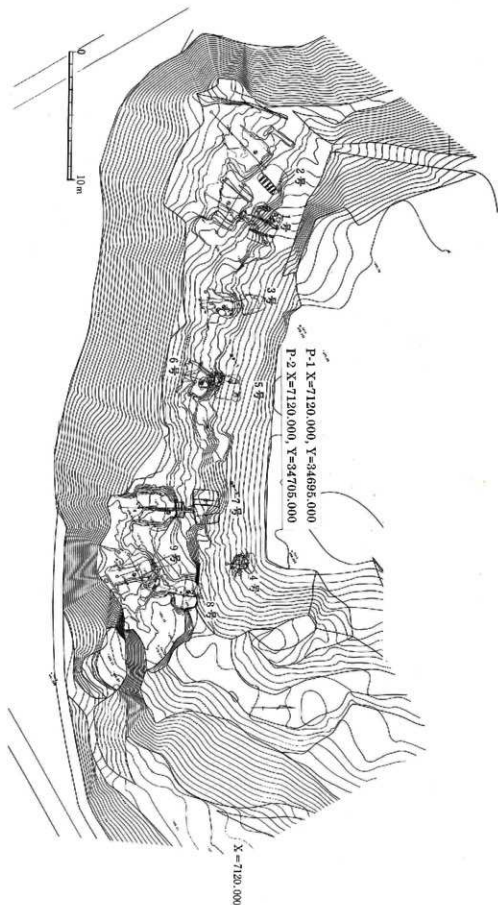
第2節

発掘調査の記録

1. 調査経過と概要

長湯横穴墓群は、本遺跡は、町の中心部を東西に流れる芹川左岸の丘陵縁辺標高約490mに位置する。明治7年に2基、昭和16～17年に数基発見され、銅鏃・金環・切子玉・ガラス小玉や鉄鏃・刀子・鉄刀などが発見されたという記録があるが、本格的な調査のメスが入るのは今回が始めてとなった。当初、平成13年6月から調査予定であったが、横穴墓が道路に向けた急峻な崖面に造営されており、現状では危険に伴い調査が不可能と判断し、竹田土木事務所と協議し、足場及び防御柵を設置後に調査を実施することとなった。

本調査は平成13(2001)年10月29日から翌年の1月25日の間実施した。調査区の西側より確認調査で検出した4基の横穴墓の調査と未確認の横穴墓の検出を並行して行った結果、9基の横穴墓を確認し、玄室や前庭部から多くの遺物と19体を越える埋葬人骨を検出した。この間、大雪や寒波に見舞われるなど調査は困難を極めたが、足場の悪い中、作業員さんの献身的な協力により予定内に調査を終了することができた。また、12月23日には現地説明会、2月2日には発掘報告会を実施したが、町内外より200人を超える見学者が訪れた。



第5図 長湯横穴墓群遺構配置図

1号横穴墓

(1) 立地、調査前の状況

1号横穴墓は、妙見社境内内にあり、2号横穴墓の東側上方、標高約472mに位置する。すでに天井部が開口しており、玄室内に土砂が多量に流入していた。明治7年、妙見社妙見社移設作業の際に2基の横穴墓が発見されているが、そのうちの一つである。直入町教委所蔵の資料によると、銅鋼や鉄線、勾玉、ガラス玉などが出土している。阿蘇溶結凝灰岩に掘り込まれ、全長は約5.6mを測り、主軸はN-32°-Eにとる。天井部は開口していたが、前庭部は完全に埋没しており、地表での確認はできなかった。調査は玄室内の上砂除去作業、前庭部プランの確認後、埋上及び前庭部、閉塞施設、玄室内の順に調査を行った。

(2) 前庭部

① 規模・構造 (第7図)

前庭部は入り口部分が、後世の開発によりかなり破壊されていた。遺存する全長が約1.72m、入口で上部幅3.16m、羨門部で上部幅3.16m、底面幅1.98mを測る。平面は方形を呈し、左右の壁にはそれぞれ0.15m×1.35m、0.24×1.2mの基礎が設けられており、上部は削平が激しく側壁高は不明である。床面はほぼ平らで、前庭部最深部は60°前後の傾斜を持つ壁となる。羨門の立面は台形ではほぼ中央に穿れており、羨門高は0.58m、幅は0.52mを測る。閉塞石は川原石(安山岩系)の1枚石を使用している。

② 前庭部土層 (第6図)

前庭部の上層は、樹根等の攪乱を受けていたが、比較的明瞭な層区分が可能な状態であった。以下堆積順に説明を加える。

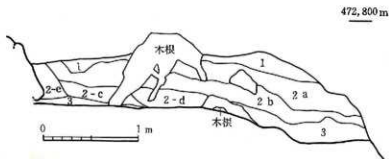
- 1層 黄褐色土層である。凝灰岩の風化層であるが、閉塞石の下面に堆積していることから初葬時の埋土である。遺物は認められない。
- 2層 暗黄褐色土層。第1層群を覆うように傾斜して堆積し、3層に分層されるが、樹根により攪乱を受けている。キメは細かいがしまりや粘質はない。遺物を含んでおり、墓前祭祀後の二次堆積層である。
 - a…やや褐色が強く、凝灰岩のブロックを多量に含む。
 - b…やや黄色が強く、細かい凝灰岩のブロックを含む。
 - c…やや褐色が強く凝灰岩のブロックを含まない。須恵器及び須恵器片を含んでいる。
- 3層 表土層である。

以上のことから、樹根による攪乱で不明瞭な部分があり追葬の状況は窺えなかった。

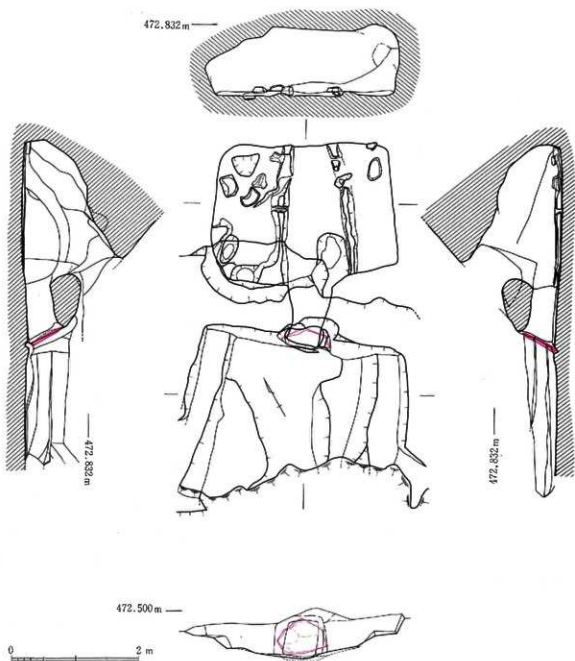
(3) 羨道、玄室

① 規模・構造 (第7図)

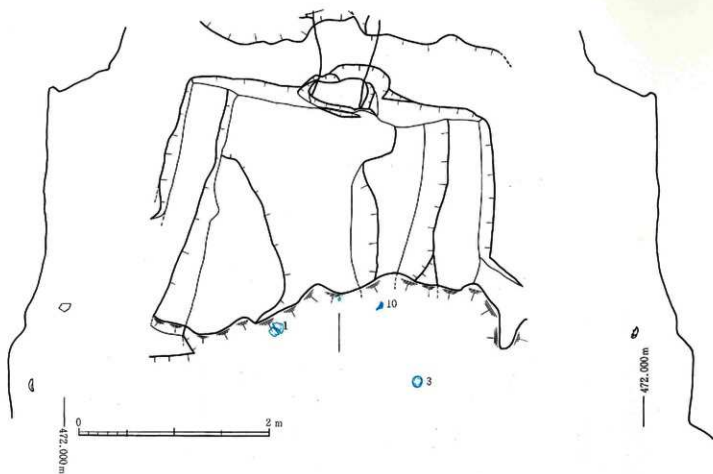
羨道は立面台形、平面形はバチ形を呈す。長さは0.96m、羨門幅は0.71m、羨門高は0.37mを測り、玄室に向かってわずかに下る。玄室は長さ2.19m、床面は幅幅2.2m奥壁幅最大幅1.8m、高さ0.86mを測る。隅丸方形で、床面は中央部がやや窪み、奥壁に直行するように削りだしの階段状の仕切りを2本設け、左右に屍床を形成している。天井部はアーチ形で、床面からの高さは天井部が欠損しており不明である。



第6図 1号墓前庭部土層図 (1/40)



第7图 1号墓平·断面图 (1/60)



第8図 1号墓前庭部遺物出土状況 (1/40)

(4) 遺物の出土状態

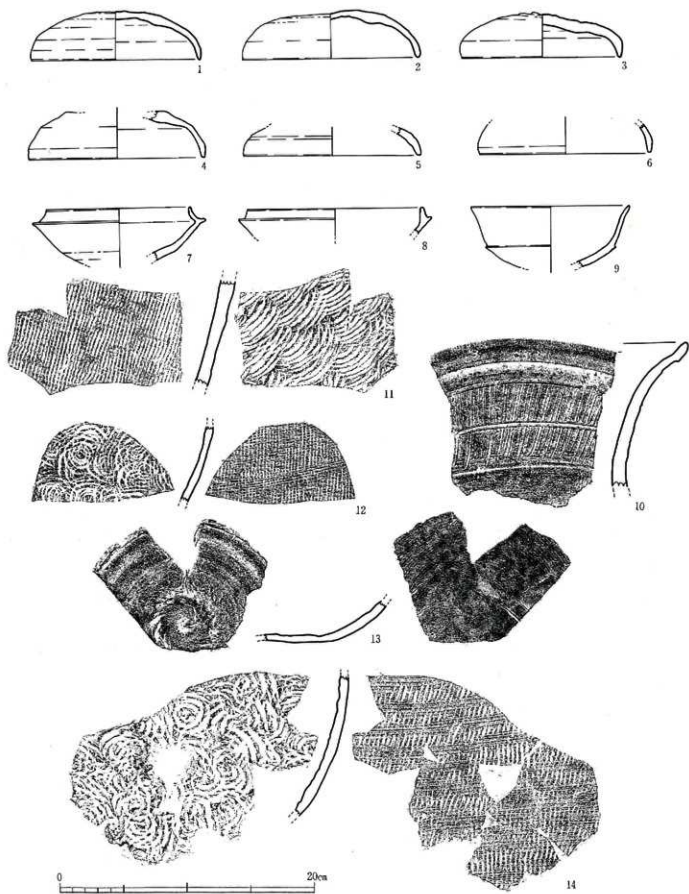
① 前庭部

・出土状況 (第8図)

前庭部での出土層位については、土層の項で説明したように、最終閉塞後の2層内より出土していることから、出土した遺物は初葬に伴うものではなく、最終埋葬後の供献土器と考えられる。出土した土器は坏蓋、坏身、壺、高坏などの須恵器であるが、出土状況は、樹根等の攪乱でプライマリな状態は認められなかった。

・出土遺物 (第9図)

1～6は須恵器坏蓋である。いずれも天井部は丸みを帯び、1、2及び4～6の口径は13cm～15cm内に収まる。3の口径は12.5cmと小さく、外面は横ナデであり、ヘラ削りは認められない。5の肩部には1条の沈線が巡る。口縁端部はいずれも丸い。1、5、6の端部外面には強い回転横ナデが残る。7～9は坏身である。内傾したやや短い立ち上がりを有すが、9は短く、受け部は立ち上がりよりも短い。いずれも端部は丸く仕上げる。9は高坏の坏身である。体底部の境には明瞭な段を有し、体部は外傾しており口縁部はさらに内傾する。口縁端部は薄い。10～14は須恵器大甕である。10は口縁部片で、外反する口縁部は端部でわずかに内傾し、端部は折り返して外側に肥厚させる。頸部には縦方向の櫛歯文が施されており、3本の沈線で区画される。11、12、14は胴部片、13は底部片である。内面には同心円の当て具痕が、外面は平行タタキ後カキ目調整を施す。



第9图 1号墓前庭部出土文物实测图(1/3)

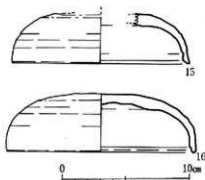
② 玄室内

・出土状況

玄室内には多量の土砂が流入していた。清掃後、須恵器片を玄室中央や玄門付近で確認したが、これらの須恵器は床面から5cmほど浮いた状態で検出しており、天井が開口後、流入した可能性がある。また、除去した土砂は十巻袋に入れ搬出し篩いにかけてたところ、人骨片を検出した。

・出土遺物 (第10図)

15・16は玄室内で確認した須恵器坏壺である。胴部には明瞭な段や沈線は認められない。天上部は丸みを帯び、口縁端部内面には沈線をめぐらす。1径はいずれも14cmを超える。



第10図 1号墓玄室内出土遺物実測図(1/3)

2号横穴墓

(1) 立地、調査前の状況

1号横穴墓は、調査区の丘陵西端、1号墓の西側、標高約471mに位置する。1号墓と同様、阿蘇溶結凝灰岩に掘り込まれているが、前庭部西側では一部軟質の黄色土層が観察できる。全長は約5.6mを測り、主軸はN-46°Eにとる。保存状態は良好で、発掘調査実施前は、妙見社の境内であり、前庭部は完全に埋没しており地表での確認はできなかった。調査は前庭部プランの確認後、埋土及び前庭部、閉塞施設、玄室内の順に調査を行った。

(2) 前庭部

① 規模・構造 (第12図)

前庭部は遺存する全長が約3.4mで、平面形は進台形状を呈し立面は羽子板形を呈す。羨門部では上部幅約2.8m、底面幅約2.5m、現存する入り部で約1.5mを測る。妙見社建築の際、上部が削平されており側壁高は不明である。床面は約10°の斜面で羨門へ上り、前庭部最深部は60°前後の傾斜を持つ壁となり側壁の傾斜は40~60度で立ち上がる。羨門の立面は台形で前庭部最深部の壁は中央に穿れており、羨門高は0.58m、幅は0.48mを測る。閉塞石は川原石(安山岩系)の1枚石であり、羨門と閉塞石の隙間を埋めるように拳大の凝灰岩が日張りとして使用されていた。

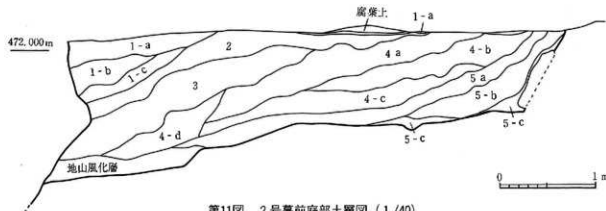
② 前庭部土層 (第11図)

前庭部の土層は、樹根等の攪乱を受けておらず、比較的明瞭な層区分が可能な状態で3層群9層に分層できた。以下堆積順に説明を加える。

1層 暗褐色土層。凝灰岩の小ブロックを含む。3層に分層でき、下層から漸移的な変化が認められる。いずれも二次堆積層であり、遺物等は含まない。

a…凝灰岩のブロックを含む。バサバサしており、しまりない。

b…aに比べるとやや褐色が強い。



第11図 2号墓前庭部土層図(1/40)

c…aに比べると褐色が強い。

2層 褐灰色土層。凝灰岩の小ブロックを含む。しまりあり。2・3層を覆うように傾斜して堆積している。二次堆積層であり、遺物等は含まない。

3層 暗褐色土層。凝灰岩の小ブロックを含む。しまりあり。2層を覆うように傾斜して堆積する。いずれも二次堆積層であり、遺物等は含まない。

4層 黒褐色土層。4層に分層でき、a～c層は下層から漸層的な変化がみられる。1層を覆うように堆積しており、キメが細かく凝灰岩の細かいブロックを含む。いずれも二次堆積層であるが、遺物等を含んでいる。a…黒色が強い。b・c層を覆うように傾斜して堆積している。

b…aに比べ褐色が強い。

c…多量の須恵器および須恵器片が認められ、下位層とは明澄に区分できることから、a～c層については墓前祭祀後の二次堆積層であろう。

d…a～cを切るように堆積している。a層よりもさらに黒色が強い。

5層 灰黄褐色土層。凝灰岩の風化層である。3層(a～c)に分層できるが、ほぼ同質の層であり漸層的变化しか認められない。バサバサしており粘質・しまり共でない。

a…凝灰岩のブロックを含む。砂質で黄色が強い。閉塞石を覆うように傾斜して堆積しており、追葬後の二次堆積である。土層の2～c層で遺物が認められることから、この上面で墓前祭祀が行われたのであろう。

b…凝灰岩の小ブロックを含んでいる。閉塞石を覆うように傾斜して堆積しており、追葬後の二次堆積である。遺物含んでいない。

c…キメが細かく、凝灰岩のブロックを含まない。a・b層同様に粘質やしまりはない。閉塞石の下面に堆積してことから初葬時の埋土である。b層同様、遺物を含んでいない。

以上のことから、2号横穴墓では2回の埋葬と墓前祭祀に関わる行為が認められた。また、地山の風化が激しく明確に確認できなかったが、4～d下層にみられるように1号墓の前庭部を横切る道路状遺構の存在が予想できる。

(3) 羨道、玄室 (第12図)

羨道は立面台形、平面方形を呈す。約10度の角度で玄室へと下る。長さは0.58m、玄門幅0.48m、玄門幅高は0.48mを測る。玄室は長さ2.01m、床面は裾幅1.76m奥壁幅最大幅1.84m、高さ0.86mを測る。隅丸台形で、床面は中央部がやや窪み、右側には奥壁に直行して屍床が設けられている。この屍床には奥壁に並行するように長さ0.6～0.7m、幅0.1～0.15mの5条の溝状の挟りが入る。天井部はアーチ形で床面からの高さは中央付近で0.86m前後である。

(4) 出土遺物

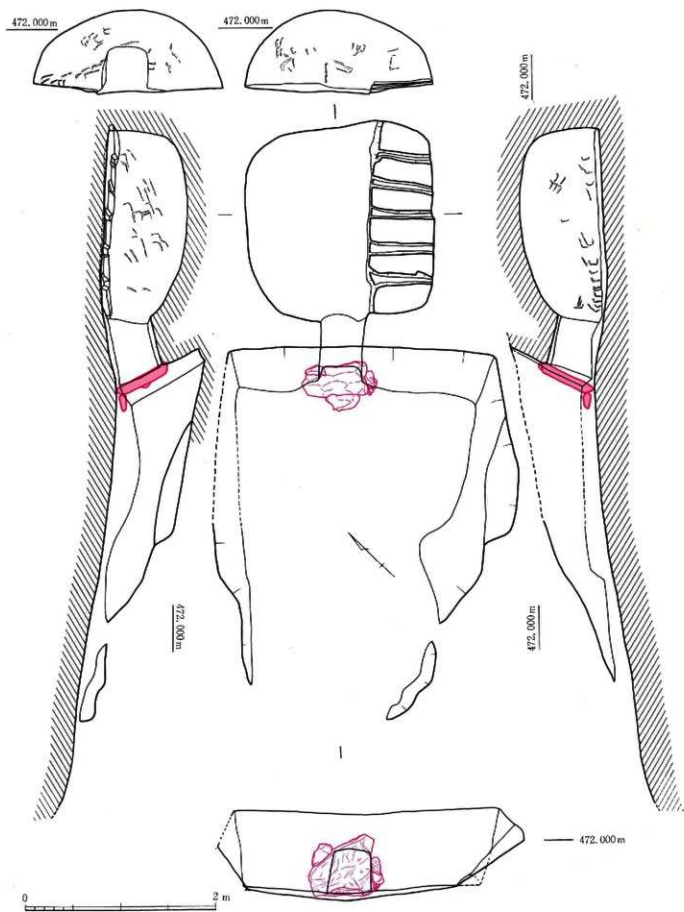
① 前庭部

・出土状況 (第13図)

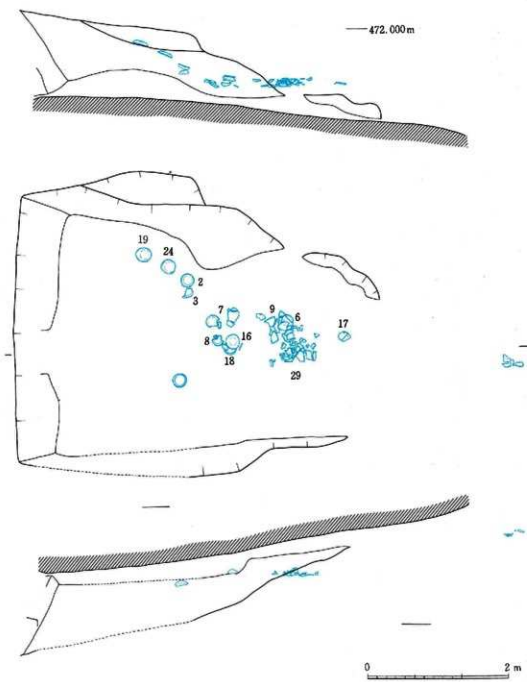
前庭部での出土層位については、10層の項で説明したように、最終閉塞後の5～a層の上層より出土していることから、出土した遺物は埋葬に伴うものではなく、最終埋葬後の供献上器と考えられる。出土した土器は坏蓋、坏身、横瓶などの須恵器や須恵器片である。完形品の坏は前庭部中央やや東門側で傾斜して、横瓶など破砕された須恵器は前庭部中央付近に一括埋置された状態で出土した。

・出土遺物 (第14・15図)

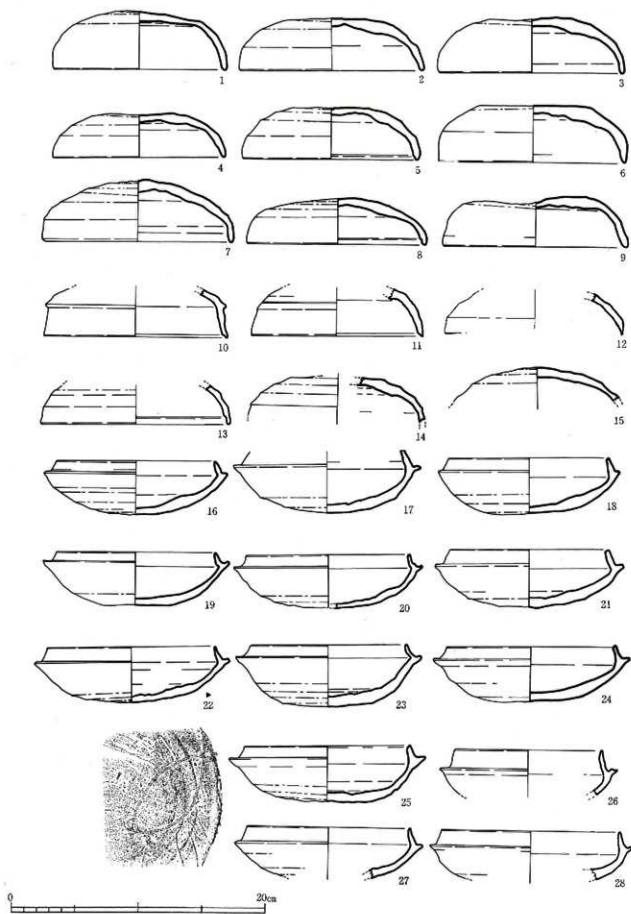
1から16は坏蓋である。径はいずれも13cm～15cmの間に収まり、天井部は回転ヘラ削りである。5の肩部には不明瞭な沈線が巡り、10は不明瞭な段を有す。8・10・11・13のL1縁端部には内径する段がみられるが、天上部はいずれもやや高く丸みを帯びる。16～28は坏身である。径はいずれも12cmから14cmにほぼ収まる。内傾したやや短い立ち上がりを持ち、端部は丸く、底部は回転ヘラ削り調整で丸みを帯びる。22にはヘラ記号が残る。いず



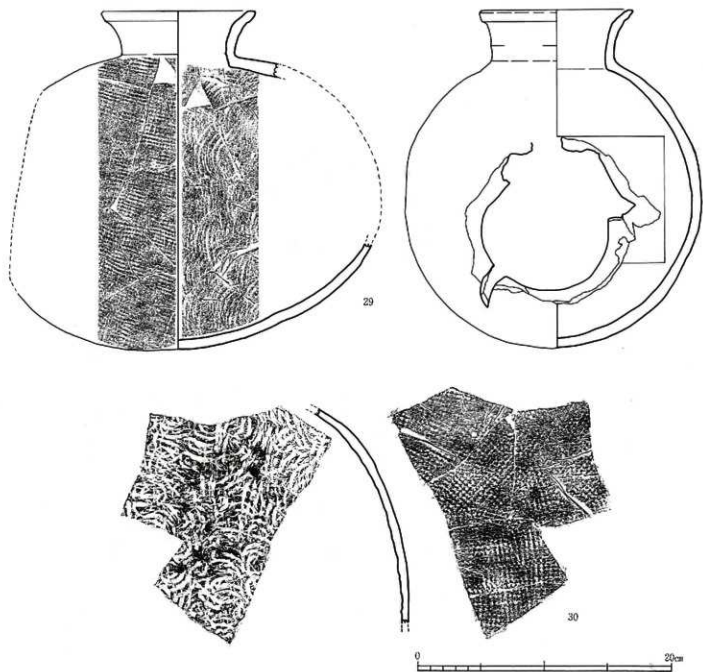
第12图 2号基平·断面图 (1/40)



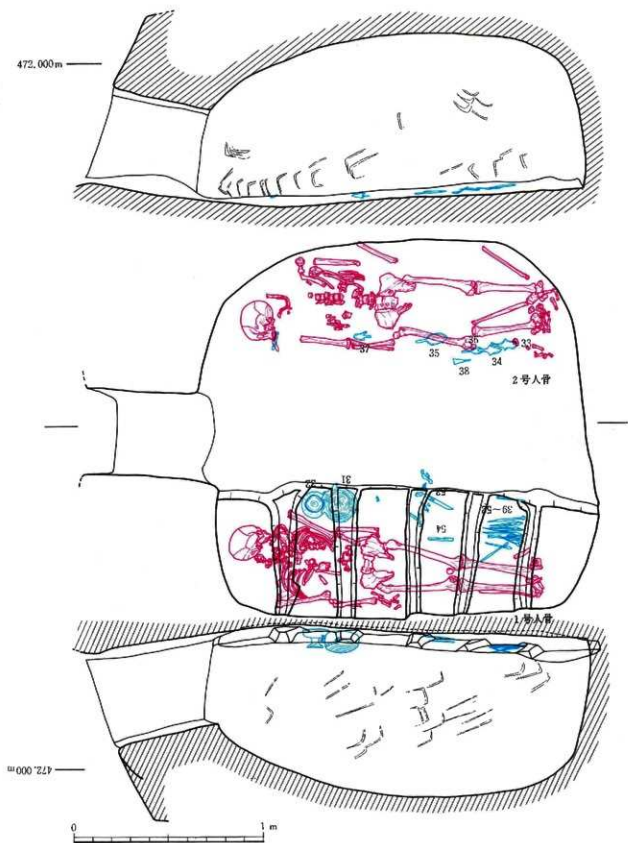
第13回 2号墓前庭部遺物出土状況 (1/40)



第14图 2号墓前庭部出土遗物实测图(1/3)



第15图 2号墓前庭部出土遗物实测图(1/3)



第16图 2号墓玄室内人骨·遗物出土状况(1/20)

れの須恵器も口縁部や受け部、立ち上がり部などに故意に打ち欠いた様子が窺える。29は横瓶である。口縁端部は折り返しており、頸部は外上方にやや外反しながら伸びる。体部はタタキ成形で部分的にカキ目調整を施している。30は、横瓶の体部片である。内面は同心円の当て具痕、外面は平行タタキ後部分的にカキ目調整を施している。29と同一固体であろう。

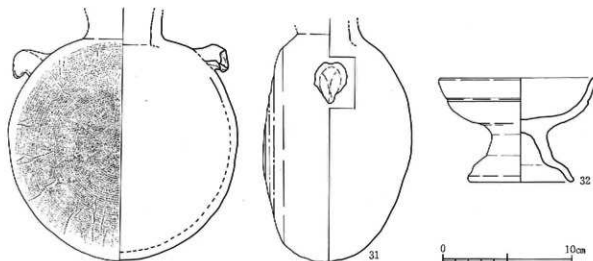
② 玄室内

・出土状況 (第16図)

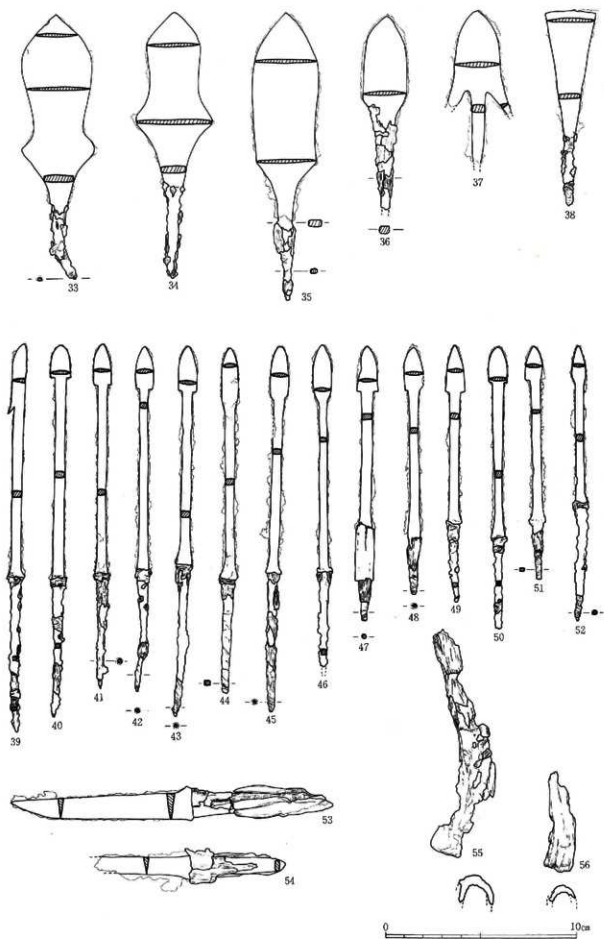
- a) 埋葬人骨 玄室奥壁にむかって右側に屍床が設けられ、屍床の上に1体(1号人骨)、左側の1体(2号人骨)の、成人男2体が仰臥伸肢層で葬られていた。いずれも頸位を玄門側に向ける。埋葬時の位置を保っており、遺存状態も良好である。詳細については別項に譲る。
- b) 副葬品 1号人骨胸部右側には、提瓶と伏せられた高杯が配置され、大腿骨付近には刀子、足下付近には鉄鏝が先端を奥壁方向に向け配置されていた。2号人骨左側には大腿骨から足下付近に鉄鏝がやや散乱するように分布していた。

・出土遺物 (第17・18図)

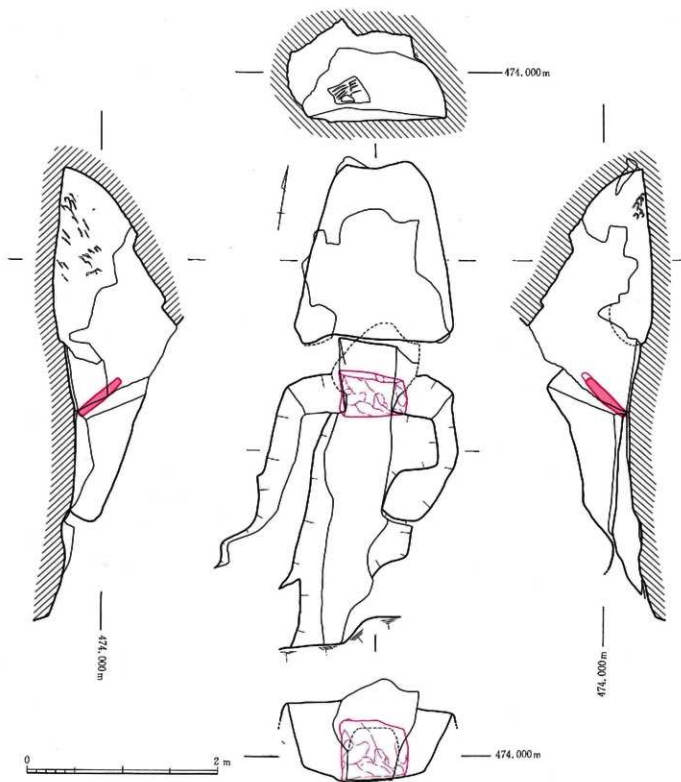
31は提瓶である。口縁部は打ち欠いており、周辺で検出できなかったので、墓外で打ち欠いて持ち込んだものであろう。胴部は円形を呈し、外面向肩にはツノ状の把手が1対付される。32は高杯である。端部は丸く外上方に直線的にのびる坏部を有し、体部中央には1条の沈線を巡らす。33-52は鉄鏝である。33-38は2号人骨に伴うもので、いずれも短頭鏝で、筥被(のかつぎ)を持たない。33-36は柳葉形で、33・34はふくらから頸部にかけて大きく内湾し、35・36は比較的緩やかに内湾している。37は平面形体が三角形を呈し、いわゆる三角頰に属するもので、逆刺(かえり)を有す。38はいわゆる方頭斧箭式(ほうとうおのみやしき)とよばれるものである。39-52は長頭鏝で、いずれも闊筥被(まちのかつぎ)を有す。39は片刃箭式(かたばみやしき)とよばれるものである。鏝身部の片側のみ刃部を有す。逆刺を持つ。40-52は鑿箭式(くりのみやしき)とよばれるもので、40・41・42・43・47・48・49・50・51は鏝身部が長三角形を呈し直角の間(まち)を持つ。40・50は先端が丸みを帯びる。44・45・46・は間(まち)が鈍角で柳葉状を呈している。52の鏝身部は長三角形を呈すが、間(まち)は鈍角である。53・54は刀子である。53は1号人骨に、54は2号人骨に伴うもので、53の把部には鹿角装具の痕跡が54には木質が残る。55・56は53の鹿角装具である。



第17図 2号墓玄室内出土遺物実測図(1/3)



第18图 2号墓女室内出土物实测图(1/2)



第20图 3号墓平·断面图 (1/40)

3号横穴墓

(1) 立地、調査前の状況

3号横穴墓は、調査区の中央やや西より、標高約473mに位置する。発掘調査実施前は、雑木林で、試掘時に天井部が開口しその存在が明らかとなった。3号墓も阿蘇溶結凝灰岩に掘り込まれている。全長は約1.9mを測り、主軸はN-9°-Wにとる。前庭部は完全に埋没していたが、樹根のため攪乱を受けていたおり、地表での確認はできなかった。調査は前庭部プランの確認後、埋土及び前庭部、閉塞施設、玄室内の順に調査を行った。

(2) 前庭部

① 規模・構造 (第20図)

前庭部は、入り口付近は後世の開発により破壊されている。遺存する前庭部の平面はバチ形、立面は逆台形を示す。全長約2.4m、入口で上部幅約1.6m、羨門部で上部約幅1.8m、底面幅1.4m、高さ0.6mを測る。床面は約8°の斜面で羨門へ上る。前庭部最深部は50°前後の傾斜を持つ壁となり側壁の傾斜は70°前後で立ち上がる。羨門の立面は方形で前庭部最深部の壁は中央に穿れており、羨門高は0.58m、幅は0.52mを測る。閉塞石は川原石(安山岩系)の1枚石である。

② 前庭部土層 (第19図)

前庭部の上層は、構成の開発と樹根等の攪乱を受けていたが、下層部分については比較的旧状をとどめていた。比較的明瞭な層区分が可能な状態で2層群5層に分層できた。以下堆積順に説明を加える。

1層 暗黄褐色土層。しまりがあり凝灰岩のブロックを含む。横穴墓が埋没後の二次堆積層である。

a…衣土層である。

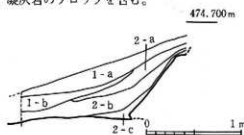
b…褐色が強い。遺物等は含まない。

2層 暗褐色土層。キメは細かく、ややしまりがあるが粘質はない。凝灰岩のブロックを含む。

a…閉塞石を覆うように傾斜して堆積し、凝灰岩のブロックを含まない。最終埋葬時後の上層である。

b…aを覆うように堆積している。やや褐色が強く、遺物を含んでおり、墓前祭祀後の二次堆積層である。

c…褐色が強い。遺物を含んでおり、墓前祭祀後の二次堆積層である。



以上のことから、土層からは追葬の様子は明確には見えなかったが、第19図 3号墓前庭部土層図(1/40) 墓前祭祀に関わる行為は認められた。

(3) 羨道、玄室

① 規模・構造 (第20図)

羨道は立面台形状で、平面はバチ形を呈す。玄室に向かって約15°の斜面で下り、長さは約0.82mを測、玄門幅0.58mを測るが、玄門高については破損しており不明である。玄室の長さは約1.8m、玄門部幅0.64m、裾部幅1.64mを測る妻入り隅丸逆羽子板形であり、天井部は崩落しており高さ・形状共に不明であるが、アーチ形を呈していたと思われる。裾部付近に掘り込みが見られる。床面はほぼ平坦で、屍床は有さない。

(4) 遺物の出土状態

① 前庭部

・出土状況 (第21図)

前庭部での出土層位については、土層の項で説明したように、遺物の大半は最終閉塞後の2層のa・b層より出土しているが、プライマリーな状態で出土した須恵器は、入り口付近に正位に置かれた坏身だけであり、墓前祭祀の状況については明確に認められなかった。出土した土器は坏蓋、坏身、甕などの須恵器や、南塞石上部の土師器の碗であるが、坏以外は破片であった。

・出土遺物 (第22図)

1、2、3、4、5は須恵器坏蓋である。全体的に丸みを帯びた天井部を有すが、2の天土部はやや平坦である。口径については3の12.5cmをのぞくと、14cm前後を測る。また2の肩部には明瞭な段が、2、3、4、5の口縁端部内面には内傾する段や沈線を巡らす。なお、4については、外面の調整面ヘラ削り調整ではなく横ナデであること、また明黄褐色を呈していることなどから、焼成の問題があるが、須恵器を模倣した土師器の可能性も残る。6、7は須恵器坏身である。口径が14cmを超えており、7は11cmと小型である。いずれの立ち上がりも内傾しているが、6はやや長く口縁端部内面には沈線を巡らす。受け部は故意に打ち欠かされている。8は甕片か。内面には同心門の当て具痕が、外面には平行タケキ後カキ目が施されている。9は土師器碗である。半球形を呈しており、口縁端部は丸く、外面にはハケ目調整を施す。内・外面には赤色顔料が残る。

② 女室内

・出土状況 (第23図)

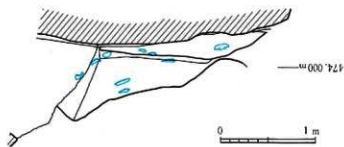
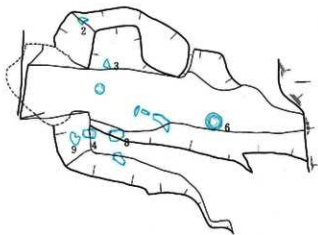
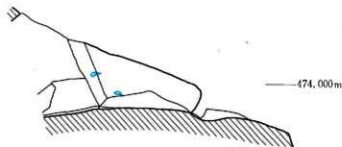
a) 埋葬人骨 女室内からは、成人男性1体、

成人女性4体、未成年1体の計10体が埋葬されており、羨門からみて右側奥に2体、右側手前4体、左側手前に3体が検出された。詳細については別項に譲る。

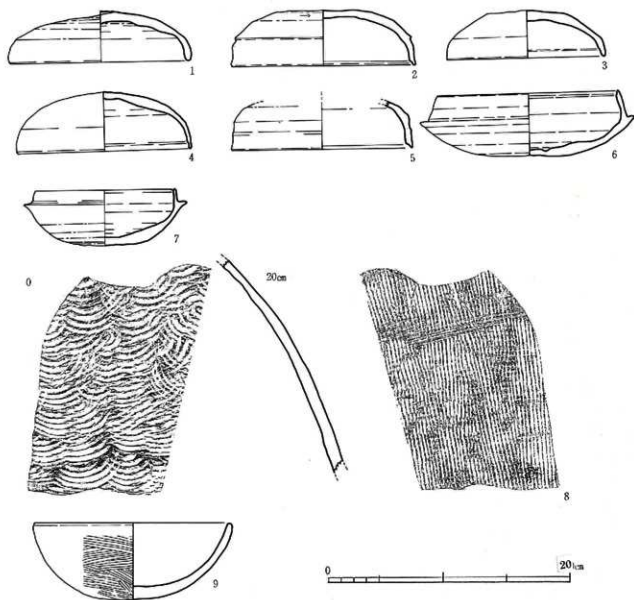
b) 副葬品 遺物はいずれも羨門からみて右側から出土している。右奥の集骨された人骨周辺からは鉄製の帯や紋具、黄金具、辻金具などの馬具や、刃部を奥壁に向けた鉄鎌12本、右手前の人骨周辺からは刀子や弓金具などの武器や、銅劍、耳環、管玉などの装飾品が出土している。

・出土遺物 (第23~25図)

10は銅劍である。外周に刻み目を施す、いわゆる円環有刻型であるが、磨滅が激しく、わずかに4箇所刻み目が確認できるだけである。11は碧玉製の管玉で、下部は一部欠損しているが片面穿孔である。12は銅地金張の耳環である。本体の一部に金張りの痕跡が残る。右手前の人骨頭部下から出土しており、この人骨に伴うもので

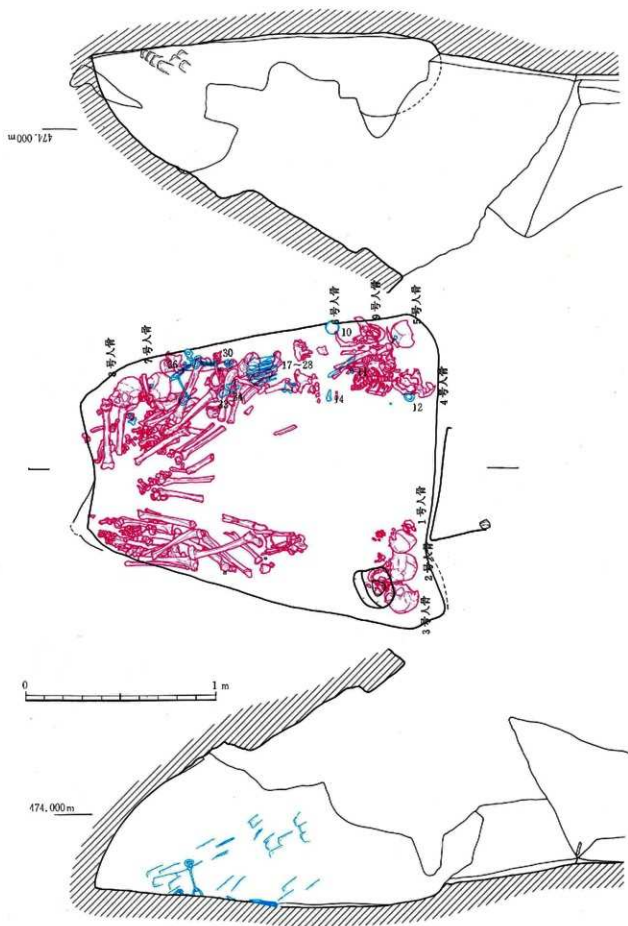


第21図 3号墓前庭部遺物出土状況 (1/40)

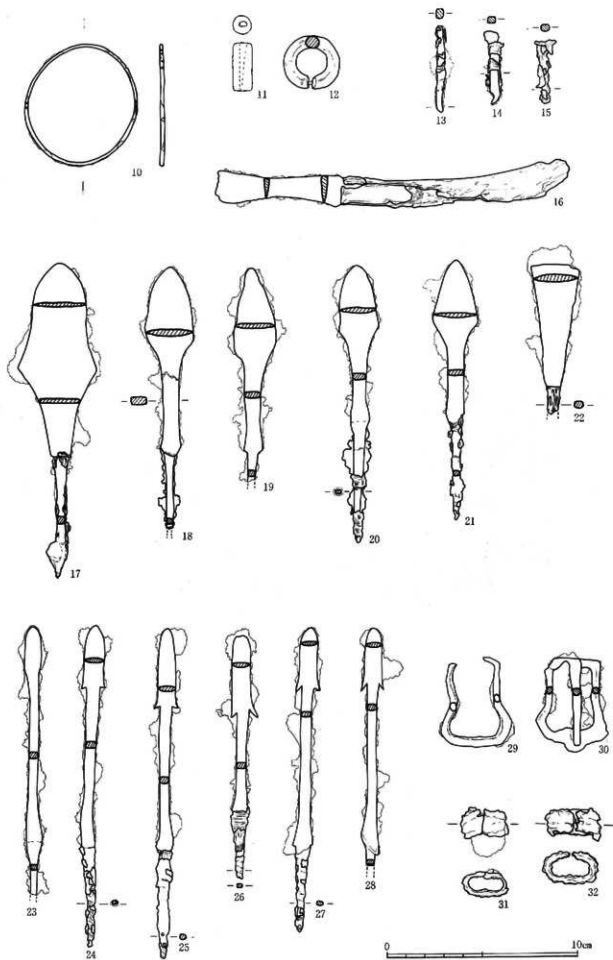


第22図 3号墓前庭部出土遺物実測図(1/3)

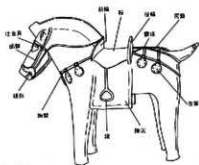
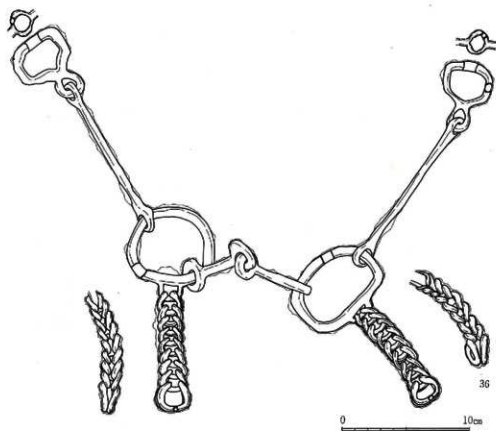
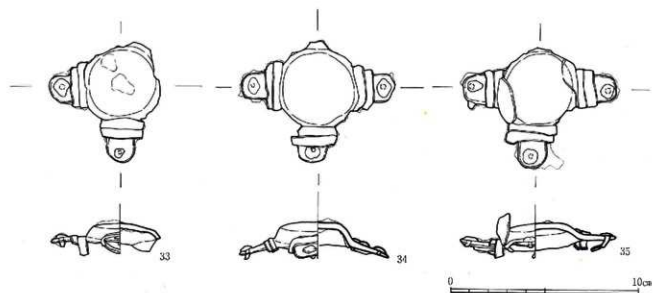
あろう。13~15は鉄製の弓付属金具の両頭座金付留金具で、いずれも木質が残存している。15は頭部が欠損している。16は中央から刃先部が欠損した刀子で、鹿角製の把部が残存する。17~22は短頭の鉄鎌である。17は柳葉類で闊(まち)を有する。18~21は主頭部で笠被部(のかつぎぶ)が長く闊(まち)はやや鈍角か。22は方頭斧箭式(ほうとうかまいりしき)とよばれるもので笠被(のかつぎ)はほとんどみられない。22~28は長頭の鉄鎌で鬮箭式(くりのみやしき)とよばれるものである。23は鎌身部が柳葉式で先端が丸みを帯びるいずれも笠被(のかつぎ)は闊笠被(まちのかつぎ)である。29~36は馬具である。29、30は繫(かい)を連接する際の紋具(かこ)である。基部に近い部分がくびれる環状形紋具(かこ)で、長さは29が5.3cm、30は5.4cmを測り、いずれも断面は円形を呈している。29には刺金は残存しない。31~35は辻金具である。31、32は貫(せめ)金具で、33~36は半球形の本体である。本来は4脚であるが、31は2脚、32・33は3脚しか残存していない。いずれも丸頭の鉾や板状の貫(せめ)金具が残存しており、革帯が辻金具に取り付けられた状態であったことがわかる。36は轡(くつわ)である。環状鏡板付轡であり、鏡板は、造り付けの小型の立間(たちぎき)を有す小型矩形立間造(こがたくけいたちぎきつくり)環状鏡板と呼ばれるものである。これに兵庫鎖を介して面繫(おもがひ)のベルト状



第23图 3号墓玄室内人骨·遗物出土状况(1/20)



第24图 3号墓玄室出土遗物实测图(1/2)



『長野県史・考古資料編』1998

第25図 3号墓玄室内出土遺物実測図(1/2・1/3)

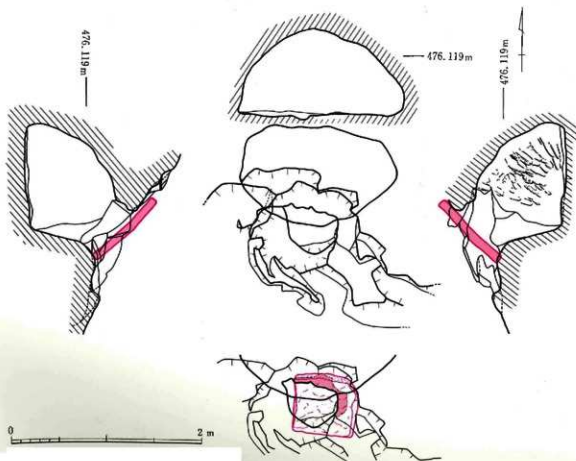
或いは帯状の大総（おおぶさ）に繋ぐ。引手は別造壺付引手、銜（はみ）は2連の小環銜（はみ）で、引手・銜（はみ）と鏡板（かがみいた）は別環耳（かんじ）によって連結する。引下（ひって）の長さは一方は13.5cm、残りの一方は14.5cm、断面は方形を呈しており、両端の環耳の径は約2cm前後である。引手（ひって）の先端にはいずれも長さ5cm、幅4cmの別づくりのいわゆるダルマ型の引手壺（ひってつぼ）が環耳を介して連接する。この引手壺の先端中央部には本体に90度の角度で幅2.5cmの環が鍛接され壺部を形成する。銜（はみ）金具の長さはそれぞれ7.6cm、8.4cmで、断面は方形を呈しており、銜（はみ）先および銜（はみ）を連結する環耳の径はほぼ2cm前後である。鏡板（かがみいた）は楕状鏡板で、断面は方形を呈する。一方は長径7.7cm、短径6.4cmで長さ2.2cm、幅1.1cmの方形の立間（たちぎき）が、残りの一方は長径7.5cm、短径5.8cmの長さ2.5cm、幅1cmの方形の立間（たちぎき）が鍛接される。立間（たちぎき）には、9連の兵庫鎖が連結しており、兵庫鎖の1単位は幅2cm、長さ2.5cmで、先端部のみ幅3cm、長さ2.5cmを測る。ここに革帯などを通し銜（はみ）を面繫（おもがひ）と固定する。これらの馬具はいずれも鞆（くつわ）周辺から出土していることから、1連のものであり、面繫（おもがひ）を構成するものであろう。

4号横穴墓

(1) 立地、調査前の状況

4号横穴墓は、調査区の丘陵東端、標高約476mに位置する。発掘調査実施前は、雑木林であり、試掘時に発見された。閉塞石は動かされた形跡があり、中に暗褐色土が流入していた。昭和16～17年頃、旧長湯小学校校庭拡張工事の際に発見された横穴墓の内の1基であろう。前庭部はほぼ消滅しており、全長は現況で約1.8m測る。主軸はほぼ南北を指す。閉塞施設、玄室内の順に調査を行った。

(2) 前庭部



第26図 4号横穴墓平・断面図 (1/40)

前庭部は構成の開発等によりほぼ消滅しておりわずかに痕跡をとどめるだけである。羨門の立面は不整形方形を呈しており、前庭部最深部の壁はほぼ中央に穿れている。羨門高は0.64m、幅は0.54mを測り、間室石は凝灰岩の1枚行である。

② 前庭部土層

前庭部がほぼ消滅しているため上層の観察は不可能であった。

(3) 羨道、玄室

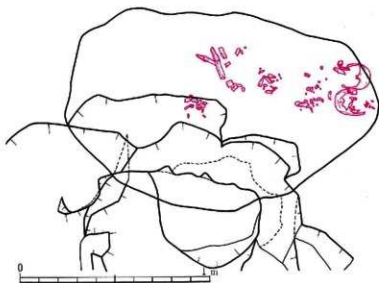
① 規模・構造

羨道の立面は不整形方形で平面は方形を呈す。長さは0.23m、玄門高0.57m、玄門幅は0.54mを測り、約40°の角度で玄室へ下り、さらに玄門から約73°の角度で玄室の床面へ下がる。床面は長さ1m、最大幅1.65mの半人形楕円形を呈す。床面はほぼ平坦で屍床は持たない。天井部はアーチ形で床面からの高さは中央付近で0.91m前後である。羨門にはベンガラが塗布されていた。

(4) 遺物の出土状態

・玄室内

玄室の中央奥壁よりに頭位を東に向け埋葬された2対の人骨を確認したが、遺物は検出されなかった。



第27図 4号墓玄室内人骨出土状況(1/20)

5号横穴墓

(1) 立地、調査前の状況

5号横穴墓は、調査区のほぼ中央、標高約475mに位置する。発掘調査実施前は、雑木林であり、樹根が残存していた。樹根を除去した際に、羨門を確認しその存在が明らかとなった。すでに開口しており、この横穴墓は旧長湯小学校校庭拡張工事の際に発見された横穴墓の内の1基であろう。阿蘇溶結凝灰岩に掘り込まれており、全長は約2.0mを測り、主軸はN-10°-Eにとる。前庭部は構成の開発によりほぼ消滅していた。したがって調査は玄室内だけ実施した。

(2) 前庭部 (第28図)

① 規模・構造

前庭部は、ほぼ消滅しておりその形状等は不明である。羨門の立面は不整形を呈し、羨門高・羨門幅は0.48mを測る。前庭部入り口付近で安山岩質の板石を3枚確認したが、この横穴墓に伴うかどうかは不明である。

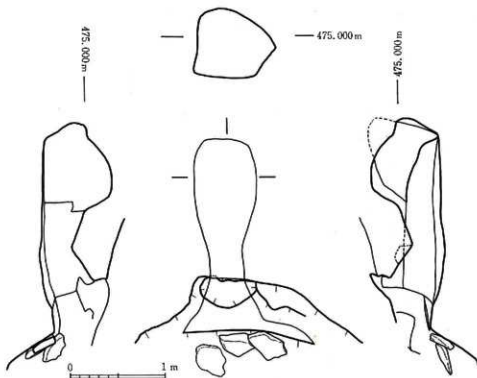
(3) 羨道、玄室 (第28図)

① 規模・構造

羨道の立面はほぼ台形、平面形は台形を呈し、羨門高・羨門幅は0.36mを測る。玄室は長さ1.2m、裾部幅0.44m、奥壁幅0.56mを測る妻人隅丸方形である。床面は中央部がやや窪み、屍床は有さない。天井部はアーチ形で、中央付近で0.72m前後である。

(4) 遺物の出土状態

すでに開口しており、人骨・遺物共に検出しなかった。



第28図 5号横穴墓平・断面図 (1/40)

6号横穴墓

(1) 立地、調査前の状況

6号横穴墓は、5号墓の下位にあたり、標高約474mに位置する。5号墓と同様に樹根除去作業中に閉塞石を検出し、横穴墓の存在が明らかとなった。阿蘇溶結凝灰岩に掘り込まれており、全長は約4.68mを測り、主軸はN-19°-Eにとる。保存状態は良好で、前庭部は完全に埋没しており、地表での確認はできなかった。調査は埋上及び前庭部、閉塞施設、玄室内の順に調査を行った。

(2) 前庭部

① 規模・構造 (第30図)

遺存する前庭部は、平面は隅丸の羽子板形で立面は逆台形を示す。全長は1.56m、玄門部で上部幅2.24m、底面幅1.76mを測る。床面は約10°の斜面で玄門へ下る。前庭部最深部は約75°前後の傾斜を持つ壁となり隔壁の傾斜は50°前後で立ち上がる。玄門は前庭部最深部の壁左よりに穿れており、玄門高・幅は0.61mを測る。閉塞施設は凝灰岩と川原石の2枚の板石と川原円礫を使用している。内側に凝灰岩の板石で閉塞した後、安山岩の板石を重ね、円礫で塞ぐ。また閉塞石の前部が掘り下げられているが、追葬時のものであろう。

② 前庭部土層 (第29図)

前庭部の土層は、若干の樹根等の攪乱を受けていたが、比較的明瞭な層区分が可能な状態で1層2層群に分層できた。以下堆積順に説明を加える。

第1層 黄褐色土層。バサバサしており、しまりなし。

a…遺物を含む。閉塞石を覆うように傾斜して堆積している。墓前祭祀後の二次堆積である。

b…a層より褐色が強い。

第2層 黄褐色土層。しまりはやや強い。凝灰岩を多く含む傾斜して堆積する。墓前祭祀面。

第3層 灰褐色土層。しまりが強く、凝灰岩のブロックを含む。いずれも追葬後の二次堆積である。

a…しまりが強く、凝灰岩のブロックを多量に含む。

b…a層より褐色が強い。レンズ状に堆積する。須恵器片を1点検出した。

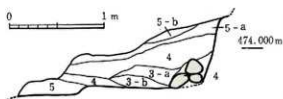
第4層 明黄色土層。しまりはあまりない。閉塞石を覆うように傾斜して堆積する。追葬後の二次堆積である。

第5層 灰白色土層。しまりが強く、凝灰岩のブロックを含む。初葬後の二次堆積である。

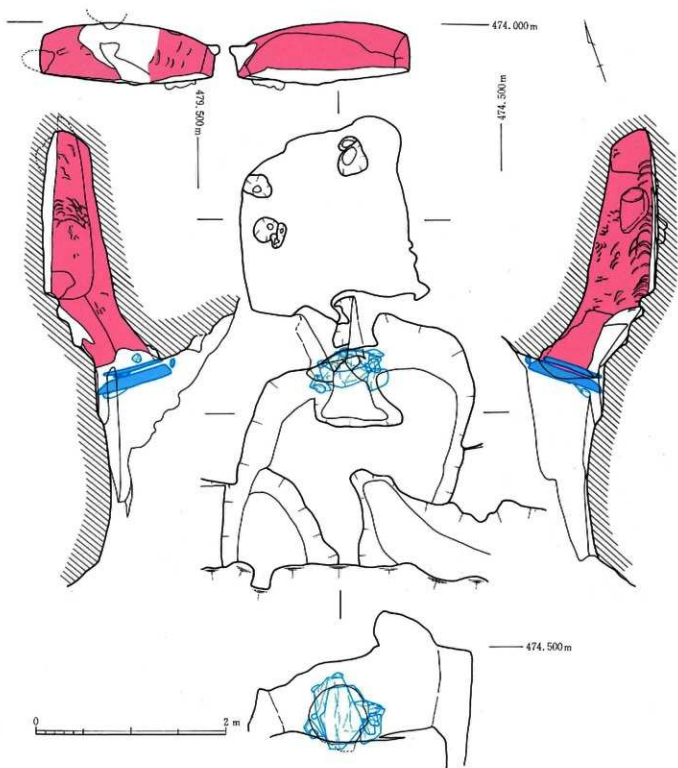
以上のことから、本横穴墓では2回の埋葬と墓前祭祀に関わる行為が認められた。

(3) 羨道、玄室 (第30図)

羨道の立面形は楕円形を呈しており、長さは0.8mで玄門高0.56m、玄門幅0.64mを測り、約32°の角度で玄室へと下る。玄門付近では第33図のように刺突した刀子を確認した。玄室は長さ1.69m、裾部幅2.08m、奥壁1.76mを測る隅丸方形で、床面は中央部がやや窪み、屍床は有さない。天井部はアーチ形で床面からの高さは玄門付近で0.72m前後である。天井部及び玄室内壁にはベンガラが塗布されている。



第29図 6号墓前庭部土層 (1/40)



第30图 6号基平·断面图(1/40)

(4) 出土した遺物

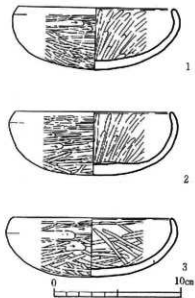
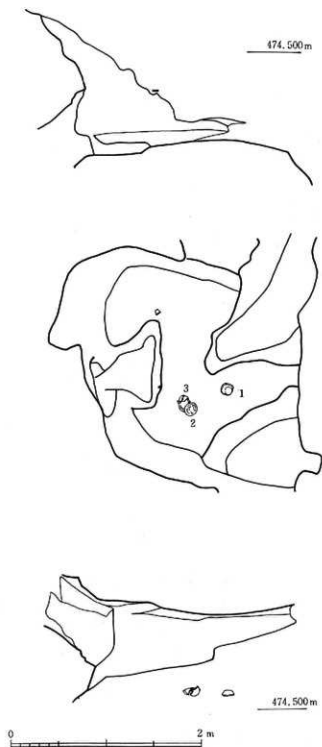
① 前庭部

・出土状況 (第31図)

前庭部での出土層位については、土層の項で説明したように、第5層より土師器椀3点が出土している。これらの遺物は、前庭部がほぼ埋没してから供献されたものであり、祖霊祭祀用の供献土器の可能性が高い。

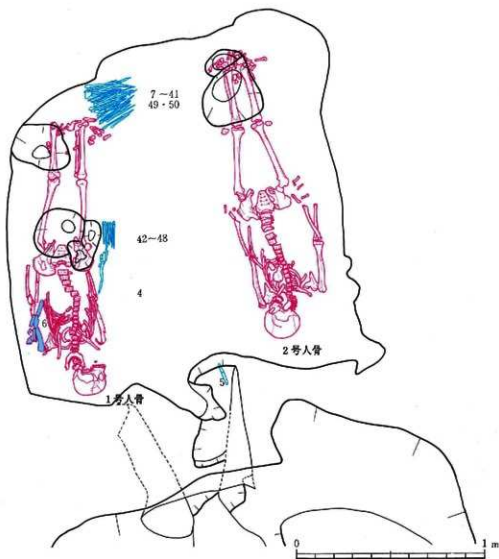
・出土遺物 (第32図)

ヘラ削りを施し、外面には細かいミガキが、内面には1・2は放射状のミガキが施されており、3は、1・2同様にハケ目調整、1-3は黒漆を塗布した土師質土器椀である。いずれも口縁部は内湾し端部は内傾気味にのびて丸い。1・2は、ハケ目調整後、ヘラ削りを施し、外面には細かいミガキが、内面に横・斜め方向のミガキを施す。



第32図 6号墓前庭部出土遺物実測図 (1/3)

第31図 6号墓前庭部遺物出土状況 (1/40)



第33図 6号墓玄室内人骨・遺物出土状況 (1/20)

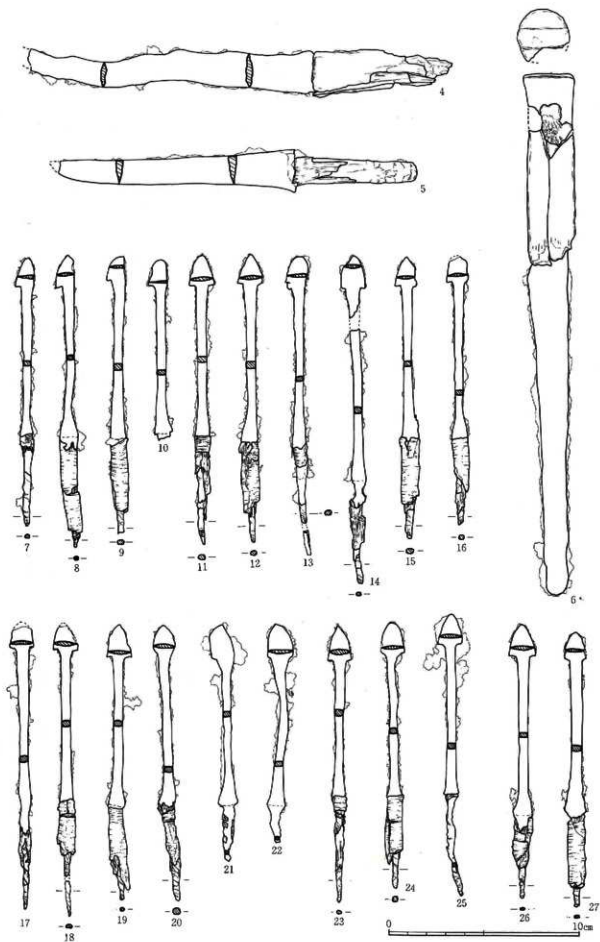
② 玄室内

・ 出土状況 (第33図)

- a) 埋葬人骨 玄室内からは、成人男性2体、頭部を玄門に向けた仰臥伸展葬で埋葬されていた。埋葬時の状態を保っており遺存状態も良好である。詳細については別項に譲る。
- b) 副葬品 玄室内からは、刀子や蛇行剣、鉄鏃などの武器類が出土している。刀子は左側人骨左上胸部に置かれた状態、蛇行剣は左腰部付近に刃先を玄門に向けた状態で出土。鉄鏃はいずれも長頸鏃で、7本が人骨の左腰部付近に鋒を壁に向けて、足下には鉄鏃が37本左壁を向いた状態で出土した。右側人骨周辺には遺物は存在しない。

・ 出土遺物 (第34・35図)

4、5、6は刀子である。4は刃部が蛇行しながら刃先へとのびるいわゆる蛇行剣で、5は玄門右上に刺さっていた刀子である。6の把頭部には凸状の彫刻が施されている。いずれも把部には鹿角製装具を装着している。7～50は鉄鏃である。いずれも長頸鏃で、7～10は鏃身部の片側のみ刃部を有す片刃箭式(かたばみやしき)で、逆刺を持たず直角の開(まち)を有す。これらの鉄鏃は1号人骨の足元に付近に配置されたものである。11～48は鏃箭式(くりのみやしき)で11～41は鏃身が正三角形に近い形状、42～47は長三角形の呈し、直角の開(まち)は有し、47は逆刺を有す。48は腐食が激しく鏃身部の形状は不明だが片刃箭式(かたばみやしき)か。42～47は胸元付近に配置されていた。49、50は鉄鏃の基部である。



第34图 6号墓玄室内出土物实测图(1/2)

7号横穴墓

(1) 立地、調査前の状況

7号横穴墓は、調査区の丘陵東端、標高171mに位置する。調査区東端にはテラスが一部残っており、試掘時には東端で8号墓が確認された場所である。8号墓を確認するためにテラス上の清掃を行っていた際に、飾り縁の一部が確認され、その存在が明らかとなった。他の横穴墓と同様に阿蘇溶結凝灰岩に掘り込まれており、全長は約5.1mを測り、主軸はほぼ北をとる。飾り縁の一部が露出していたが保存状態は良好で、前庭部は完全に埋没しており、地表での確認はできなかった。調査は前庭部プランの確認後、埋土及び前庭部、閉塞施設、玄室内の順に調査を行った。

(2) 前庭部

① 規模・構造 (第36図)

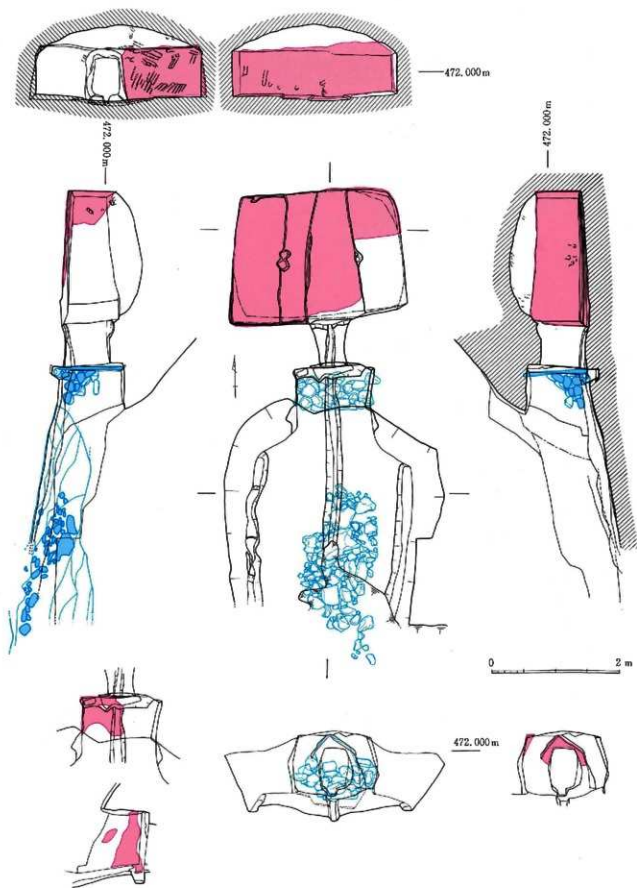
前庭部は全長3.94m、入口で上部幅2.8m、床面2.2m、羨門部で上部幅3.24m、底面幅2.16mを測る。平面は隅丸羽子板というよりもシャモジ形に近く、立面は台形を示す。幅1.28m、高さ1.04m、奥行0.64mを測る飾り縁を有しており、その平面は方形、立面はやや胴張りの方形を呈す。床面は約10°の斜面で羨門へと上り、前庭部最深部は85°前後の傾斜を持つ壁となり御座の傾斜は35°～60°で立ち上がる。床面中央や入口付近には、拳大から人頭人までの凝灰岩のブロックを多量に山積みしており、女門から前庭部中央と左右の壁際には排水溝が続く。羨門は前庭部最深部の壁のほぼ中央に穿れており、この壁には閉塞石を固定するために羨門上部には山形の飾り縁が、床には逆台形の膝が穿かれている。羨門の立面は縦長でやや胴張りの縦長の台形で、高さ0.64m、幅は上部が0.33m、下部が0.44mを測る。閉塞石は川原石(安山岩系)の1枚石であり、人頭大の川原石で閉塞石を上面まで支える。羨門付近や飾り縁、閉塞石裏側にはベンガラが塗布されていた。

② 前庭部土層 (第36図)

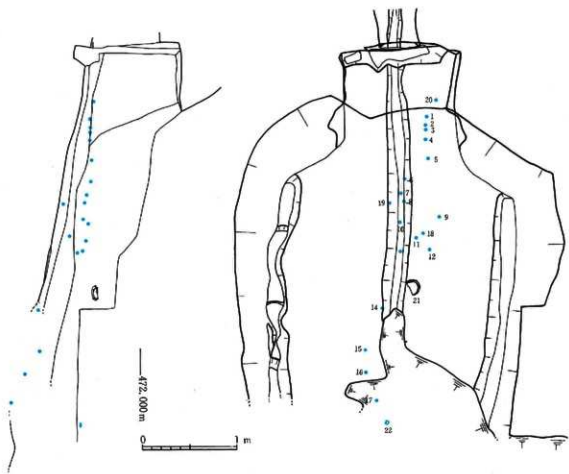
前庭部の土層については、7号墓の所在が予測できず、上砂除去の際に羨道付近を床面まで下げてしまったが、その他の土層については樹根等の擾乱を受けておらず、比較的明瞭な層区分が可能な状態で13に分層できた。以下堆積順に説明を加える。

- 1層 褐灰色土層。しまりはなく、凝灰岩の風化層である。2層を切るようにレンズ状に堆積しており、最終埋葬後の二次堆積である。
- 2層 褐灰黄色土層。1層同様に凝灰岩の風化層である。3層を切るようにレンズ状に堆積している。追葬後の二次堆積である。
- 3層 黄褐色土層。しまりはやや強い。2層に切られていることから、初葬後の二次堆積である。床面に斜めに堆積している。ガラス玉を含む。
- 4層 暗褐色土層。しまりはやや強い。3層の上面に堆積する上面に多量の凝灰岩のブロックを含む。初葬後の二次堆積である。
- 5層 灰褐色土層。しまりは弱い。墓道前壁方向から斜めに堆積する。
- 6層 灰黄褐色土層。しまりは弱い。墓道前壁方向から斜めに堆積する。
- 7層 黒褐色土層。しまりは弱い。墓道前壁方向から斜めに堆積する。
- 8層 黒色土層。しまり弱い。斜め方向の堆積である。4層上部の凝灰岩のブロックを最終的に覆っている。
- 9層 暗黄褐色土層。しまりは弱い。ややレンズ状に堆積する。
- 10層 黒褐色土層。しまりは弱い。9層・11層に切られるように堆積する。
- 11層 暗茶褐色土層。しまりは弱い。レンズ状に堆積する。
- 12層 茶褐色土層。
- 13層 表土層。

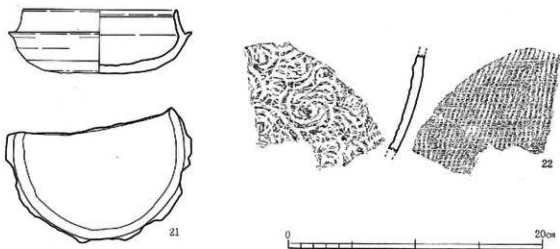
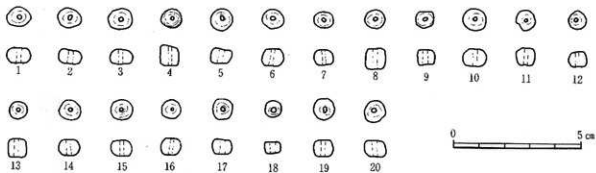
以上のことから、本横穴墓では3回の埋葬が認められた。また、土層観察から、凝灰岩のブロックについては、自然に流れ込んだものではなく、これらの凝灰岩にはノミ痕が認められることから、横穴墓造営後の初葬時に人



第36图 7号墓平·断面实测图 (1/60)



第37图 7号墓前庭部遺物出土狀況



第38图 7号墓前庭部出土遺物实测图(2/3·1/3)

為的に置かれたものであり、内部には須恵器が置かれており、なんらかの墓前祭祀に関わる行為が行われた可能性がある。

(3) 羨道、玄室

① 規模・構造 (第36図)

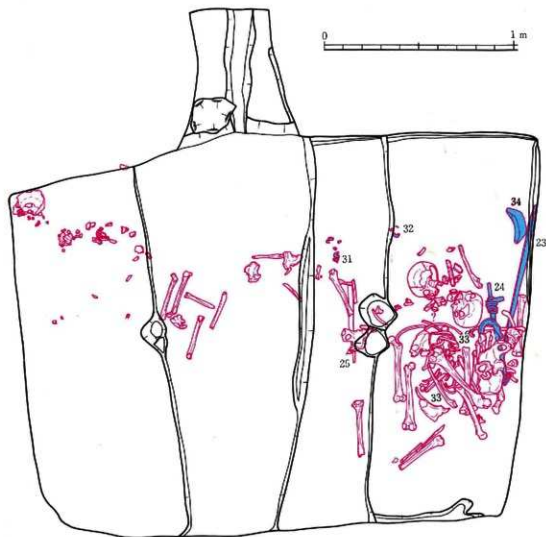
羨道の立面はやや胸張りの縦長の台形で、平面はバチ形を呈す。長さは0.74m、玄門幅は0.74mを測る。玄室は長さ2.1m、裾部幅2.61m、奥壁2.39mを測る隅丸台形で、床面は中央部がやや窪み、奥壁に直行して左に2段、右に1段の削り出しの屍床が設けられている。天上部は、側壁及び奥壁が垂直に立ち上がる鴨居形であるが、鴨居の削り込みは玄室前壁と奥壁右側にしか認められない。床面からの高さは中央付近で1.24m前後である。玄室内にはベンガラが塗布されている。なお、玄室奥壁に向かって左側屍床より水銀朱を検出しており、埋葬時に水銀朱が使用されている。

(4) 出土遺物

① 前庭部

・出土状況 (第37図)

前庭部からは、須恵器坏身とガラス小玉が出土している。ガラス玉は、前庭部中央を飾り線から前庭部入り口方向に向けて第37図のような状態で出土しており、その分布状況から意識的に散布した可能性があり、いずれも前庭部中央の排水溝や、3層もしくは4層内から多く出土しており、追葬時に伴う可能性がある。また、坏身は



第39図 玄室内人骨・遺物出土状況 (1/20)

前庭部に積まれた凝灰岩ブロックの中に正位で置かれていた。

・出土遺物 (第38図)

1-20はガラス小玉である。いずれも藍色や青色であり、径は6mm~9mmの範囲におさまる。21は坏身である。見込み部にはカキ目調整痕があり、底部は平坦である。受け部は故意に打ち欠いている。立ち上り内面には沈線を巡らす。22は甕片か。内面には同心門の当具痕が、外面に並行タタキ後カキ目調整が認められる。

② 玄室内

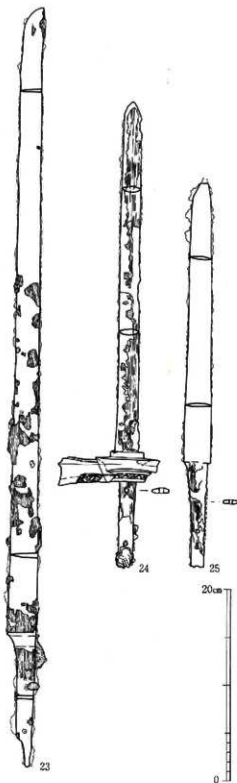
・出土状況 (第39図)

a) 埋葬人骨 右側壁際で3体の人骨が埋葬されていた。2対は左側の屍床に集骨され、1体は通路から右側の屍床にかけて散乱した状態で遺存しており、いずれも埋葬時の状態を保っていない。詳細については別項に譲る。

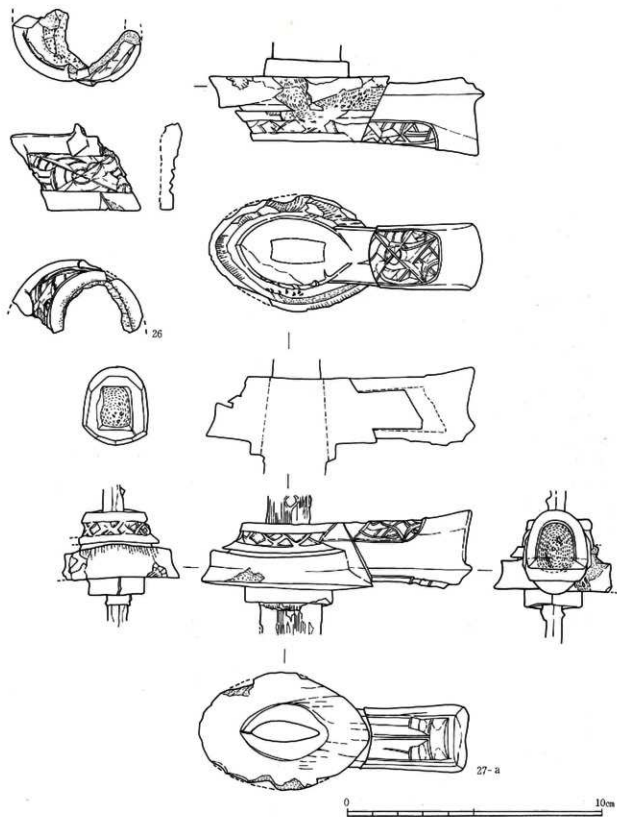
b) 副葬品 玄室内からは、太刀や剣などの武器や、ゴホウラ貝製の貝輪やヤコウ貝製の垂飾品などの装飾品、石枕などが出土した。右壁際から出土した太刀や剣には直弧文で装飾された鹿角製装具が残っている。貝輪は集骨した人骨内から出土したが、出土状態から装着していた可能性がある。垂飾品については右側1段目の屍床から、破砕した状態で出土している。貝製品の詳細については別項に譲るが、これらの遺物は遺存状態も良く、他の横穴墓の副葬品とは類似しないことから注目すべき遺物であり、被葬者を考える上で重要な遺物であるといえる。

・出土遺物 (第40-46図)

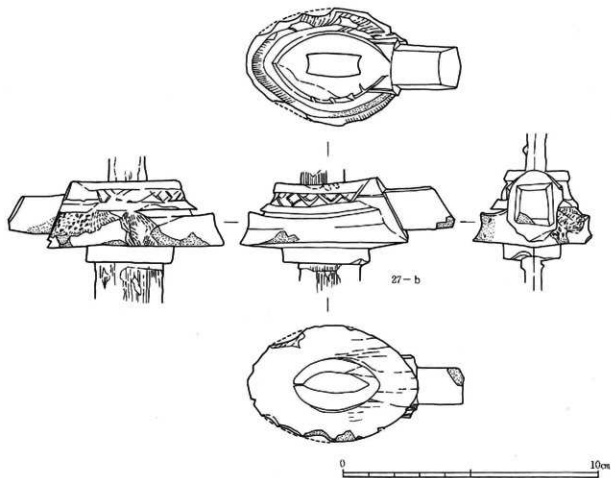
23は切刃造の直刀である。玄室右壁際で、直弧文で装飾した鹿角製の鞘尾装具が装着した状態で出土した。他の装具が破砕して四散していることから原位置は保っていない。全長80.1cm、刀身は長さ66.2cmで幅は切先付近で2.3cm、葉付近で3.1~3.2cmを測る。厚さは切先付近で0.32cm、茎付近で0.5cmとかなり薄い。茎部は長さ13.9cm、幅1.7~1.8cm、厚さ0.3cm、間(まち)は片間で、目釘穴が2箇所認められる。両面に木質の組織痕が残り、茎部区付近には鹿角が付着しており、鞘尻と同様に、鹿角製の刀装具が装着していたことが窺える。24・25は剣である。24は直刀とはほぼ並ぶように出土しており、把頭部の刀装具は破砕しているものの、直弧文で装飾した把縁、鞘口、鞘尾装具を完備した状態で出土した。ほほは原位置を保っていると思われる。全長49.2cm、刀身部は37.1cm、刃幅は2.4cm、厚さは0.6cmを測る。鑓(しのぎ)は認められない。葉部は長さ9.1cm、幅6.1cm、厚さ1.6cmを測る。先端は折り曲げられ、目釘穴は2箇所認められる。間(まち)に接して直弧文で装飾した鹿角製把縁を装着しており、葉部、刀身部には木質組織が残っている。25は右側通路に面した屍床に刃先を玄門側に向けて出土。全長40.5cm、刀身部は29.6cm、間近くの刃幅は2.75cm、厚さは0.3~0.4cmを測る。23同様に鑓は認められない。刃部先端は破損しており、研



第40図 7号墓玄室内出土刀遺物実測図(1/4)

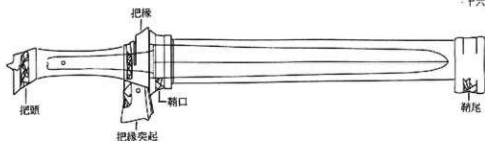


第41图 7号墓女室内出土遗物实测图(2/3)



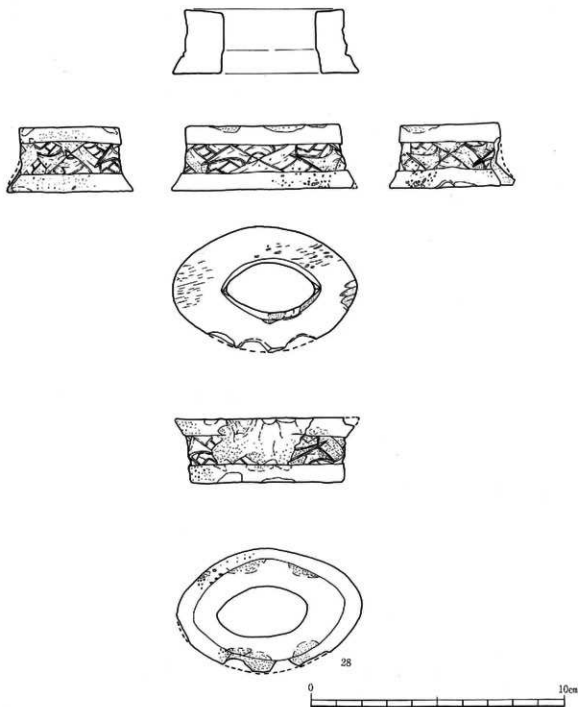
第42図 7号墓玄室内出土遺物実測図(2/3)

『十六山横穴墓』1983



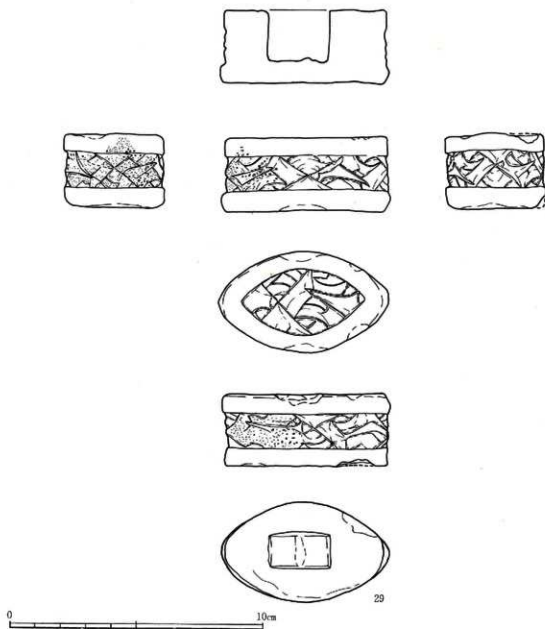
鹿角製刀装具各部の名称

磨の結果かどうかは不明だが左右非対称となっている。首部は長さ11.0cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmを測り、目釘穴は2箇所認められ基部には木質組織が残る。26-29は鹿角製剣装具で30・31は鹿角製刀装具である。26は把頭装具で破損しており、現存する部分で高さは突起部を含め3.4cmを測り、円筒形で縁取りは半線である。上部端面には突起を削りだし、直弧文はXの斜交軸（以下X軸）でA型が施文されており、頭部端面には単線が施されている。突起部と半月状部には外形と縁取りをつなぐ線が幹部に施されている。27-a・27-bは突起接合式の把



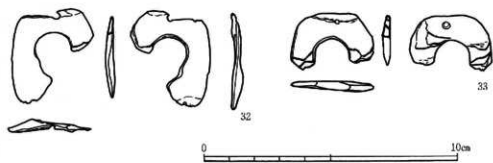
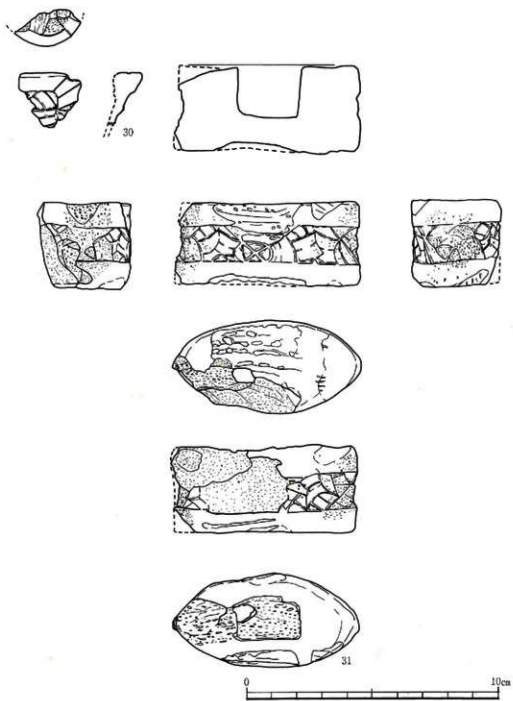
第43図 7号墓玄室内出土遺物実測図(2/3)

縁部である。基部の幅は6.7cm、高さ3.2cmを測る。楕円錐台形の基部は分面から見ると三つの部に別れ、中央の部分が一番幅広い。頭側部にはV字の斜交軸(以下V軸)が施文される。楕円錐状の突起部は幅5cm、高さが結合部で2.4cm、端部で3cmを測る。頭側にはB型の直弧文が施され、結合時にその縁取りと基部の段差のラインは一致する。突起部は基部と接合するために方形に穿かれているが、接合をするためのホゾ穴はもたず、実用的ではない。尾側にはいわゆるC型、縦横交差斜文様が施されている。縁取りは複線。28は鞆口である。楕円紡錘型。頭部は「逆ハ」の字に開く。幅は頭側で7.5cm、尾側6cm幅は2.3cmを測る。直弧文はX軸のB型の反転連接で施

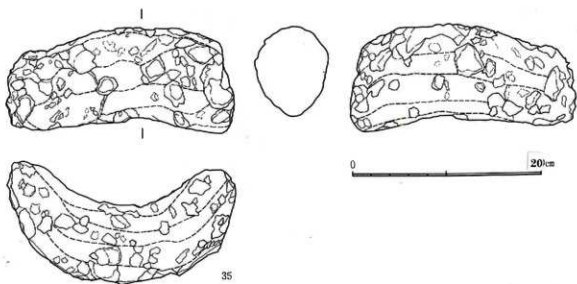
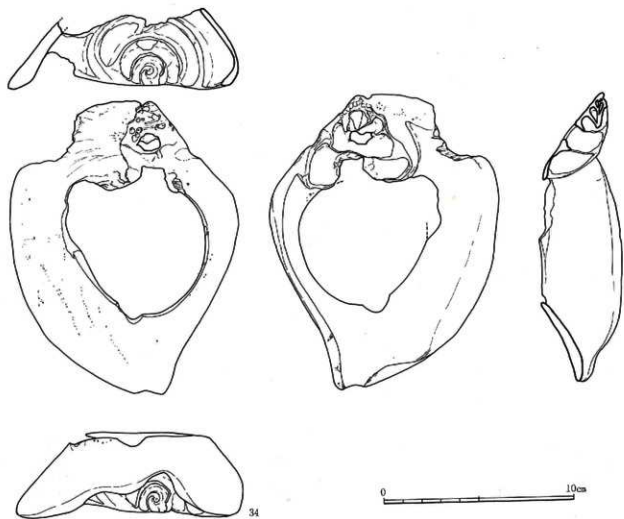


第44図 7号墓玄室内通物出土状況(2/3)

文されている。29は鞘尻である。28同様断面は栴門紡錘型である。軸6.5cm、高さ3cmを測る。側面の直弧文は四方にX軸とB型が反転連接で施文される。尻側端面の直弧文はB型の反転連接部が施文されている。縁取りは単線である。26は30と同様の把頭装具であるが、ラインが異なっており出十状態から直刀の把頭部の可能性が高い。31は直月の鞘尻である。29と同様に栴門紡錘型で、幅7.4cm、高さ3.3cmを測る。施文は側面のみである。鹿角の自然面が残っており、完全ではないが直弧文はA型並列連接で、V軸は短側面にX軸は側面に施文され連接している。32、33はヤコウ貝製の垂飾品か。32は2/3、33は1/2が残存しており、内孔径はいずれもほぼ1.4cm×1.5cmで円形を呈す。上部には0.2cm程度の穿孔がみられる。34はゴボウラ貝製の腕輪である。長径15cm、短径12cm、高さ6cmを測り、重さは167gである。内孔径は6.8cm×6.7cmで卵形を呈す。35は凝灰岩製の石枕である。半円状の成形した凝灰岩の上部中央を弧状に抉って受け部を形成し、下部は、石枕を安定させるために部分的に削り、僅かに底部を作る。幅23.5cm、高さ12.3cmを測る。底部がやや不安定な形状をしていることから、粘土等を使用し固定して使用した可能性がある。



第45图 7号墓玄室内出土遗物实测图(2/3)



第46图 7号墓前庭部出土遺物 (1/2)

8号墓

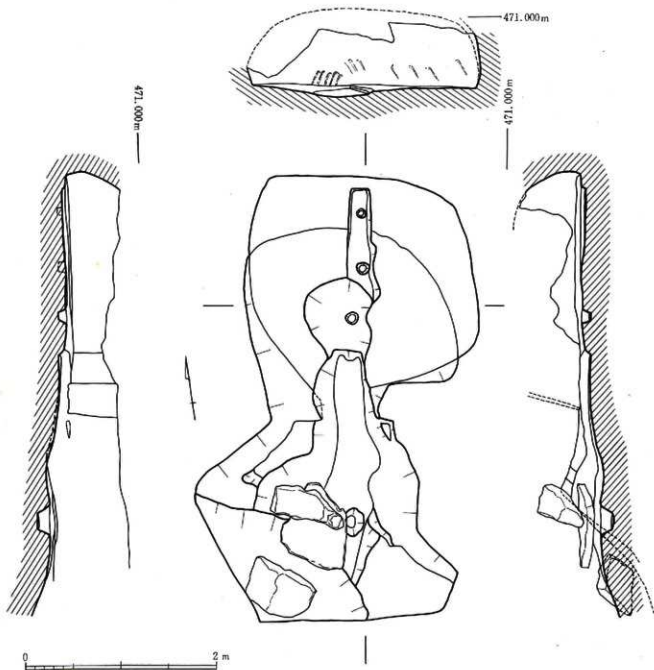
(1) 立地、調査前の状況

8号横穴墓は、調査区の東端、標高約471mに位置する。後世の開発等で削平され、床面と奥壁の一部のみが残存する横穴墓で、試掘時に発見された。旧長湯小学校校庭拡張工事の際に発見された横穴墓の内の1基と思われる。全長は約4.4mを測り、主軸はN-8°-Eにとる。

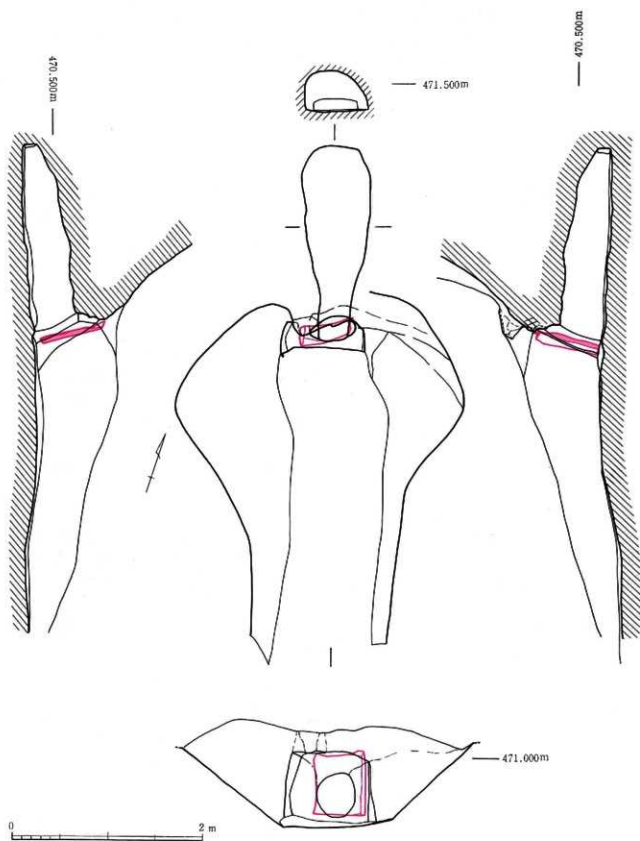
(2) 前庭部

① 規模・構造 (第47図)

現存する前庭部は全長1.84mを測る。すでに上部が削平されておりその構造は不明であるが、平面のプランから飾り縁を有していたと思われる。羨門は前庭部最深部の壁ほぼ中央に穿れており、幅は0.6mを測る。前庭部入り付近に板石が3枚散乱しており、この横穴墓に伴う閉塞石の可能性はある。



第47図 8号墓平・断面図 (1/40)



第48图 9号墓平·断面图 (1/40)

(3) 羨道、玄室 (第47図)

① 規模・構造 (第47図)

羨道及び玄室の天上部は削平されており、平面プランと奥壁部の一部のみ確認できた。羨道の平面は逆台形で長さは0.4mを測る。玄室は長さ2.16m、裾部は不明、奥壁側2.0mを測る。旧状を留めていないが隅丸方形を早していたと思われる。床面中央部に幅0.2m、深さ8cm、長さ2mの排水溝が走り、前庭部へと続く。天井部はアーチ形か。

9号墓

(1) 立地、調査前の状況

9号横穴墓は、調査区の丘陵東端の標高約470m、7号墓と8号墓の中間に位置する。7号墓及び8号墓の周辺の上砂除去中に閉塞石を検出し、その存在を確認した木間口の横穴墓である。主軸はN-21°-Eにとる。保存状態は良好で、前庭部は完全に埋没しており、地表での確認はできなかった。調査は前庭部プランの確認後、埋上及び前庭部、閉塞施設、玄室内の順に調査を行った。

(2) 前庭部

① 規模・構造 (第48図)

前庭部は現況で全長3.2mを測る。入口で上部幅1.44m、床面1.04m、羨門部で上部幅3.04m、底面幅0.92mを測る。床面はほぼ方形であるが、上部は中央羨門より大きく開き羨門部へと向かう、シャモジ形を示す。羨門付近には飾り縁の一部が残存しており、側壁高は羨門部で0.68mを測る。床面は中央入口よりで約10°の角度で0.76mほど羨門向かって上り、再び平坦面を形成して羨門へと至る。前庭部最深部は65°前後の傾斜を持つ壁となり側壁の傾斜は40°前後で立ち上がる。羨門は前庭部最深部の壁ほぼ中央に穿れており、平面プランは楕円形である。羨門高は0.49m、幅は0.3mを測る。閉塞石は川原石(安山岩系)の1枚石である。

② 前庭部土層

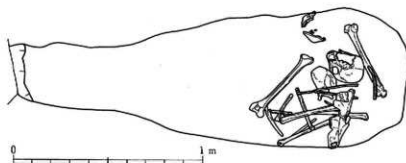
前庭部の土層については、9号墓の所在が予測できず、周辺の土砂除去や樹根を取り除く際に土層を掘り崩してしまい確認できなかった。

(3) 羨道、玄室 (第48図)

羨道の長さは0.53m、羨門幅0.27m、玄門幅は0.34mを測る。玄室は長さ1.54mであるが、玄室と羨道の境が明確でなく、奥壁手前で最大幅0.72mを測る隅丸羽子板形を早す。奥壁を有しており0.17mを測る。床面は中央部がやや窪み、屍床は有さない。天井部はアーチ型で床面からの高さは中央付近で0.49m前後である。

(4) 遺物の出土状況 (第49図)

前庭部では、遺物は確認できなかった。また、玄室内では人骨一体が埋葬されていたが、埋葬時の位置を保つておらず、奥壁付近に集骨された状態であった。遺物は検出しなかった。



第49図 9号墓玄室内人骨出土状況 (1/20)

第4節 考察

1. 遺構について

(1) 横穴墓の時期と形態について

豊後地域における横穴墓の様相については池邊千太郎氏の研究があり、氏はその分布から国東・速水地域、大分・海部地域、直入・大野地域、門田・玖珠地域に分け、横穴墓の地域性を明らかにすると共に、墓道（前庭部）・玄室平面形態・天井形態・屍床の各部位を主要構成要素として分類し、横穴墓の形態変遷を行っている。（註1）その分類に羨道と玄室の間の段差を加え、長湯横穴墓群の各横穴墓を分類すると以下のようになる（第1表）。

番号	分 類	タイプ	番号	分 類	タイプ
1号	1-B (隅丸方形)-g-III-段無	C	6号	1-F (台形)-f-(屍床無)-段有	B
2号	1-B (隅丸方形)-g-II-段無	C	7号	1-B (隅丸台形)-b-III-段有	B
3号	1-F (台形)-g-(屍床無)-段有	B	8号	1-B-?-III(?) - ?	C?
4号	2-J-g-(屍床無)-段有	A	9号	3-F-g-(屍床無)-段無	D
5号	3-F-g-(屍床無)-段無	D			

第1表 長湯横穴墓群の形態分類






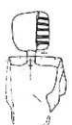



A=平入り楕円形タイプ B=妻入り隅丸方形(台形)タイプ C=隅丸方形(台形)タイプ(段無)
D=妻入り隅丸羽丁板形タイプ

次に、以上のように分類した各タイプの時間的な変遷を考えてみる。長湯横穴墓群で最も早い時期に造営された横穴墓はAタイプであり、4号墓が相当する。いわゆる初期横穴墓と呼ばれるものであるが、羨門が天井部に取り付く。次はBタイプであり3号墓・6号墓・7号墓が相当する。ここでは「平入り」から「妻入り」への形態変化が看取できる。これは埋葬形態の変化に伴うものであろう（横方向→縦方向）。同じBタイプでも、6号墓では、羨道が玄室へとかなり傾斜するなど初期横穴の特徴を残すが、3号墓では段差を有するもの、羨道の傾斜は緩斜面となり、玄室内での赤色顔料が認められないなど、新しい様相へと変化する。さらに7号墓では、屍床を有すようになり、玄室の幅が広くなり始める。その次はCタイプであり、1号墓・2号墓である。縦長の「妻入り」から方形の「妻入り」への変化が看取でき、玄室の奥行きと幅の長さがほぼ同様になる。羨道と玄室との間に段差は認められず、段差がスロープへと変化する。最終段階はDタイプであり5号墓・9号墓が相当する。横穴墓は小型化するが、これは屍床が消失し家族墓としての機能が衰えたからであろう。このタイプは羨道と玄室の形態的差異が認められなくなる。以上のことから本横穴墓群を古い順に並べると4号墓→6号墓→3号墓→7号墓→1・2号墓→5・9号墓となろう。

次に、これらの横穴墓をその墓域空間からグルーピングしてみると、横穴墓群東端のグループ（A小支群）、中央のグループ（B小支群）、西端グループ（C小支群）に分けることができよう。A小支群は1号墓・2号墓で構成される。出土した土器からいづれもほぼ同時期の6世紀後半に築造され、追葬も認められる。B小支群は、3号墓・5号墓・6号墓で構成される。5世紀末・6世紀初頭～7世紀まで築造・追葬が行われており、築造順位は6号→3号→5号である。3号墓には9体の人骨埋葬されており、出土遺物から6世紀前半～7世紀前半まで造営されている。C小支群は4号・7号・8号・9号で構成されており、5世紀～7世紀前半まで築造・追葬が行われている。以上のことから、5世紀代に始まった長湯横穴墓群の築造は、6世紀前半から後半にかけて隆盛し7世紀前半でその終焉を迎えることになる。

以上、前庭部及び玄室構造からグルーピングし、長湯横穴墓群内の横穴墓の構造的な変遷を追い、出土遺物を基にその造営時期を探ってみた。本横穴墓群の玄室平面形は基本的に、平入り→妻入り、楕円形→長方形→方形という変遷をたどり、天井は鴨居形もしくはアーチ形である。このタイプは豊後地方よりも肥後地方で多く認められるものであり、また、左側に屍床を有することからみても肥後地方の強い影響を受けたことが窺える。隣接

する竹田市の稲荷山横穴墓群3号墓も同様の平面形体を呈しており(註2)、特に3号墓は本横穴墓群の7号墓と類似し、掘り込みの石枕・屍床を有す。また、本横穴墓群では4号・6号と2基の初期横穴墓が確認されたが、最古のものは4号墓で、天井部に羨道が取り付く特異な形状を呈しており、羨道部と玄室床面の間に段差があることから堅穴系横1式石室にその系譜を求めることができる。この初期横穴墓の伝播ルートについては、このような特異な形態は他に類例がなく説明は困難であるが、初期横穴墓の一つである6号墓からは、日田市鯉塚古墳と同様に蛇行剣が出土しており(註3)、また黒漆が塗布された土師器が出土するなど日田・筑後地方の影響を受けた可能性が高い。しかし、前述の稲荷山3号墳は屍床を浅く掘りくぼめるなど宮崎県西臼杵地方の横穴墓の影響をうけており(註4)、また、平面形態や屍床には大分平野や肥後の影響もみられるなど、長湯横穴墓群の成立には日田・筑後だけでなく多方面の影響を受けたものと考えられる。これは長湯横穴墓群が所在するこの一帯が、大分と肥後、宮崎県西臼杵郡と竹田・直入地方、日田を結ぶ山間部ルートが交差する場所に位置するという立地的な要因によるものであろう。

支群		A	B	C
編年				
450	T K 23			 4号墓
	T K 47			
500	M T 15		 6号墓	
	T K 10		 3号墓	
550	M T 85	 1号墓		 7号墓
	T K 43	 2号墓		 8号墓
600	T K 28		 5号墓	 9号墓
650				

第50回 長湯横穴墓群 横穴墓編年表

2. 出土遺物について

長湯横穴墓群の調査では9基の横穴墓（内木間口5基）を検出した。特に木間口の横穴墓の前庭部や玄室から出土した遺物は、須恵器や土師器などの供献土器や、鉄刀、鉄剣や鉄鏃、馬具やガラス小玉、貝製装飾品などで、すでに報告したとおりである。これらの遺物は、それぞれの横穴墓の造営時期や他地域との交流、地域の歴史を解明する上でたいへん貴重な資料といえる。前庭部から出土した遺物については、後世の擾乱などにより埋葬当初の状態では出土していないものも含まれており、遺物の一括性については充分考慮して取り扱いつながりながら遺物について説明を加えていくが、貝製品については付録に譲る。

(1) 土器について

① 須恵器

須恵器は、1～3、6、7号墓で出土しており、いずれも主に前庭部から出土している。前庭部出土の須恵器については墓道を分層しながら発掘調査をしたので、2号墓のように、墓前祭祀に関わる行為が認められる良好な一括資料を得ることができた。また2号墓については前庭部だけでなく玄室内からも提瓶や高坏などが出土している。本来であれば、長湯横穴墓群から出土した須恵器の編年的検討を行うべきであるが、一括埋置状態にある複数の須恵器は2号墓のみであり、編年に耐えうるだけの資料が得られず、ここではあくまでも横穴墓の造営時期を探る上での資料としたい。また、6号墓前庭部出土の須恵器は、甕の細片が1点出土しただけであり、時期の比定は不可能なためここでは扱わないこととする。須恵器の編年については陶色編年（註5）を使用した。

・1号前庭部

前庭部で出土した須恵器は、蓋坏、坏身、高坏および壺片である。坏で最も古いものは5で、肩部に沈線が巡ることからMT85段階に相当する。次は1、2、4、8で、1、2、4の肩部には段や沈線は認められず端部内面も丸くおさまり、8の口縁部立上りが短く、いずれもTK43段階に相当する。3、6、7はTK209段階で、3はヘラ削りが認められず、5の端部外面は横ナデが施されている。7の口縁部立上りは短く内傾しており、口径は小さい。9は無蓋高坏であるが、体部には段を有し、口縁部やや外反する特徴を持つが、類似したものが上ノ原横穴墓群12号墓（註4）より出土しておりTK43段階に位置づけられる。10～15は大壺片である。口縁部はまだ肥厚しており、高坏と同時期のものであろう。

・1号玄室

玄室内からは出土した坏蓋は、肩部には明瞭な段や沈線は認められないが、口縁部には内傾する段や、沈線を巡らしており、口径も14cmを超えることからMT85段階に相当しよう。

・2号前庭部

前庭部出土の須恵器は、坏蓋や坏身、横瓶などである。横瓶は破片となって出土している。いずれの須恵器も、土層観察により最終閉塞後の墓前祭祀に伴うものであることが明らかになっている。また、これらの土器は前庭部出土中央部でからまるとまると出土しており、きわめて一括性が高く、供献土器としての坏と横瓶というセット関係が看取できる。蓋坏については、全体的に器形は丸く、坏身の肩部には不明瞭な沈線や稜が、端部内面にも内傾する段が認められるもの（8、10、11、13）と認められないもの（1、2、3、4、6、7、9）が混在する。坏蓋の口縁部の立上りは短く内傾するが、端部内面には内傾する段を有するもの（2、5）とそうでないものが混在している。いずれもMT85～TK43段階（小川氏編年のⅢ-A～Ⅲ-B段階）に相当する須恵器であらう。肩部に明瞭な段を有するTK10段階（小川氏編年Ⅲ-A段階）の坏蓋が1点存在するが（5）、出土状況からみて、墓前祭祀後の二次堆積層から出土しており、2号墓に直接関係のあるものとは考えにくい。坏蓋の受部には、明らかに故意に打ち欠かれた跡があるが、これは墓前におけるなんらかの祭祀行為の結果であらう。横瓶については、口縁部端部が折り曲げられ肥厚しており、坏と供伴することから同時期のものである。

・2号玄室

玄室内で出土した須恵器は提瓶と高坏である。人首の頭部周辺に配置していたことから、玄室内における供献土器のセット関係が看取される。提瓶の口縁部は意図的に打ち欠いてあり、その形態は不明であるが、把手は輪

状でなくカギ形を呈している。また、高坏は、桶状の身に低い脚部を持ち、体部には明瞭な縁はみられず1条の沈線がめぐるが、このような無蓋の低脚高坏は九州ではTK43段階からみられるようになる(註7)。上ノ原横穴65号では、稜線を有する低脚高坏が出土しており、TK43段階に位置づけていることから(註8)玄室内の遺物はTK43段階に位置づけたい。提籠の打ち欠いた口縁部については玄室内からは出土せず、玄室外で口縁部を打ち欠いた後に玄室内へ持ち込んだものである。この「打ち欠く」という行為は前庭部でも同様な行為が行われていることから、埋葬に関わる何らかの儀式であろう。

・3号墓道

出土した須恵器は坏と甕片である。最も古い坏は2で、肩部に明瞭な段を有しており、天井部も平坦であることからMT15段階(小田編年Ⅲ-A段階)に相当する。6は出土した須恵器の中で径が最大であり、口縁部には沈線が巡っていることからMT85段階に相当する。2号墓と同様に、受部が意図的に打ち欠いてある。4、5は、肩部に段や沈線は認められず、TK43段階、7は体部の調整にヘラ削りが認められず、天井部はヘラ切り離しのままであり、7は体部の調整に丁寧なヘラ削りが認められるものの口径が12cm台と小さく、口縁部立ち上りは短く内傾することからTK209段階に相当する。

・7号墓道

前庭部から出土した坏身は、前庭部に積まれた凝灰岩のブロックの中に正位に置かれていた。口縁部部に内傾する段を有し、底部は平坦に仕上げられていることから、MT15~TK10段階に相当する。

② 土師器

土師器は3号墓から碗が1点、6号墓から碗が3点出土している。いずれも故意に口縁部を打ち欠いており、墓前祭祀に関わる行為が行われたのであろう。

・6号墓前庭部

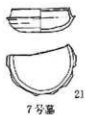
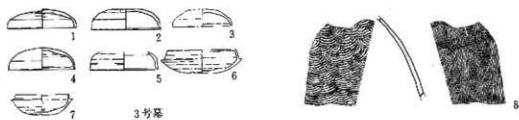
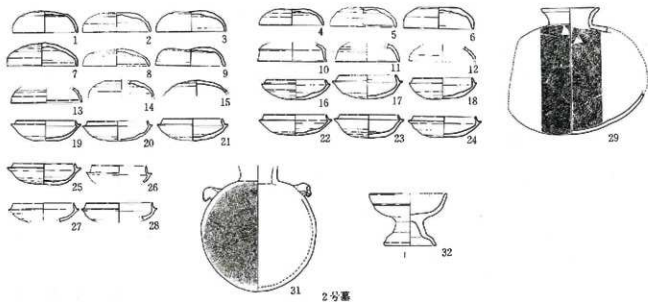
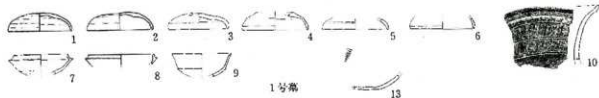
6号墓出土の土師器碗は、最終閉塞後に堆積した埋土上に重なるようにして出土したことから、一括埋置されたものである。これらの碗には黒漆が塗布されており、黒漆を塗布した土師器については大分県内では日田地域で模倣土師器などに散見できるが、このような黒漆を塗布した碗は、福岡県の筑後川・矢部川流域で5世紀の後半~6世紀前半頃に盛行し7世紀初頭にかけ減少することが知られており(註9)、貝元遺跡第121住居跡からは6号墓出土の土師器碗とその器形や調整方法が類似した土師器碗が出土している(註10)。また、口縁部が内湾する土師器碗については、県内では日田市大迫遺跡から5世紀後葉のものが出土しているが、内・外面共に丁寧な横方向のミガキが施されており(註11)、6号墓前庭部出土の土師器よりやや時期が古いと思われる。以上のことから口縁部が内湾する器形は古相であり、6号墓前庭部出土の土師器碗も放射状のミガキの問題が残るものの、6世紀初頭頃から前半までの範疇に含まれるものであろう。また、黒漆を塗布していることや、器形から筑後地域の影響を受けている可能性は高く、胎上も在地系の土師器とは異なっており、筑後地域から搬入された可能性が高い。

・3号前庭部

3号墓出土の土師器は、内・外面共にハケ目調整後、内面には丁寧なナデが施され、外面は部分的にハケ目をナデ消している。内面口縁部付近や外面には赤色顔料が塗布されている。口縁部は内湾せず、外上方へと伸びている。底部はまだ丸みを帯びていることからMT85段階以降のものであろう。大分市飛山横穴墓群1号墓から類似した土師器碗が出土している(註12)。

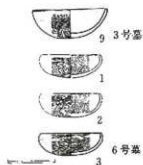
実年代(西暦)	500年		550年		600年		650年	
陶 邑 編 年	TK47	MT15	TK10	MT85	TK43	TK209	TK217	TK46
小 田 編 年	Ⅲ-A期				Ⅲ-B期		Ⅳ期	V期

須恵器実年代比較表



〈須恵器〉

〈土師器〉



第51图 長湯横穴墓群出土土器

(2) 裝飾品について

長湯横穴墓群では、横穴墓から碧玉・ガラス小玉などの玉類や、銅製の耳環・釧、ゴホウラ貝製の腕輪、ヤコウ貝製の垂飾品が出土した。詳細については本文に記載しているので、ここでは、ガラス小玉および銅鋼について説明を加える。なお、貝製の裝飾品については別項に譲る。

① 銅鋼

3号墓から出土した銅鋼は、本体に刻目を施した円環系有刻型とよばれるもので、全体に磨耗が激しく表面では4刻みしか認められない。昭和16～17年頃、川長湯小学校校庭拡張工事によって数基の横穴墓が発見されたが、その際にも有刻の銅鋼路が出土している(註13)。

県内の横穴墓から出土した銅鋼を表にまとめると次の通りになる(第2表)が、上小倉1号出土の銅鋼については青銅板を腕の形に折り曲げたもので外部の縁部には細かい刻み目が見られるものの、円環ではなく(註14)、円環系有刻型としては3号墓出土の銅鋼は県内では4例目となる。

副葬時期については、上ノ原22号を除くといずれもTK209段階であり、これは上ノ原横穴墓群での見解と一致するものであり(註15)、6世紀後半に実用的な裝飾品として流行したことが採取できる。以上のことから、3号墓で出土した銅鋼についても、TK209段階のものであろう。

地域	横穴墓名	銅路の種類と数量	有刻	時期
豊前	上ノ原22号	白銅質銅鋼1	○	5C後半
	上ノ原69号	銅鋼1	○	6C後半
	上ノ原80号	銅鋼1	○	6C後半
豊後	長湯3号墓	銅鋼1		
	小迫3区22号	銅鋼1		TK209
	小迫4区4号	銅鋼1		TK209
	鷹巣4号	銅鋼1		6C後半～7C前半
	四日市上ノ原63号	銅鋼1		TK217
	飛山31号	銅鋼1	○	TK209
	上小倉1号	銅鋼1		TK43～TK209
	上小倉4号	銅鋼1		TK209

第2表 県内横穴墓出土銅鋼一覧

(3) 鉄製品について

① 馬具

馬具は3号墓より轡(くつわ)・辻金具・絞具(かこ)などが出土した。轡(くつわ)は、馬の口にかませ、手綱によって馬を制御する重要な道具である。鏡板(かがみいた)は馬の頬当となり馬にはずされるのを防ぐ機能を持つ。この鏡板(かがみいた)には、環状・板状・棒状のものがあるが3号墓より出土した轡(くつわ)は環状鏡板である。これは実用的なタイプであり、事実(出土した轡(くつわ)の引手(ひって)の環耳(かんじ)は磨耗しており、実際に使用していたことがわかる。この環状鏡板付轡(くつわ)は大分県内では、上ノ原20号、38号、42号、飛山1号、4号、13号、小迫3区21号などで出土したことが知られている(註16)。これらの轡(くつわ)は3号墓出土の轡(くつわ)と同様に兵庫鎖や矩形の立開(たちぎき)を有するものもあり類似する点も多いが、大きく異なる点として、これらの轡の引手(ひって)が柄と壺部が一体になっているのに対し3号墓出土の轡(くつわ)は別造りの引手壺を有することがあげられる。同様の引手壺を有するものとして福岡県飯塚市植山横穴墓(鏡板は板状)、宮崎県えびの市の小木原1号(鏡板は板状)、小木原・久見迫21号地下式横穴墓出土の轡(くつわ)がある。小木原1号ではMT15段階の上器と併用しており、小木原・久見迫21号地下式横穴墓や植山横穴墓の築造時期は6世紀前半とされている(註17)。ところで、この環状鏡板付轡(くつわ)については、岡安光彦氏が轡の構成部品の分類を行い、須恵器との併用関係によって5段階の編年を行っている(註18)。その編年観ではこの別造りの引手壺を有する引手はMT15からTK10段階の須恵器と併用する初期の段階の轡(くつわ)として位置づけられる。また、環状鏡板が連兵庫鎖連結や小型の矩形立開(くけいたちぎき)、2連の小環銜(はみ)を有すること、また、鏡板(かがみいた)・引手(ひって)・銜(はみ)の連結方法は鑄金具を伴わない引手・

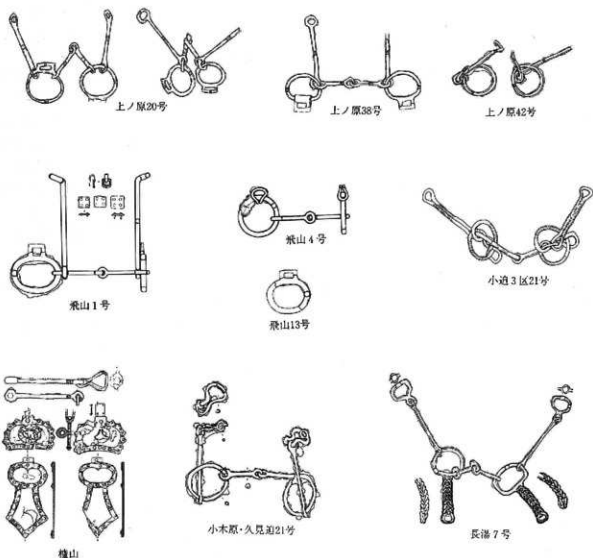
銜（はみ）別連法であることなど、いずれも環状鏡板付轡（くつわ）としては初期の段階の様相を呈しており、（註19）他の出土状況から見てこの轡はMT15からTK10段階の時期に位置づけたい。辻金具や香具もこの轡とセットで面繫（おもかい）を形成していたものであろう。

② 刀剣類

今回の調査では、刀子5本、蛇行剣1本、鹿角装鉄刀、鹿角装鉄剣、鉄剣各一振りが出土した。大きな特徴としていずれも鹿角製の装具を装着していたことである。ここでは、特殊遺物である蛇行剣と鹿角装鉄刀、鹿角装鉄剣について説明を加える。

・蛇行剣

6号墓からは鉄鏡とともに蛇行剣が出土した。蛇行剣は、身がS字状にゆるく蛇曲した剣形品である。剣というよりも輪あるいは手冚の形状ともいわれ（註20）本来の用途がまだ解明されていないもののひとつである。石川県の狐塚古墳、兵庫県亀山古墳、京都府原古墳などで出土しているが、九州では圧倒的に南九州の地下式横穴墓の出土が多い。横穴墓では福岡県行橋市の竹並横穴墓A34号からの出土が知られ、県内では日田市の塚塚古墳から出土した例が報告されている（註21）。この蛇行剣の時期であるが、蛇行剣が出土した地下式横穴墓はいずれも5世紀後半から末に築造されており（註22）、竹並横穴墓では5C代の初期横穴墓から出土している（註23）。塚塚古墳も5C代の古墳であり、6号墓出土の蛇行剣も5C代の可能性が高い。



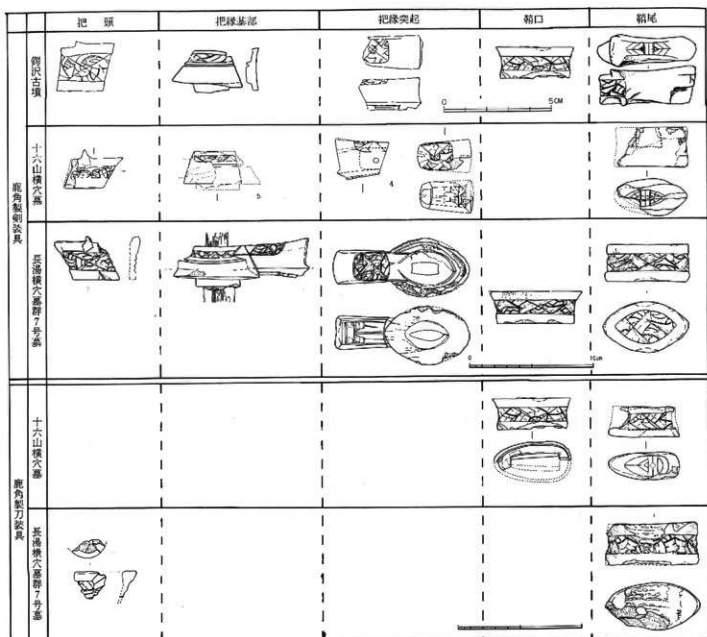
第52図 環状鏡板付轡（県内出土）及び別造り引手壺付き鏡板付轡

・鹿角製鉄剣・鉄刀

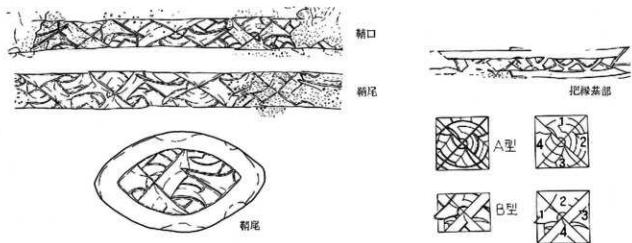
鹿角製の刀剣装具は5世紀から6世紀にかけて日本列島独自の刀剣装具として現れる。その多くは把頭・把縁・鞘口・鞘尾から構成され、鹿角を巧みに利用し、外周には直弧文を彫刻している。7号墓より鹿角製鉄剣・鉄刀が各一振出土したが、県内ではその他に三重町十六山横穴墓（註24）と日田町鵜沢（狐塚）古墳（註25）で出土している。十六山横穴墓では刀装具の鞘口と鞘尾、剣装具の把頭、把縁、鞘口、鞘尾が、鵜沢（狐塚）古墳では刀装具の把頭、把縁、鞘尾が出土している。ところで、直弧文については大きくA型とB型の2つに文様が分かれる。鹿角製の刀剣装具の直弧文については、かなり厳密なモチーフが保持されており、把頭装具にはA型直弧文の接続形が、把縁基部にはA・BまたはB・Bの接続形が、把縁突起の頭部にはB型、尻部には縦横交差帯文が、鞘口装具にはA・B及びB・Bの接続形が、鞘尾装具にはA・BまたはB・Bの接続形、鞘尾端に横帯文が施されていることが明らかとなっている。（註26）。県内で出土した鹿角製の刀剣装具の直弧文を比較してみると次のようになる。

遺 跡 名	第3表 県内出土鹿角製刀剣装具直弧文分類							対 象
	把 頭	把縁基部	把縁突起 (頭)	把縁突起 (尻)	鞘 口	鞘 尾 (外周)	鞘尾 (端)	
長湯横穴墓群7号墓	A	B半載接続	B	縦横交差帯文	B反転接続	B反転接続	B接続部	剣
〃	—	—	—	—	—	A A接続	—	刀
十六山横穴墓	A反転接続	B半載接続	B	縦横交差帯文	B	B	弧・横帯	剣
〃	—	—	—	—	A半載連結	A半載連結	弧・横帯	刀
鵜沢古墳	A反転接続	?半載連結	B	縦横交差帯文	—	B反転接続	弧・横帯	剣

剣装具では鞘尻・鞘尾の直弧文がB型に対し、刀装具のそれがA型という違いはあるが、基本的には典型的な鹿角装具のモチーフを堅持しているようである。しかし、7号墓出土刀・剣の鞘尾端をみると、他では弧・横帯文が施文されているのに対し、剣ではB型の接続部が施文され、刀においては施文されていない。奈良県塚山古墳出土の鞘尾のようにB型に近い帯状表現も存在するが（註27）、鞘尾端に弧状帯に横帯を重ねた文様を施文するのはきわめて一般的であり、まして鞘尾外周に施文されるタイプで端面に施文されないものは他に類例を見ない。このことについては、自然面の制約か、施文場所が剣の鞘尾にもみられるように一般性ないし法則性といったものからの距離の遠さ、その性質の弛緩として捉えられるという指摘があるが（註28）、事実、刀の鞘尻の場合、外周ではA型の1区のみが自然面の制約により施文されておらず、端面が自然面であることから、鞘尾端面に施文されなかった可能性は高い。では、剣の場合はどうであろうか。鹿角製装具の直弧文は他の器物のそれと比較して、帯の立体表現や輪郭線、斜線などにもっとも厳格な構図を保持し、モチーフとしてすでに完成しており、かつ硬化した構成を持っていたといわれる（註29）。第53回には7号墓出土の剣の把縁突起、鞘口、鞘尾の外周を展開したものである（把縁突起については写真も参照）が、把縁基部では半載連結を、鞘口・鞘尾についてはB型の1・3区間の接続をしており、また、把縁突起の尻側には縦横交差帯文が施されているなど、県内で出土した鹿角装具同様にいずれも忠実にその構図を守っている。唯一、鞘尾端だけ独自のモチーフを有しているわけだが、本来、縦横交差帯文や弧状・横帯文などの文様は、把縁突起や鞘尾の尻に当たる、基本的には見えない部分に施されるのが一般的で、これらの文様は、直弧文を構成する帯が、部分的に使用されたものであり（註30）、本来の施文精神は全体的なものであるという考え方からみるとかなり変則的な鹿角装具特有の施文方法なのである。その一定のルールに沿って製作される鹿角製装具の鞘尾端に、帯ではなく直弧文を施すことは異形であり、これをバリエーションのひとつと考えるか、時間的な変遷による一般性ないし法則性的弛緩か、工人差なのか、地域性なのか、いろいろな可能性が考えられるが、その結論を出すにはあまりにも出土例が少なく、今後の資料の増加を待たなければ明確な結論には至らないであろう。次に、鹿角製の装具を装着した剣・太刀の時期についてであるが、鹿角製装具は直弧文の構図を厳格に保持するため、そこに時間的な変遷を求めるのは難しいが、古墳



第53圖 泉內出土鹿角製刀劍裝具



第54圖 鹿角製劍裝具直弧文展開圖

時代の鉄刀については、すでに編年が行われており（註31）、刀の茎の形状によってその時期がある程度比定できる。7号墓出土の刃については、片側で直角、茎尻は隅を弧状に抉り落としたいわゆる隅状円で、胴部は凹から浅く切れこみ帯尻にかけてやや幅をせばめる中細の形状を呈しており、この形状を有す平造り鉄刀は5世紀後半に位置づけられている（註32）。これは鹿角製刀剣装具及び直弧文が盛行するのが5世紀であることからみても時期的な一致をみる。鉄剣についてもその出土状態から鉄刀とのセット関係が認められることから5世紀後半に位置づけることができよう。

・6号墓炭道部側壁の刺突刀子について

本文で説明を加えたように、6号墓炭道部右側壁には炭門から0.65cm、床面から高さ0.28cmの位置に、側壁より約10度開き、玄室方向に床面に対し約15度傾いた状態で刀子が約3cmの深さで凝灰岩に玄室側から打ち込まれていた。このような例は、これまでのところまったく知られていない。では、この刀子にはどんな意味が存在するのであろうか。第4表は国内における古墳や横穴墓内に鉄器が打ち込まれた例である。いずれも玄室内においてであるが、鉤状の製品や鉄鏃などが使用され、その目的として、玄室内に幕を張るためや器物を懸け吊るすためとされており（註33）、尾尾横穴では、悪魔封じという見解もなされている（註34）。6号の場合は、刀子は玄室ではなく炭道部で使用されていたが、玄室と炭道部はいずれも閉塞石の内側であり、広義に捉えれば、同じ空間と捉えることができよう。また、刀子は鉄鏃や鉄矛と同様に先の尖った武器であるという共通点も見出すことができる。とすれば、6号墓の刀子についても、その使用目的はこれまでの見解と同様に考えられそうであるが、幕などをはる場合には、当然2箇所以上の金具が必要であり、現地調査の際には、炭道部左側壁では刀子等の確認はできていない以上、幕を張るための金具というよりも、器物を吊るすためと考えたほうが自然かもしれない。また、刀子の使用については、古来より刃物は霊力を持つものとされ、現在でも魔除けとして葬送の儀式に使われており、その刀子を黄泉の国から現世へとつながる炭道部玄門付近に刺突することは、呪術的な意味を持つ可能性が高く、熊本県旭志村の尾尾横穴墓甲号の鉄鏃の見解（註35）と同様に除魔鎮魂の表現であった可能性が高い。

以上、6号墓炭道部側壁の刺突刀子について見解を述べてきたが、イザナギ神の黄泉国訪問の説話に見られるように、肉親を葬った後で、近親者が屍を見に行く風習、いわゆる殯（もがり）がある以上、近親者が横穴墓をたびたび訪れ、「コトドワタシ」の儀礼まで中を覗きやすいように幕などで横穴墓を閉塞していた可能性は十分考えられる。しかし、炭道部側壁の刺突刀子については県内では初例であり、一般的な行為であったかどうかは結論付けることはできないが、刀子の持つ意味を考えると、そこに現世と黄泉国の境界を見出しそうである。

第4表 刺突刀子等一覧

古墳及び横穴墓	県名	出土鉄器	本数	出土状況
八幡観音塚古墳	群馬県	S字状の金物	4	横穴式石室の左右側壁及び奥壁に各2本
上塚古墳	福岡県			玄室右壁に4個の小孔
岩屋古墳	鳥取県			側壁に小孔
中田横穴	福島県	釘		玄室奥壁
駒坂新田横穴墓3号・5号	福島県	棒状の鉄製品	4・2	天井に4箇所の打ち込み(3号)、天柱に2箇所(5号)
観音塚古墳	群馬県	L型角のある鉄棒	1	奥壁に向かって左奥側の壁面に積み込まれている
観音山古墳	群馬県	鉄製の鉤製品	6	左右の側壁、奥壁に各2個ずつ
城山古墳	千葉県	懸け金具	2	玄室入り口上部左右端・東壁上各1個
間際植横穴墓	神奈川県	フック状の金具	2	棺床前縁の天井に左右に打ち込まれる
城山横穴墓	〃	鉄鏃	2	右側壁上部
麩ノ木古墳	奈良県	フック状の金具	1	奥壁及び石棺の手前各2箇所
物集女中塚古墳	京都府	鉄鏃	3	玄室奥壁2箇所及び東西壁1箇所(壁間口)
香塚古墳	福岡県	鉄矛	3	奥壁上部の割り石の中に差し込む
尾尾横穴	熊本県	鉄鏃	2	左右側壁に各1箇所

③ 鉄鏃

長湯横穴墓の発掘調査では、計9基の横穴墓が検出された。長湯横穴墓の特徴として、人骨の残存率が良好である点と盗掘などの被害をほとんど受けていないことから、副葬品が良好に残っている点である。副葬品には3号墓出土の金環や銅剣、馬具、6号墓出土の蛇行剣、7号墓出土の鹿角製刀装具装着の鉄剣や鉄刀、またゴホウ貝製の腕輪などが出土した。また7号墓出土の人骨に関しては、傷を負った痕跡がわかるものもある。このように鉄器類を含めて、副葬品はかなり良好に出土し、またこれから触れていく鉄鏃に関しても樹皮を巻いている状況が非常に良く残存していた

豊後における鉄鏃の研究は、あまり進んでいないのが現状である。中でも洞野玲子氏の中津市上ノ原横穴墓を中心に行った鉄鏃の分類と変遷が新しいところであろう。さらに九州のなかでみても、鉄鏃研究は飛躍的に進んでいるとは言えず、北部九州を中心として古墳時代の鉄鏃の編年を試みている古野徳久氏の研究に寄るところが大きいのが現状である。

今回の長湯横穴墓出土の鉄鏃についてその分類を中心に試みることにする。なお、分類する際の基準及び鉄鏃の部位の名称に関しては、古野氏のを参考にして考えていくことを断っておく。

長湯横穴墓では、9基の横穴墓のうち、3基で鉄鏃類が出土した。鉄鏃が出土した横穴墓は2・3・6号墓である。まず、2・3・6号墓ごとに出土状況などの説明をしていく。説明順番に関しては、現状で古いと想定される横穴墓から追って説明していく。

[6号墓]

6号墓は調査区のはほぼ中央で検出した。約1.56mの前庭部から漢門を2枚の閉塞石で塞ぎ、漢門から玄室の床までは約0.52mほど下がる。また茨門部のすぐ東壁には朱子が突き刺さっていた。なお玄室の底面から天井までは約1mで低く、玄室壁全面には朱が塗布されていた。人骨の残存は良好であり、東と西側に1体ずつの計2体が確認できた。追葬は最低1回はあったと思われる。墓道からは須恵器が小田編年の3-b期が出土した。

鉄鏃は、西側の人骨の足元付近にまとまった状況で出土した。出土状況より何かで束ねていたと思われるが、その痕跡はわからない。その総数は44点である。

鉄鏃の種類は鏃身部で古野分類のE類(長頭類)及びF類(片刃類)が出土し、特にE類の数量が圧倒的である。E類は35点、F類は7点で、不明品は1点である。長湯横穴墓の中ではE類、F類ともに6号墓の出土量が最多である。E類は、そのほとんどが頭の部分は直角であり、特に鏃身部が短いもの(E-a)と長いもの(E-b)に細分できる。この細分した中ではE-a類がE類の約75%を占める。またF類は、6号墓出土の鉄鏃総数の約16%を占める。割合的には少ない。頭部に雫状をもつものなどは見当たらない。35に関しては鏃身部が他のものと比べ2倍以上も長い。E類、F類の鏃身部と頭部の長さを合計した全長の平均は、良好な資料の中でみて、E類は13.88cm、F類は13.74cmである。また6号墓からはE、F類以外の形態をもつ鏃身部は出土していない。

[3号墓]

3号墓は調査区はやや西側に位置している。約2.4mの前庭部から成り、漢門は閉塞石で覆われていた。玄室は天井部が崩落していたため、残存状況はやや不良であった。玄室底部から復元での天井までの高さは約0.8mであり、玄室プランは長方形でやや奥壁側が窄まる。また床面は墓道の底部よりも若干下がる。また3号墓からは長湯横穴墓の中では最多の9体の人骨が確認できた。副葬品は前述したが、金環や銅剣、馬具、刀子類などである。また墓道から出土した須恵器により、小田編年の3-b期～3-c期にあたり、9体も人骨の出土量から長期間にわたり、使用(追葬)してきたことがわかる。

鉄鏃の出土状況は、多くがまとまっている状況ではなかったので、埋葬時に置かれた位置からはズレが生じているものと思われる。それは、追葬時に人骨なども壁際に寄せられていたりするため、副葬品に関しても最終埋葬のものではなく、動かされたものと解釈できよう。

3号墓出土の鉄鏃は総数で12点である。12点の鏃身部の分類では、A類(方頭類1点)、B類(半頭類5点)、E類(長頭類5点)、F類(片刃類1点)に分類できる。割合は、B類の半頭類とE類の長頭類が多い。しかし

分類	A		B		C		D	E	F
	A1	A2	B1	B2	C1	C2			
6字標								 	
3字標			 					 	
2字標(α)			 					 	
2字標(β)								 	

※古野分類を参照

6号墓に比べると出土量はかなり少ないことがわかる。A類は、頭部から頸部にかけて直線的にすはまるものである。B類は、5点ともに鋒長が短いので、細分するとB2類に細分できる。15・17・18は筈被はb類のもので、16・10は筈被はc類のものであろう。特に15は刃部の裾が外へと張るものである。E類の長頸類は、鎌身部は長く、全長の平均は16.76cmである。9・11・13・19は刃の部分は逆刺となるものである。また5点ともに筈被はb類に属するものである。またF類の片刃類は12で、鎌身部は長く、刃は直角で明瞭である。筈被部は不明である。全長は14.2トcmである。3号墓からは、三角類、柳葉類は出土していない。

[2号墓]

2号墓は、調査区の西に位置する。墓道は約3.4mで、羨門には閉塞石で覆われる。玄室は高さが約0.84mで、玄室の平面プランはほぼ方形を呈する。墓道、玄室とも残存状況は良好であった。玄室からは人骨が2体、西と東側に埋葬されていた。西側の人骨は凝灰岩の床面(玄室床面)に直接埋葬されているが、東側の人骨は、玄室の床面から若干高くして、凝灰岩を残し、さらにホゾをいれている。また東側の人骨には完形の須臾器提振が埋葬されていた。また墓道からは須臾器の坏身が出土し、小田編年の3-1期と推定される。

鉄鏃は総数で、20点が出土した。古野編年という方頭類のA類、半頭類のB類、三角類のC類、長頸類のE類、片刃類のF類が確認できた。その鉄鏃の出土状況は西側の人骨には、人骨と平行するかたちで、A類、B類、C類が副葬されており、一揃に鹿角製刀装具付の刀子も確認できた。また東側の人骨にはその足もとに、E類とF類がまとめられた状況であった。束ねられていたと思われるが、その容器などの痕跡はわからなかった。30は方頭類のA1類である。頭部から頸部まで直線的にすはまる。B類は4点とも鋒長が短いB2類に属す。27・28は鎌身部の中央より下半で刃部の裾が顎者に外に張るものである。C類は32で、逆刺を有するもので、C1類に属する。逆刺部は脇挟で、浅く外に開くものである。E類は刃が鈍角・直角を成すE2類に属するものである。鎌身部の長さは、6号墓のそれよりやや長くなる。筈被は明確なものは少ない。F類は19の1点のみで、刃の部分は逆刺形状で、やや外に開く。筈被は不明瞭である。E類の鎌身部と頸部長さの合計平均は約14.6cmで、F類は19で、全長20.4cmである。

[小結]

以上のように簡略ではあるが、長溝横穴墓出土の鉄鏃を概観してみた。古野分類のB類とE類が量的に多く、柳葉類のD類は皆無であった。ここで、古野分類の編年観を遺構別に触れてみよう。まず6号墓は、E類とF類が出土した。E類はE-a類がⅢ期、E-b類がⅣ期の古相段階といったところか。古野編年ではⅢ期を5世紀後半から6世紀前半までみており、6号墓のE類に関しては、後出するⅣ期に該当するものも総数は少ないが相伴して出土しているので、6世紀中ばあたりに帰属できるか。またF類はⅢ期の範疇で捕らえられる。よって6号墓は6世紀前半～半ばの時期幅で考えられるであろう。3号墓は、A・B・E・F類を出土した。A類・B類ともにⅣ期主体で、少数はⅢ期まで遡るものもあるか。またE類はⅢ期が主体で、F類はⅣ期に該当する。よって3号墓はⅢ期～Ⅳ期の時期に相当し、鉄鏃のみでみれば6世紀代が主体であろう。しかし3号墓は追葬数が多く、馬具などの副葬品もあるため、もう少し幅を広く見たほうが良いだろう。2号墓は、A・B・C・E類ともにほぼⅣ期に納まると考えられる。F類もⅣ期の範疇で捉えられる。よって2号墓は、最低1回の追葬があることを考慮にいれても、6世紀代半ば～後半での所産ということになろう。また出土点数の多いE・F類を6号墓(古)と2号墓(新)の比較でみると、E類は全長の平均値は長さ化の傾向で、鎌身部も丸みを帯びながら長くなる傾向である。D類もまた、鎌身部と全長が長くなる傾向を掴めるであろう。

長溝横穴墓を古野分類編年を使用して述べてきたが、今後、小地域でさらなる分類、編年作業をすすめる地域差をより的確に出し、またより社会的側面や軍事面などのシステムまで触れていくこと少しづつ可能になってくるであろう。今後、鉄鏃の研究の発展に期待する。

(4) 長湯横穴墓群における葬送儀礼

長湯横穴墓群では、後世の開発や樹根による擾乱を受けていたものの玄室内・前庭部において葬送儀礼行為を確認した。

1. 玄室内祭祀

長湯横穴墓群で玄室内祭祀が確認できるのは、1号墓・2号墓である。それ以外の横穴墓では玄室内祭祀は認められなかった。2号墓では2号人骨左脇横に捉籠は横に伏せ、高坏は逆さに伏して安置されており、この被葬者の動物供献儀礼に伴うものである。捉籠の口縁部や高坏の口唇部は打ち欠いている。1号墓でも玄室内で坏身を確認したが、玄室内に堆積した土砂より検出したため、明確に玄室内祭祀が行われたかどうかは不明である。

2. 前庭部祭祀

長湯横穴墓において、初期の横穴墓では前庭部祭祀は認められない。わずかに6号墓の床面から壘片を1点検出したのみであり、これが埋葬儀礼に伴うものであるか確認はできない。前庭部で祭祀行為が明確に確認できるのは7号墓からである。7号墓では、初葬にともないガラス玉が前庭部に散布したことが確認でき、また、前庭部には凝灰岩のブロックを積み上げ、内部に坏身を正位安置した状況が認められた。この状況は3号墓でも認められる。なお、3号・6号墓については横穴墓がかなり埋没してからも墓前祭祀行為が認められるが、これは墓前祭祀というよりも追悼のための祖霊祭祀と考えたほうがよいであろう。次に明確な墓前祭祀行為が認められるのは2号墓である。坏・高坏・横瓶からなる飲食物供献儀礼であり、坏以外は破砕されていた。横瓶については、その破片をもって1個体を復元できず、また、その細片が1号墓前庭部から出土している事実から、上ノ原横穴墓群でみられたような儀礼後破砕され、複数の横穴墓に散布される非埋葬祭祀儀礼(註38)が行われた可能性が高い。

以上、長湯横穴墓群における玄室内及び前庭部における葬送儀礼について述べてみたが、玄室内祭祀はさておき、前庭部祭祀については、2号墓および7号墓を除くと、後世の擾乱や樹根による擾乱が激しく、プライマリーな状態は認められず、また、3号墓・6号墓7号墓の前庭部より出土した壘片についても接合関係が認められなかった。しかし長湯横穴墓では少なくとも6世紀になると前庭部において葬送祭祀が行われ、6世紀後半には飲食物供献儀礼は顕著になり玄室内祭祀も行われるようになり、7世紀以降には前庭部および玄室内での葬送祭祀は認められなくなるという変遷が辿れそうである。また、6世紀の初頃には、壘の破砕行為が認められることから、非埋葬祭祀儀礼が行われていた可能性が高い。この前庭部および玄室内祭祀の変遷は、大分県内でみられる祭祀の変遷とほぼ同様の動きである。(註39) なお、供献土器で破砕されなかった須恵器については、口縁部または受け部に打ち欠いた痕跡があることを付け加えておきたい。「コトドワタシ」の儀礼なのであろうか。

(5) まとめ

1. 調査の成果

長湯横穴墓群は、明治7年9月の妙見社移設の際に2基の横穴墓が発見され、その存在が明らかとなった。そのうちの1基から碧玉製の勾玉、ガラス玉、銅鋼、金環、鉄鏝が出土している。また、昭和16年~17年には校庭拡張工事に伴い数基の横穴墓が発見されており、この中には、すでに消滅しているが地下式上層として指定された横穴墓も含まれている(註40)。この横穴墓はマウンドを有していたとされ、隣接する竹田市の扇森山横穴墓でも同様のマウンドが確認されていることから、地下式上層というよりも初期横穴墓の可能性が高い。このように消滅した横穴墓を含め、昭和30年代には6基の開口した横穴墓が存在したことが知られており(註41)、今回の調査で確認した未開口の5基の横穴墓を含めると、少なくとも11基の横穴墓が長湯横穴墓群中に存在することになる。現在、竹田・直入地区では24ヶ所72基の横穴墓が確認されているが(註42)、多いところで11~12基の横穴墓で構成され(註43)ていることから、明治以前に開発等で消滅した可能性を考えても、長湯横穴墓群の総数は11基を大きく上回ることにはならないと考える。また、今回の調査では、良好な人骨19体と数多くの副葬品を検出したが、なかでも7号墓は鹿角装刀剣類、ゴホウラや夜光貝などの貝製品、ガラス玉など古墳に劣らぬ副葬品を有しており、地域の有力者の墳墓の可能性が高い。

さて、この横穴墓群遺構主体であるが、この対岸には、古墳時代前期の堅穴住居が確認された三反田遺跡や前田1遺跡、5世紀後半の堅穴住居が確認された前田田遺跡、6世紀後半の須臾器が出土した横杖遺跡など、古墳時代を通じて集落遺跡が展開しており、これらの遺跡が長湯横穴墓群と密接な関係があったのは明らかであり、時期的にも遺構主体の居住地と考えて問題はないであろう。また、調査例が少なく可能性の域を出ないが、この横穴墓と川を挟んで集落遺跡が展開するという状況は、「川」によって「現世」と「黄泉国」のが隔てられるという空間構造を創造しているようであり、古墳時代の構造的な世界観を含め、今後、横穴墓と集落の関係を解明していく上で大きな問題提起になるのではないかと考える。

ところで、横穴墓群に隣接する久住町郷野地区では仏原千人塚古墳群の調査で前方後方墳や前方後円墳が確認され、この一帯がヤマト政権と密接な関係があり、古墳時代前期における直入郡の中心地域であることが明らかとなった(註44)。古墳時代中期以降は、湯の上古墳を最後に大型の古墳や円墳は築造されず、芹川やその支流沿いに小竹横穴墓、須崎横穴墓群や長湯横穴墓群などの横穴墓群が分布するようになる。高橋徹氏は横穴墓の分布について大分平野を例に挙げ、その分布は均一な地理的分布を示さず、水利や地形的なまとまり等を共有する集団の生活圏をがすものであり、さらに古代律令期の郷の想定地をも表現しているという見解を示したが(註45)、これら横穴墓群はいずれも芹川及びその支流で繋がっていることから、横穴墓群間に有機的な繋がりが存在した可能性が高く、この一帯が古代律令期の朽網郷の中心であることからみても、すでに郷レベルのまとまりを形成していたと考えられる。この横穴墓が分布する直入町長湯と久住町の境界に当たるこの一帯は、芹川の諸支流が合流し、それによって形成された谷底平野が合流しており、古来より豊後から肥後へ、豊後内では玖珠や由布院へつながる流通・交通の拠点であったことは周知の事実であり、こういった立地的な条件も古墳時代前期に引き継ぎ中心地となりうる大きな要因の一つだったのであろう。しかし、古墳時代後期には郷レベルの共同体が形成されていた可能性の高いこの一帯では、湯の上古墳を最後に5世紀後半以降は後期古墳の存在は確認されていない。こういった傾向は竹田・直入地域だけでなく、古墳時代前期・中期において前方後円墳が築造された大野郡や海部郡などの地域でも後期古墳の分布は希薄なのである。しかし、一方では、前述の扇森山横穴墓(註46)や、二重町の十六山横穴墓(註47)、海部の成山横穴墓群(註48)など、7号墓のように古墳の被葬者に劣らぬ副葬品を有する横穴墓が存在することも知られている。このような状況については、在地方首長がその盛衰に伴い、政治的・社会的な背景で古墳の造営を許されず、横穴墓に埋葬されたと考えられてきた。しかし、7号墓が築造された6世紀前半は、「国造本紀」に記された豊後国に関わる国造は日田・大分・国東の三国造であり、『豊後国風土記』に散見する「土蜘蛛伝承」が示すように、地方には国造の支配に服さない、いわゆる「まつらわぬ」集団や首長が存在するなど、まだまだ完結した領域支配は確立していない時代である。また、5C代に普及した新式鉄製農具により、これまで手のとどかなかった狭隘な段丘や川間の谷間などへ開発が進み、水田経営の進歩に伴い社会の再編成が行われた時期でもある。長湯横穴墓群の周辺でも、古墳時代中期以降は台地上に大規模な集落は形成されず、芹川や市川の流域に集落が点在するようになり横穴墓群が造営されるようになる。この動きは、明らかに台地上の人々が水田経営のために川沿いに移動し、そこに形成された小集落が地形的なつながりにより共同体を形成したことを示すものであり、竹田市の菅生台地周辺でも同様な動きが見られる。この新たな共同体が形成される時期においては、豊後地域全体をみても横穴式石室墳は希薄であり、大野・直入地域では竹田市扇森山横穴墓やかつて存在した長湯横穴墓群の墳墓のようにマウンドを伴うものや、三重町十六山横穴墓や長湯横穴墓群7号墓のように優越した副葬品を持つ横穴墓が出現する。マウンドを伴う横穴墓は福岡県行橋市竹並横穴墓群で発見以来、九州の初期横穴墓で確認される例が増えてきている。県内でも上ノ原横穴墓群で確認されているが、扇森山や長湯の場合は竹並・上ノ原のように群中で捉えられるものでなく、福岡県小郡市二国丘陵の横隈銅倉遺跡1号墳のように1基単独で存在する(註49)。また、古墳と遜色ない副葬品を有する横穴墓については、同じ小郡市の花立山古墳群の3・4・6号墳から出土した豊富な遺物の考察の中で、同時期の古墳の副葬品に劣らないことから墓制の違いを短絡的に階層差に求めることは適切でないという見解もあり(註50)、周辺で横穴式石室墳の存在が確認できない以上、これらの横穴墓の被葬者は横穴式石室墳の被葬者と階層的な差異はなく、

新たに形成された共同体の首長墳と位置づけてもよいであろう。また、横穴式石室墳が希薄な理由については、集落の分散化に伴う労働力や経済力の問題、地形的な制約、また、石材の問題（これらの地域が、横穴墓を掘削するのに適した阿蘇溶結凝灰岩地帯である）等で、首長墳として横穴式石室を選択せず、横穴墓を造築したと考えることがより具体的ではないだろうか。ところで「景行伝説」が残る長湯横穴墓群の周辺は、前期古墳が存在するなどヤマト政権と深いつながりのある地域である。古墳時代後期においても、7号墓出土の直弧文を施した鹿角製刀剣装具を装着した鉄刀・鉄剣のように畿内を中心に古墳から出土するような遺物が存在しており、被葬者とヤマト政権周辺との関係が想定できる。(註51) また、「直人の墓」の設置に伴い「郡民化」が進んだのではないかという指摘や(註52)、「磐井の乱」後には、物部氏の「郡民化」が進んだともいわれており(註53)、この一帯はヤマト政権によって直接掌握された可能性が高い地域なのである。これは、この一帯が弥生時代より九州の東西南北を結ぶ流通・交通の拠点であることに起因するものであろう。このように、少なくとも「磐井の乱」以降、この一帯の支配体制は確立していくようであるが、大分平野において巨石を使用して横穴式石室が造営され、国造級の在地首長が登場する7世紀以降になってもこの一帯では横穴式石室墳の存在を確認できず、大分・海部地域にみられる巨石を使用した横穴式石室墳・小型の横穴式石室墳・横穴墓群といった幕制の編成秩序が認められないのである。この状況については、地域的集団の結合の未成熟による大和政権による直接支配や郡レベルを超えた国造の領域支配など、支配体制の枠組みの中で、在地首長と政治的地位とのバランスによって、首長墓として横穴式石室墳の造営を許可されない状況が生考えられる。しかし、律令時代には直入郡が置かれるように、すでにこの一帯では郡単位の地域的なまとまりが存在した可能性があり、郡全体をみても横穴式石室墳が存在しない以上、大分・海部地方の幕制の編成秩序とは異なり、この時期においても初期の段階と同様に首長墳として横穴式石室墳を選択せず横穴墓を造営した可能性が強いのである。あくまでも石材の問題が大きいのであろうが、そこには社会構造が大きく変化する中でも地域の主体性・伝統を維持しようとした在地首長の面目が感じられるのである。いずれにしても、この一帯の横穴墓は極めて地域性の強い幕制であるといえよう。

最後に、正倉院文書として伝来した天平9年度の『豊後国正税調』によれば、直入郡の項には「牧場の檢校」のため国司が来郡して2日滞在したことが記されている。(註54) また、天長3年(826)の太政官符には「但し、豊後国大野・直入・両郡、騎狐の児を出し」とみえるように(註55)、大野・直入両郡には馬を飼育し騎馬を得意とした集団が存在したことが窺われる。これはこの地域の生活の基盤が農業だけでなく、馬を使用した生業も大きな比重を占めていたことを連想させ、事実、3号墓からは馬具の面鞆一式が出土している。また、磐井の乱後には、物部氏が直入・大野郡の高原を中心とした騎馬兵団を郡民として組み入れていくとされるが(註56)、長湯横穴墓群の被葬者は、こういった騎馬集団の有力者であり、特に7号墓の被葬者は、こういった有力者をまとめた在地の首長層であったのであろう。ところで、7号墓の被葬者の頭骨や鎖骨、上腕骨や尺骨には刀傷が認められ、何らかの争いに巻き込まれ死亡した可能性がある。7号墓の築造時期が磐井の乱前後であることから、この被葬者も騎馬軍団を率いて戦いに参加したのであろうか。その関係が気になることである。やがて7世紀末になると、この一帯には石田遺跡・上城遺跡や日向塚遺跡のように官衙的な色彩の強い遺跡が登場し、前後するように長湯横穴墓群はその終焉を迎える。西別府元日氏は、これらの遺跡を村郷編成の中核的地点に登場した遺跡としているが(註57)、横穴墓群を中心とした共同体もその編成の中で、本格的に律令体制の中へと組み込まれていくのであろう。さらに9世紀には大宰府管内において職業的戦闘集団へと編成され、10世紀以降には国司や郡の貴族と結びついて彼らの奉仕する「国兵上・諸家兵上」と呼ばれるようになり、やがて豊後武士団へと成長していくわけであるが、その土壌はすでに古墳時代から育まれていたのである。

2. おわりに

今回の調査では木間口の5基を含む9基の横穴墓を確認し調査を実施した。その結果長湯横穴墓群の造営は5世紀後半に始まり7世紀にその終焉を迎えることが明らかとなった。これまで直入・大野地域では、初期横穴と6世紀後半の横穴墓の間に大きなヒアタスが存在していたが、この横穴墓の調査結果は、それを埋めるだけでなく横穴墓の終焉に至るまでの変遷を明らかにすることができた。また、別項のように、南海産の貝製品について

は熊本大学の木下尚子教授、被葬者や埋葬形態などについては九州大学の田中良之教授のご協力により科学的分析がなされ、古墳時代の埋葬形態について貴重なデータを得たり、横穴墓と集落の位置関係など多くの成果を上げることができた。しかし、副葬された須恵器や貝製品、鹿角製装具や蛇行剣などの伝播ルート、周辺の横穴墓群との関係を含めたこの一帯の社会構造、長湯横穴墓群の位置づけなど、今後明らかにしなければならない課題も山積しており、長湯横穴墓群の解明にはまだまだ時間を要するものと思われる。今後の資料の蓄積に期待したい。

最後になるが、この長湯横穴墓群は、その重要性から保存についての協議がなされたが、直入町当局や原竹田土木事務所の向うきな協議にもかかわらず、上法的に保存が不可能であることが明らかになり、調査後破壊されることとなった。現地保存ができなかったことは本当に残念であるが、県竹田土木事務所により現地には長湯横穴墓群の案内板が設置され、CGによる7号墓の復元などが行われこととなった。しかし、長湯横穴墓群の詳細な記録として、この報告書のもつ意味は重要であり、本書の刊行にあたってその責任を痛切に感じているところである。末筆ではあるが、本書の刊行までにお世話になった多数の方々に感謝すると共に、特に厳冬季に急峻な崖面にもかかわらず調査を共にした古荘サヨ子さん、古荘昌子さん、大塚たつよさん、大塚奈緒子さん、大塚久子さん、熊谷マチ子さん、広橋玲子さん、河野スミ子さん、小高隆己さん、王川剛石さんには名前を記して感謝の意を表したい。

- 註1) 池邊千太郎 2001「豊後地域における横穴墓の様相」『九州の横穴墓と地下式横穴墓 第1分冊』九州前方後円墳研究会
- 註2) 城戸誠・佐伯 治 1987『昔牛大地と周辺の遺跡 大分県竹田地区遺跡群発掘調査報告書』竹田市教育委員会
- 註3) 土居和幸・行時志郎 1994「惣田遺跡」『日田市歴史文化財発掘調査報告書第8集』日田市教育委員会
- 註4) 九州前方後円墳研究会編 2001「九州の横穴墓と地下式横穴墓」第2分冊 資料編
- 註5) 田辺昭三 1966『陶邑古墳址群Ⅰ』平安学考古クラブ
- 註6) 渋谷忠章・村上久和 1989-1992『上ノ原横穴墓群』Ⅰ-Ⅲ 大分県教育委員会
- 註7) 高橋徹・小林昭彦「九州須恵器研究の課題-岩山古墳出土須恵器の再検討-」『古代文化』第42巻第4号
- 註8) 渋谷忠章・村上久和 1989-1992『上ノ原横穴墓群』Ⅰ-Ⅲ 大分県教育委員会
- 註9) 重藤輝行 2000「福岡県における古墳時代中期-後期の土師器」『九州の古墳時代の土師器』九州前方後円墳研究会
- 註10) 重藤輝行 2000「福岡県における古墳時代中期-後期の土師器」『九州の古墳時代の土師器』九州前方後円墳研究会
- 註11) 大迫遺跡 1997「大迫遺跡」『九州自動車道関係歴史文化財発掘調査報告書(6)』大分県教育委員会
- 註12) 渋谷忠章・真野和夫 1973『飛山』大分県教育委員会
- 註13) 渋谷忠章 1984「直入地方の夜明け」『直入町史』直入町
- 註14) 九州前方後円墳研究会編 2001「九州の横穴墓と地下式横穴墓」第1分冊 特殊遺物・遺構
- 註15) 渋谷忠章・村上久和 1989-1992『上ノ原横穴墓群』Ⅰ-Ⅲ 大分県教育委員会
- 註16) 九州前方後円墳研究会編 2001「九州の横穴墓と地下式横穴墓」第1分冊 特殊遺物・遺構
- 註17) 九州前方後円墳研究会編 2001「九州の横穴墓と地下式横穴墓」第1分冊 特殊遺物・遺構
- 註18) 岡安光彦 1984「いわゆる「素環の髷」について-環状鏡板付髷の形式学的分析と編年」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 註19) 岡安光彦 1984「いわゆる「素環の髷」について-環状鏡板付髷の形式学的分析と編年」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 註20) 大塚初重 1959「大和政権の形成 武器武具の発達」『世界考古学体系』3 古墳時代 平凡社

- 註21) 上居和幸・行時志郎 1994「惣田遺跡」『山田市郷土文化財発掘調査報告書第8集』日田市教育委員会
- 註22) 九州前方後円墳研究会編 2001「九州の横穴墓と地下式横穴墓」第1分冊 特殊遺物・遺構
- 註23) 九州前方後円墳研究会編 2001「九州の横穴墓と地下式横穴墓」第1分冊 特殊遺物・遺構
- 註24) 毛永光洋編 1983「十六山横穴墓 三重町川辺所在遺跡調査報告書」三重町教育委員会
- 註25) 佐藤 暁 1986「太古の日出町」『日出町史』日出町
- 註26) 佐藤 暁 1986「太古の日出町」『日出町史』日出町
- 註27) 小林行雄 1976「鹿角刀剣装具」『古墳文化論考』共立社
- 註28) 立命館大学大学院 (2002年当時)の井上・樹氏のご教示による。
- 註29) 古谷 毅 2000「鉄製刀剣の系譜」『季刊 考古学』第76号
- 註30) 小林行雄 1976「鹿角刀剣装具」『古墳文化論考』共立社
- 註31) 白杵 勲 1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 註32) 白杵 勲 1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 註33) 富田敏一 1997「尾足横穴群 甲号横穴発掘調査報告書」旭志村教育委員会
- 註34) 富田敏一 1997「尾足横穴群 甲号横穴発掘調査報告書」旭志村教育委員会
- 註35) 富田敏一 1997「尾足横穴群 甲号横穴発掘調査報告書」旭志村教育委員会
- 註36) 野野玲子「鉄鎌の形式分類と出土状態について」1991「上ノ原横穴墓群」Ⅱ 大分県教育委員会
- 註37) 古野徳久 1989「古墳時代鉄鎌の編年」『九州考古学』64
- 註38) 渋谷忠章・村上久和 1989-1992「上ノ原横穴墓群。Ⅰ～Ⅲ 大分県教育委員会
- 註39) 池邊千太郎 2001「豊後地域における横穴墓の様相」『九州の横穴墓と地下式横穴墓 第1分冊』九州前方後円墳研究会
- 註40) 渋谷忠章 1984「直入地方の夜明け」『直入町史』
- 註41) 佐藤満洋 1959「直入の文化財 第1集」直入町教育委員会
- 註42) 九州前方後円墳研究会編 2001「九州の横穴墓と地下式横穴墓」第2分冊 豊後編
- 註43) 九州前方後円墳研究会編 2001「九州の横穴墓と地下式横穴墓」第2分冊 豊後編
- 註44) 宮内克己 2002「伝原千人塚古墳」久住町教育委員会・大分県教育委員会
- 註45) 高橋徹 1996「岩崎横穴墓群」大分県教育委員会
- 註46) 毛永光洋編 1983「十六山横穴墓 三重町川辺所在遺跡調査報告書」三重町教育委員会
- 註47) 清水宗昭 1983「原始時代 第四章古墳文化 第三節」竹田市市上巻
- 註48) 城戸誠・佐伯 浩 1987「菅生大地と周辺の遺跡 大分県竹田地区遺跡群発掘調査報告書」竹田市教育委員会
- 註49) 杉本岳史 2001「筑後地方の横穴墓」『九州の横穴墓と地下式横穴墓 第1分冊』九州前方後円墳研究会
- 註50) 杉本岳史 2001「筑後地方の横穴墓」『九州の横穴墓と地下式横穴墓 第1分冊』九州前方後円墳研究会
- 註51) 小林行雄 1976「鹿角刀剣装具」『古墳文化論考』共立社
- 註52) 大分県立歴史博物館の宮内克己氏のご教示による。
- 註53) 渋谷忠章 1984「直入地方の夜明け」『直入町史』直入町
- 註54) 山口英男 1986「八・九世紀の教について」『史学雑誌』95-1
- 註55) 西別府元日 1996「古代朽網郷をめぐる二、三の問題—大分県直入郡久住町石田遺跡の周辺について」『市第1遺跡・石田遺跡』大分県教育委員会
- 註56) 西別府元日 1996「古代朽網郷をめぐる二、三の問題—大分県直入郡久住町石田遺跡の周辺について」『市第1遺跡・石田遺跡』大分県教育委員会、『石田遺跡』大分県教育委員会
- 註57) 西別府元日 1996「古代朽網郷をめぐる二、三の問題—大分県直入郡久住町石田遺跡の周辺について」『市第1遺跡・石田遺跡』大分県教育委員会、『石田遺跡』大分県教育委員会

長湯横穴墓群 1号墓出土土器観察表

番号	器種	寸法 ・口径 ・底径 ・体高最大径	形 差 の 特 徴	装 込 の 特 色				状況	備 考
				内 面	外 面	色 調	胎 土		
1	坏蓋	・13.2 ・3.8 ・—	口縁部は下方にのび、端部はやや丸い。	回転ナデ 内面にロケノ須が残る	瓦転ナデ 回転ヘラノ須	灰黄色	灰石・白色粒の微細粒を多く含む奥間心を多く含む。	良好 略細	2/3残存
2	坏蓋	・14.0 ・3.6 ・—	口縁部は下方にのび、端部はやや丸い。	回転ナデ 内面にロケノ須が残る	回転ナデ 回転ヘラノ須	灰白色	精緻 2mm大の石炭を少し含む。	良好	接合2/3残存
3	坏蓋	・12.5 ・3.4 ・—	口縁部は下方にのび、端部はやや丸く、直下に下りる。	回転ナデ	回転ナデ ヘラノ須は認められない。	灰黄色	精緻 灰石の微細粒を少し含む。	良好	完形
4	坏蓋	・13.8 ・— ・—	口縁部は下方にのび、端部はやや丸く、直下に下りる。	回転ナデ	回転ナデ ヘラノ須は残る。	灰色	精緻 灰石の微細粒を少し含む。	良好	1/7残存
5	坏蓋	・14.0(復元) ・— ・—	口縁部は下方にのび、端部は丸い。唇部に沈線が深る。	回転ナデ	回転ナデ ヘラノ須は残る。	灰黄色	精緻 灰石の微細粒、1mm大の石炭を少し、白色粒を多く含む。	—	1/3残存
6	坏蓋	・13.0(復元) ・— ・—	口縁部は下方にのび、端部はやや丸く、直下に下りる。	瓦転ナデ	回転ナデ	灰黄色	精緻 1mm大の赤色粒を多く含む。	—	1/6残存
7	坏身	・11.3(復元) ・13.6(復元) ・—	たちあがり内傾して外反しながらのび、端部はやや丸い。受け部はほぼ水平に伸びる。底面は丸みを帯びる。	回転ナデ 指ナデ	回転ナデ 回転ヘラノ須	灰色	精緻 灰石の微細粒、石炭を少し、1mm大の白色粒を多く含む。	良好	1/3残存
8	坏身	・14.9 ・4.8 ・—	たちあがり内傾して短く、端部は丸い。受け部にはほぼ水平に伸びる。	回転ナデ	瓦転ナデ	灰黄色	精緻 灰石の微細粒を少し含む。	良好	1/4残存
9	高坏	・12.4 ・— ・—	口縁部は外反しながらのび、端部はやや丸い。唇部には横線がみられる。	瓦転ナデ 指ナデ	回転ナデ	青灰色	灰石の微細粒を少し、白色粒を多く含む。	良好	1/7残存
10	葉片	・— ・— ・—	口縁部	回転ナデ	回転ナデ後	灰黄色	灰石・白色粒の微細粒を多く含む。	良好	—
11	葉片	・— ・— ・—	横線	同心円タタキ	回転ナデ後平行タタキを施した後タタキ目	青灰色	灰石の微細粒を含む。	良好	—
12	葉片	・— ・— ・—	横線	同心円タタキ	瓦転ナデ後平行タタキを施した後タタキ目	青灰色	灰石・赤色粒を少し含む。	良好	—
13	葉片	・— ・— ・—	横線?	ナデ	回転ナデ後平行タタキを施した後タタキ目、ナデ	暗灰色	灰石・白色粒の微細粒・赤色粒を少し含む。	良好	—
14	葉片	・— ・— ・—	横線	同心円タタキ	回転ナデ後平行タタキを施した後タタキ目	青灰色	灰石・白色粒の微細粒・赤色粒を少し含む。	良好	—
15	坏蓋	・— ・— ・—	口縁部はほぼ直下に下り、端部は丸く、内面には内傾する段を有す。天井部はやや丸く、直下に下りる。	回転ナデ 指ナデ	瓦転ナデ 回転ヘラノ須	青灰色	2mm大の石炭を少し、白色粒を多く含む。	良好	1/4残存
16	坏蓋	・— ・— ・—	口縁部はほぼ直下に下り、端部は丸く、内面に沈線が深る。天井部はやや丸く、直下に下りる。	瓦転ナデ 指ナデ	瓦転ナデ 回転ヘラノ須	灰黄色	1~4mm大の石炭を少し含む。	良好	1/2残存

長湯横穴墓群 2号墓出土土器観察表

番号	器種	法要	形 姿 の 特 徴	装 込 の 特 色				組成	備 考
				内 面	外 面	色 調	装 込		
1	埴土	-13.5 -4.6 - --	口縁部は下外方にのび、肩部は丸い。天井部はやや高く丸みを帯びる。	回転ナデ 見込部一定 方式ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰黄色 黄灰色	長石の微細粒、2～5mm大の石英を含む。	良好	2/3残存 (組合)
2	埴土	-4.6 -6.1 - --	口縁部は下外方にのび、肩部は丸い。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 見込部一定 方式ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰黄色	長石の微細粒、1～2mm大の石英を多く含む。	良好	ほぼ完形
3	埴土	-14.6 -4.3 - --	口縁部は下外方にのび、肩部は丸い。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 自然塗が かかる	長石の微細粒、1～3mm大の石英を多く含む。	良好 堅硬	ほぼ完形
4	埴土	-13.3 -3.4 - --	口縁部は下外方にのび、肩部は丸い。天井部は平らである。	回転ナデ 箱ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰黄色 灰藍色	1mm大の石英を少し含む。	良好	1/4残存
5	埴土	-13.8 -4.1 - --	口縁部は下外方にのび、肩部内面に化粧をめぐる。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 箱ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	長石の微細粒、石英を含む。	良好	2/3残存 (組合)
6	埴土	-15.8 -4.5 - --	口縁部と外方にのび肩部は丸く、ほぼ横下に下りる。天井部は高く平らである。	回転ナデ 一定方向ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黄灰色	長石の微細粒、1～2mmの石英を少し含む。	良好	ほぼ完形
7	埴土	-14.9 -4.9 - --	口縁部は下外方にのび、肩部は丸く直下に下りる。天井部は高く丸みを帯びる。	回転ナデ 一定方向ナデ 見込みに口ワ り痕あり	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰黄色	微塵。	良好 堅硬	4/5残存
8	埴土	-14.1 -3.6 - --	口縁部は下外方にのび、丸く内面に化粧をめぐる。天井部は高く丸みを帯びる。	回転ナデ 一定方向ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰黄色	長石の微細粒、1～2mmの石英を少し、3mm大の灰色粒、白色粒を含む。	良好 堅硬	1/2残存
9	埴土	-15.5 -3.5 - --	口縁部は外反しながらのび、肩部は丸い。天井は高く平らである。	回転ナデ 箱ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	長石の微細粒を少し、2～3mm大の石英を多く含む。	良好 堅硬	2/3残存
10	埴土	-16.5(底元) - -- - --	口縁部はほぼ直下に下り、肩部内面には内傾する段を有す。外面にははっきりした様が見られる。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色	長石の微細粒を多く含む。	良好	口縁部片
11	埴土	-13.5(底元) - -- - --	口縁部は下外方にのび、肩部内面に内傾する段を有す。天井部は不明。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰藍色	白色の微細粒を多く含む。	良好	口縁部片
12	埴土	-14.2(底元) - -- - --	口縁部は下外方にのび肩部は直下に下りる。天井部は不明。	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色	長石の微細粒を含む。茶色、白色粒を含む。	良好	口縁部片
13	埴土	-14.4(底元) - -- - --	口縁部は外反しながらのび、肩部は丸く内面に化粧をめぐる。天井は不明。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	白色粒を少し含む。	良好	口縁部片
14	埴土	- -- - -- - --	胴片のため口縁部の形状は不明。縁がわずかに認められる。	回転ナデ 見込部一定 方式ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 黄灰色	長石の微細粒、石英を含む。	良好	口縁部片
15	埴土	- -- - -- - --	口縁部は不明。天井部はやや丸みを帯びる。	回転ナデ 箱ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	黒色粒を含む。	良好	口縁部片
16	埴土	-13.5 -4.2 - --	かなり高さは内傾してのび肩部は丸い。天井部はほぼ水平にのび、底面は丸く丸い。	回転ナデ 箱ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	長石の微細粒を含む。1～3mm大の石英を少し。白色粒を多量に含む。	良好 堅硬	ほぼ完形

番号	形種	法 量 ・口径 ・高さ ・胴径最大	形 質 の 特 徴	法 法 の 特 色				地 域	備 考
				内 造	外 造	色 紙	新 土		
17	円身	・12.0 ・5.3 ・	たちあがりは内傾してのび端部は 無い。受け部はほぼ水平に伸び、 底部はやや深く丸みを帯びる。	回転ナデ 指ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ 後ナデ	灰色	長石の微細粒を含む。1～ 4mm大の石英を多量に含 む。	良好 層状	楕円形
18	円身	・12.5 ・4.4 ・	たちあがりは内傾してのび端部は 無い。受け部はほぼ水平に伸びる。 底部は不明。	回転ナデ 指ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	2～3mm大の石英を多量に 含む。	良好	円形
19	円身	・12.6 ・4.2 ・	たちあがりは内傾してのび端部は 無い。受け部はほぼ水平に伸びる。 底部は浅く丸みを帯びる。	回転ナデ 指ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰青色	塊状。	良好	ほぼ円形
20	円身	・15.0(底元) ・4.2 ・	たちあがりは内傾してのび端部は 無い。受け部は外方に伸びる。 底部はやや深く丸みを帯びる。	回転ナデ 指ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	3mm大の石英を含む。	良好	1/3残存
21	円身	・12.2 ・4.9 ・	たちあがりは内傾してのび端部は 無い。受け部はほぼ水平に伸びる。 底部は不明。	回転ナデ 指ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰青色	長石の微細粒と2mm大の石 英を少し含む。	良好	2/3残存
22	円身	・13.3 ・4.4 ・	たちあがりは内傾してのび端部は 無い。受け部は外方に伸びる。 底部は浅く丸みを帯びる。	回転ナデ 指ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰白色	1～2mm大の石英を多量に 含む。白色粒が多い。	良好	外面に自然 釉 (ほぼ円形 へり込みあり)
23	円身	・12.5 ・4.6 ・	たちあがりは内傾してのび端部は 無い。受け部はほぼ水平に伸びる。 底部はやや深く丸みを帯びる。	回転ナデ 指ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黄灰色	1～2mm大の石英を少し、 白色粒を多量に含む。	良好	2/3残存
24	円身	・18.2 ・4.3 ・	たちあがりは内傾してのび端部は 無い。受け部はほぼ水平に伸びる。 底部は丸みを帯びる。	回転ナデ 指ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1～5mm大の石英を多量に 含む。	良好	円形
25	円身	・12.8 ・4.5 ・	たちあがりは内傾してのび端部は 無い。受け部はほぼ水平に伸びる。 底部はやや深く丸みを帯びる。	回転ナデ 指ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	暗灰青色	0.5～2mm大の石英を多量 に含む。	良好	円形
26	円身	・14.0(底元) ・ ・	たちあがりはほぼ直立してのび る。受け部はほぼ水平に伸びる。 底部は不明。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	白色粒を含む。	良好	口縁部片
27	円身	・13.6(底元) ・ ・	たちあがりは内傾してのび端部は 無い。受け部はほぼ水平に伸びる。 底部は不明。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英を少し含む。	良好	口縁部片
28	円身	・14.0 ・ ・	たちあがりは内傾してのび端部は 無い。受け部は外方に伸びる。 底部は不明。	回転ナデ 指ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	白色粒を少し含む。	良好	口縁部片
29	楕円	・12.2 ・26.7 ・	口縁部は外反しながら伸び、裾部 はほとんど尖りない。胴部は楕 円形を呈す。	同心円タタキ	口縁部は回転ナ デ、胴部は回転 ナデ後タタキを 施した後タタキ	灰青色	白色粒を含む。	良好	—
30	尖角	・ ・ ・	胴部分。	同心円タタキ	回転ナデ後タ タキを施した後 タタキ	灰青色	長石・角閃石の微細粒を多 く含む。	良好	—
31	楕円	・5.2 ・ ・16.1	口縁部は打ち欠いているため不 明。胴部は楕円形を呈す。	回転ナデ 指ナデ	回転ナデ後回転 ナデ、 回転 ヘラケズリ	灰色	2～3mm大の石英を多く含 む。	良好	ほぼ円形 (口縁部を欠 く)
32	高杯	・12.2 ・8.1 ・8.2	杯部は上下方に伸び裾部は胴部 中央付近にあてはめられ、杯部 は下方方に伸びた状態で段をなす。 裾部は無い。	回転ナデ 指ナデ	回転ナデ 指ナデ	青灰色	長石の微細粒を少し、2～ 4mm大の石英を多く含む。	良好 層状	円形

長湯横穴墓群 3号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 ・11型 ・磨高 ・胴部最大径	形態の特徴	技法の特色				焼成	備考
				内面	外面	色調	胎土		
1	坏蓋	・14.0 ・3.9 ・—	口縁は外上方にのび、肩部は丸く、天井部は丸い。	回転ナテ 見込み部一定角の指ナテ	回転ナテ 回転ヘラナズリ	淡茶褐色	1-2mm次の石英、白色粒を多量に含む。	良好	完形
2	坏蓋	・— ・— ・—	口縁はほぼ垂直にのび、肩部は丸く内面に内傾する段を有す。外面には段を有し、天井部はやや平らである。	回転ナテ 口ノロ段が残る	回転ナテ 回転ヘラナズリ	灰褐色	長石の微細粒を少し、光沢石を多く含む。	良好 磨蝕	1/4残存
3	坏蓋	・12.5 ・3.8 ・—	口縁は下外方にのび、肩部は丸い。天井部はヘラ切り履し段ナテ調整。	回転ナテ 見込み部指ナテ	回転指ナテ	灰褐色	長石の微細粒を少し含む。	良好	ほぼ完形 (接合)
4	坏蓋	・13.8(復元) ・4.7 ・—	口縁は下外方へのび、内側肩部に比段を施す。天井部に丸い。	回転ナテ 見込み部指ナテ	回転指ナテ	淡茶褐色	1-2mm次の石英、白色粒を多量に含む。	不良	2/3残存
5	坏蓋	・14.4(復元) ・— ・—	口縁はほぼ垂直にのび、肩部内面に内傾する段を有す。外面には磨蝕段がみられる。	回転ナテ	回転ナテ 回転ヘラナズリ	灰褐色	磨蝕 長石の微細粒、1mm灰白色を1つ含む。	良好	1/8残存
6	坏蓋	・14.4 ・4.9 ・—	たちあがり内傾しながらのび、肩部内面には比段を施す。受け部にはほぼ水平に伸びる。底部はやや平らである。	回転ナテ	回転ナテ 回転ヘラナズリ 見込み部タタキ痕が残る	茶古灰色	内蔵及どの微細粒、石英を少し含む。	良好	ほぼ完形
7	坏蓋	・11.0 ・4.4 ・—	たちあがり内傾しながらのび、肩部は丸い。受け部にはほぼ水平に伸びる。底部は丸い。	回転ナテ	回転ナテ 回転ヘラナズリ	淡茶褐色	長石・角閃石や1-2mm次の石英を含む。	不良	ほぼ完
8	碗	・14.8(復元) ・15.7(長径) ・6.1(磨高)	口縁は外上方にのび、肩部は丸い。外面と外上方に赤色顔料が残る。	丁寧なナテ	横ナテ後、縦・斜め方向のハク目調整	茶褐色	長石の微細粒を多く、角閃石を少し含む。	良好	土師器 ほぼ完形 (接合)
9	薬片	・— ・— ・—	胴部	同心円タタキ	回転ナテ後平行タタキを施した後のキ目	黄灰色	長石・白色粒の微細粒・赤色粒を少し含む。	良好	—

長湯横穴墓群 6号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 ・11型 ・磨高 ・胴部最大径	形態の特徴	技法の特色				焼成	備考
				内面	外面	色調	胎土		
1	碗	・12.4 ・4.9 ・—	口縁は外上方にのび、肩部付近で内傾する。肩部は丸い。	横ナテ後、短文風のヘラクミガキ	横ナテ後、ヘラ刮りを施した後横・斜め方向のヘラ削り	黒褐色	長石の微細粒を多く含む。	良好	土師器 ほぼ完形 (接合)
2	碗	・12.4 ・5.0 ・—	口縁は外上方にのび、肩部付近で内傾する。肩部は丸い。	横ナテ後、横・斜め方向のヘラクミガキ	横ナテ後、ヘラ刮りを施した後横・斜め方向のヘラ削り	暗褐色	長石・角閃石の微細粒を多く含む。	良好	土師器 2/3残存 (接合)
3	碗	・12.6 ・4.6 ・—	口縁は外上方にのび、肩部付近で内傾する。肩部は丸い。	横ナテ後、短文風のヘラクミガキ	横ナテ後、ヘラ刮りを施した後横・斜め方向のヘラ削り	暗褐色	長石の微細粒を多く含む。	良好	ほぼ完形 (接合)

長湯横穴墓群 7号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 ・11型 ・磨高 ・胴部最大径	形態の特徴	技法の特色				焼成	備考
				内面	外面	色調	胎土		
1	坏蓋	・12.2 ・5.0 ・—	たちあがり内傾しながらのび、肩部内面には段を有す。肩部は丸く、受け部にはほぼ水平に伸びる。底部は平らである。	回転ナテ、同心円の当目痕が残る	回転ナテ 回転ヘラナズリ	古灰色	石英を少し、白色粒を多く含む。石英を含む。	良好	2/3残存

長湯横穴墓群 3号墓出土鉄器計測表

番号	器 種	全長 (cm)	刀部長 (cm)	刃 部		頸 部		莖 部		葉 部		重量 (g)	備 考
				・幅 (cm) ・厚 (cm)	・幅 (cm) ・厚 (cm)	・径 (cm) ・径 (cm)	・径 (cm) ・厚 (cm)	・径 (cm) ・厚 (cm)	・径 (cm) ・厚 (cm)				
13	弓形銅金具	4.55										2.1	木片小曲角残存
14	弓形銅金具	4										2.3	木片小曲角残存
15	弓形銅金具	3.4										2.5	木片小曲角残存
16	刀子	18.5	6.6	・1.7 ・0.4	・1.4							76.9	覆木製柄残存
17	鉄鏃	16.6	3.6	・3.95 ・0.2	・0.38	・0.2	・0.25					59.2	木製柄残存
18	鉄鏃	15.8	4	・2.1 ・0.3		・5.5 ・3.5	・4.4 ・0.28					29.8	和附皮巻残存
19	鉄鏃	14.2	4.6	・0.2 ・2.5		・5.1 ・0.3	・1.4 ・0.4					19.1	
20	鉄鏃	14.6	3.4	・2.1 ・0.3		・5.3 ・0.3	・6.4 ・0.2					25.7	
21	鉄鏃	13.7	3.2	・2.4 ・0.2		・5.9 ・0.3	・5.3 ・0.5					6.8	木製柄残存
22	鉄鏃	7.7	6.2	・2.5 ・0.35	・1.4 ・0.3							13.5	
23	鉄鏃	14.2	不明	・不明 ・0.8		・不明 ・0.3	・2.8 ・0.3					13.6	
24	鉄鏃	7	3.3	・1.1 ・0.25	・3.6 ・0.35							16.2	和附皮巻残存 木製柄残存
25	鉄鏃	17.3	4.2	・0.35 ・0.3		・7.5 ・0.3	・5.7 ・0.3					18.7	
26	鉄鏃	13	4.45	・0.25 ・1.0		・5.3 ・0.3	・3.5 ・0.2					3.5	和附皮巻 木製柄残存
27	鉄鏃	17	3.3	・1.1 ・0.25	・13.6 ・0.35							16.2	和附皮巻残存 木製柄残存
28	鉄鏃	12.6	3.3	・0.25 ・0.9	・9.2 ・0.3			・不明	・0.25			13.6	

長湯横穴墓群 2号墓出土鉄器計測表

番号	器 種	全長 (cm)	刀部長 (cm)	刃 部		頸 部		莖 部		葉 部		重量 (g)	備 考
				・幅 (cm) ・厚 (cm)	・幅 (cm) ・厚 (cm)	・径 (cm) ・径 (cm)	・径 (cm) ・厚 (cm)	・径 (cm) ・厚 (cm)	・径 (cm) ・厚 (cm)				
33	鉄鏃	14	7.2	・0.5		・2.9 ・0.3	・3.9 ・0.25					38.7	木製柄残存
34	鉄鏃		5.8	・0.2		・3.9 ・0.32	・4.2					38	木製柄残存
35	鉄鏃	13.2	7.9	・0.3	・7.3 ・0.35							38.9	木製柄残存
36	鉄鏃	10.3	4.5	・2.3 ・0.2	・5.8 ・0.4							18.3	木製柄残存
37	鉄鏃	8	5.4	・2.2 ・0.3	・0.8							21.7	
38	鉄鏃	15.3		・2. ・0.2								13.3	木製柄残存
39	鉄鏃	20.4	3.65	・0.95 ・0.2	・0.55	・5.7 ・0.35	・8 ・0.2					17.8	木製柄残存
40	鉄鏃	19.5	1.7	・1 ・0.2	・0.38							15.2	木製柄残存
41	鉄鏃	18.1	2.2	・0.5 ・2.2	・0.3							15.4	和附皮巻残存 木製柄残存
42	鉄鏃	18.1	2.2	・0.9 ・0.3	・0.45							15.7	和附皮巻残存 木製柄残存
43	鉄鏃	19.3	2.4	・3.4 ・0.2	・0.55							16.5	和附皮巻残存 木製柄残存
44	鉄鏃	18.1	2.85	・0.95 ・0.2	・0.55							13.7	和附皮巻残存
45	鉄鏃	19.3	2.8	・0.95 ・0.2	・0.6							15.1	和附皮巻残存 木製柄残存
46	鉄鏃	16.9	3.1	・1 ・0.05	・0.5							15.4	和附皮巻残存 木製柄残存
47	鉄鏃	14.4	2.4	・1.1 ・0.2	・0.6	・7.3 ・0.3	・4.8 ・0.25					12.4	和附皮巻残存 木製柄残存
48	鉄鏃	23.9	2.2	・1 ・0.2	・0.2	・7.3 ・0.3	・3.15 ・0.15					9.6	和附皮巻残存 木製柄残存
49	鉄鏃	13.5	2.45	・1.05 ・0.2	・0.6	・6.8 ・0.55	・4.2 ・0.2					9.6	木製柄残存
50	鉄鏃	14.8	1.9	・0.95 ・0.15	・0.6	・8.1 ・0.38	・6.8 ・0.3					14.2	和附皮巻残存 木製柄残存
51	鉄鏃	12.5	1.8	・1.03 ・0.13	・0.55	・7.5 ・0.2	・3 ・0.18					8.2	和附皮巻残存 木製柄残存
52	鉄鏃	14.5	1.85	・0.8 ・0.2	・0.45	・6.6 ・0.35	・6					12.2	和附皮巻残存 木製 (?) 残存
53	刀子	16.5	9.9	・1.3 ・0.4	・7							54.4	覆木製柄残存
54	刀子	10.1	5	・1 ・0.2								16.8	木製柄残存

長湯横穴集群 6号墓出土鉄器計測表

番号	器 種	全長 (cm)	刃部長 (cm)	刃 部		握 部		匙 部		基 部		長さ (cm)	備 考
				・幅 (cm)	・厚 (cm)	・幅 (cm)	・厚 (cm)	・幅 (cm)	・厚 (cm)	・幅 (cm)	・厚 (cm)		
4	刀子	22.4	15	$\begin{matrix} \cdot 1.1 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot 1 \\ \cdot 0.25 \end{matrix}$	$\cdot 2$						35.3	裏面錆び残存
5	刀子	18.9	12.5	$\begin{matrix} \cdot 0.8 \\ \cdot 0.35 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot 0.3 \\ \cdot 0.4 \end{matrix}$	$\cdot 2.2$	$\cdot 6$					66.3	裏面錆び残存
6	刀子	26.3	17.1	$\begin{matrix} \cdot 2.2 \\ \cdot 0.4 \end{matrix}$						$\begin{matrix} \cdot 7.2 \\ \cdot 0.6 \end{matrix}$		90.7	裏面錆び残存 裏面欠損 $\cdot 10$ 幅 $\cdot 2.2$
7	鉄鍔	14.15	1.5	$\begin{matrix} \cdot 1 \\ \cdot 0.15 \end{matrix}$		$\cdot 0.2$						11.2	裾側皮少し残存
8	鉄鍔	15.45	1.5	$\begin{matrix} \cdot 1 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.6$						14.8	裾側皮少し残存 下葉
9	鉄鍔	14.55	1.3	$\begin{matrix} \cdot 1.1 \\ \cdot 0.15 \end{matrix}$		$\cdot 0.75$						16	裾側皮少し残存 下葉
10	鉄鍔	9.3	1.4	$\begin{matrix} \cdot 1 \\ \cdot 0.15 \end{matrix}$		$\cdot 0.35$						9.5	
11	鉄鍔	15.25	1.5	$\begin{matrix} \cdot 1.35 \\ \cdot 0.15 \end{matrix}$		$\begin{matrix} \cdot 0.65 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$						13.9	裾側皮残存
12	鉄鍔	13.25	1.6	$\begin{matrix} \cdot 1.3 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.8$						16.9	裾側皮残存
13	鉄鍔	15.5	1.4	$\begin{matrix} \cdot 1.15 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.6$						14.1	裾側皮残存 下葉
14	鉄鍔	16.6	1.75	$\begin{matrix} \cdot 1.3 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.8$						13.3	裾側皮残存
15	鉄鍔	14.65	1.6	$\begin{matrix} \cdot 1.15 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.7$						11.7	裾側皮残存
16	鉄鍔	11	1.2	$\begin{matrix} \cdot 1.1 \\ \cdot 0.15 \end{matrix}$		$\cdot 0.6$						12.5	裾側皮残存
17	鉄鍔	14.85	1.2	$\begin{matrix} \cdot 1.3 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.7$						12.7	裾側皮残存
18	鉄鍔	15.05	1.2	$\begin{matrix} \cdot 1.3 \\ \cdot 0.15 \end{matrix}$		$\cdot 0.7$						11.8	裾側皮残存
19	鉄鍔	14.6	1.75	$\begin{matrix} \cdot 1.3 \\ \cdot 0.15 \end{matrix}$		$\cdot 0.6$						13.3	裾側皮残存
20	鉄鍔	14.6	1.3	$\begin{matrix} \cdot 1.15 \\ \cdot 0.3 \end{matrix}$		$\cdot 0.7$						12.9	裾側皮残存
21	鉄鍔	12.6	1.6	$\begin{matrix} \cdot 1.1 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.7$						12.9	裾側皮少し残存
22	鉄鍔	11.6	1.8	$\begin{matrix} \cdot 1.3 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.8$						13.5	
23	鉄鍔	14.7	2	$\begin{matrix} \cdot 1.3 \\ \cdot 0.3 \end{matrix}$		$\cdot 0.7$						13.6	裾側皮残存
24	鉄鍔	12.95	1.6	$\begin{matrix} \cdot 1.35 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.6$						14	裾側皮残存
25	鉄鍔	14.9	1.6	$\begin{matrix} \cdot 1.3 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.6$						12.4	裾側皮残存
26	鉄鍔	14.4	1.7	$\begin{matrix} \cdot 1.4 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.8$						12.4	裾側皮残存
27	鉄鍔	14.45	1.5	$\begin{matrix} \cdot 1.1 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.6$						13.7	裾側皮残存
28	鉄鍔	12.75	1.15	$\begin{matrix} \cdot 1.2 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.6$	$\cdot 6$					12.4	裾側皮残存
29	鉄鍔	14.85	1.85	$\begin{matrix} \cdot 1 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.7$						12.1	裾側皮残存 シルバ 残存
30	鉄鍔	11.75	1.6	$\begin{matrix} \cdot 1.3 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.65$						12.5	跡が残っている
31	鉄鍔	13.85	1.7	$\begin{matrix} \cdot 1.25 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.8$						11.4	裾側皮残存
32	鉄鍔	14.1	1.6	$\begin{matrix} \cdot 1.15 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.77$						12.4	裾側皮残存
33	鉄鍔	13.6	1.6	$\begin{matrix} \cdot 1.2 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.8$						12.4	裾側皮少し残存
34	鉄鍔	12.3	1.5	$\begin{matrix} \cdot 1.2 \\ \cdot 0.25 \end{matrix}$		$\cdot 0.73$						11.8	裾側皮少し残存
35	鉄鍔	13.6	1.65	$\begin{matrix} \cdot 1.4 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.7$						13.8	裾側皮残存
36	鉄鍔	11.6	1.6	$\begin{matrix} \cdot 1.3 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.9$						13.9	裾側皮残存
37	鉄鍔	14.9	1.8	$\begin{matrix} \cdot 1.3 \\ \cdot 0.3 \end{matrix}$		$\cdot 0.75$						15.7	裾側皮残存
38	鉄鍔	14.1	1.6	$\begin{matrix} \cdot 1.3 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.6$						15.9	裾側皮残存
39	鉄鍔	13.2	1.6	$\begin{matrix} \cdot 1.3 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.7$						12	裾側皮残存
40	鉄鍔	14.65	1.6	$\begin{matrix} \cdot 1.35 \\ \cdot 0.25 \end{matrix}$		$\cdot 0.8$						13	裾側皮残存
41	鉄鍔	14.3	1.6	$\begin{matrix} \cdot 1.3 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.7$						12.8	裾側皮残存
42	鉄鍔	16.05	2.7	$\begin{matrix} \cdot 1 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.7$						15.1	
43	鉄鍔	11.35	2.4	$\begin{matrix} \cdot 0.9 \\ \cdot 0.2 \end{matrix}$		$\cdot 0.6$						10.9	裾側皮少し残存
44	鉄鍔	14.65	1.9	$\begin{matrix} \cdot 0.9 \\ \cdot 0.25 \end{matrix}$		$\cdot 0.65$						12.1	裾側皮少し残存

番号	器 種	全長 (cm)	万部長 (cm)	刃 部		茎 部		葉 部		長さ (g)	備 考
				・ 幅 (cm) ・ 厚 (cm)	・ 幅 (cm) ・ 厚 (cm)	・ 幅 (cm) ・ 厚 (cm)	・ 長 (cm) ・ 厚 (cm)				
45	鉄鏃	14.3	2.6	・ 1 ・ 0.2	・ 0.7				12.1	板銅皮残存	
46	鉄鏃	14	2.4	・ 1 ・ 0.25	・ 0.6				13.8	板銅皮残存	
47	鉄鏃	12.65	2.25	・ 0.9 ・ 0.2	・ 0.55				12.1	板銅皮少し残存	
48	鉄鏃	11.55	2.4	・ 0.9 ・ 0.2	・ 0.6				10.9	板銅皮少し残存	
49	鉄鏃	3							0.4	茎部のみ	
50	鉄鏃	4.65							1.5	柄の部分残存	

3号墓出土装身具計測表

番号	器 種	材質	色 調	外径 (cm)	断面径 (cm)	孔径 (cm)	重厚 (g)	備 考
10	銅漬	銅	ダークグリーン	6.2	0.1~0.2	6.1	3.3	右側
11	骨玉	不明	ダークグリーン	2.5	1	0.4~0.1	5	片面穿孔
12	耳環	銅地金張	ダークグリーン	3.0×2.8	0.7×0.05		22.4	一部金箔残存

3号墓出土馬具計測表

番号	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	備 考
29	鞍具	5.3	2.8~3.9	6.4	割合なし。鞆の引手部分に装着
30	鞍具	5.4	3.9~3.8	10.7	
31	皮革具	1.4	2.4	5.3	
32	皮革具	1.3	2.8	4.5	
33	皮革具	6.8	6.3	18.6	
34	皮革具	8.3	6.4	32.0	
35	皮革具	8.4	6.2	33.8	

7号横穴墓出土ガラス玉計測表

番号		重さ (g)	高さ (mm)	直径 (mm)	口径 (mm)
1	壺	0.7	6.0	9.5	2.0
2	壺	0.7	6.0	9.0	2.0
3	壺	0.7	5.9	9.1	2.0
4	壺	0.8	8.0	8.0	1.0
5	壺	0.8	6.0	9.0	1.8
6	壺	0.7	7.0	8.2	2.0
7	罎	0.6	6.0	7.8	1.8
8	壺形	0.8	8.5	8.0	2.0
9	壺	0.4	6.0	7.1	2.8
10	壺	0.2	7.0	9.0	1.8
11	壺	0.7	7.0	7.5	1.5
12	罎形	0.5	6.0	7.0	1.5
13	罎形	0.6	7.1	7.0	1.5
14	壺	0.7	6.5	8.2	1.8
15	罎	0.7	6.0	8.5	1.9
16	壺	0.7	6.9	8.0	1.5
17	壺形	0.7	8.0	8.0	2.1
18	壺	0.3	4.9	6.0	2.1
19	壺	0.8	7.0	8.5	1.9
20	壺	0.7	6.2	8.1	2.0

第5節 付 篇

長湯横穴群7号墓出土のゴホウラ銅とヤコウガイ製品

熊本大学 木下尚子

大分県直人郡直人町所在の長湯横穴群7号墓で、3体の人骨とともにゴホウラ製腕輪(以下ゴホウラ剣)1点とヤコウガイ製品2点が出土した(図1・2)。所属時期はともに6世紀前半である。ゴホウラは繁根木型貝銅の特徴をもち、大分県では最初の出土例である。ヤコウガイ製品も、種子島以北の本土地域におけるはじめての出土例である。以下これらについて報告し、若下の所見を述べたい。

1. ゴホウラ銅

ゴホウラ銅は2号人骨(女性、成年)とともに検出された。銅内に上腕骨(尺骨)の一部が通っていたが、人骨を調査した田中良之氏によると、本来の若装状況を反映するものではない。貝銅は、長さ15.5cm、短径12.2cm、重さ167g、ゴホウラ背面を使用した典型的な繁根木型貝銅である。貝殻の表面には小孔が多く、とくに上質なゴホウラを用いているとはいえない。貝銅の余面に入念な研磨が施され、内孔や余体の状況から、腕輪として実際に使用されていたことがうかがえる。

2. ヤコウガイ製品

2点のヤコウガイ製品は、2号人骨付近で互いに30cm離れて1点ずつ検出された。残存部の長径3.5cm、短径3.3cm、重さはそれぞれ2gである。いずれも全体の半分を欠損しているが、隅隅方形で中央に円孔をもち、一辺あるいは二辺に小孔を穿った形の製品とみられる。本品の類例を知らず、用途等については言及できない。貝殻表面は薄層状に剥落した状況を留めているので、本来はより厚手だったとみていい。中央の円孔内面に、管状の工具を回転して穿孔したらしい痕跡がのこっている。ヤコウガイ殻1部の縫合近くを使用して作った製品である。

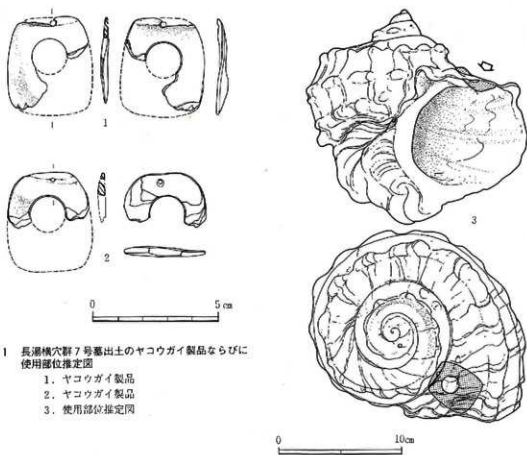


図1 長湯横穴群7号墓出土のヤコウガイ製品ならびに使用部位推定図

1. ヤコウガイ製品
2. ヤコウガイ製品
3. 使用部位推定図

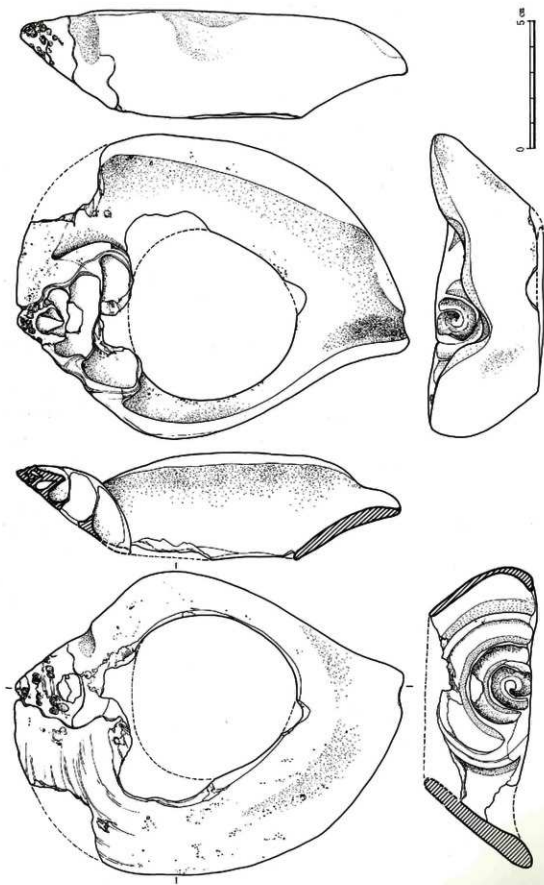


図2 長洲林穴群7号墓出土の古銅刀

3. 南海産貝製品登場の背景

ゴホウラもヤコウガイも、奄美・沖縄諸島の熱帯海域に生息する大型巻貝である。こうした貝類の製品が、大分の山地に登場した歴史的背景について検討してみたい。表1、図3はこれまでに出土したゴホウラの背面を使用した銅（以下ゴホウラ背面銅）の一覧とその分布状況である。図4は、古墳時代のゴホウラ銅等の動向を模式的に示したものである。

古墳時代におけるゴホウラ背面銅の使用は、3～4世紀の種子島に始まる（図4-14、以下図4略）。4世紀末から5世紀前半、この影響で本土地域に同様の貝銅が登場する（36～38）。5世紀中頃、その中心的消費地は九州に移り、5世紀後半には、ゴホウラの背面を螺塔部まで取りこんだ大型で幅広い貝銅が九州に登場する(7)。これが紫根木型貝銅である。その分布は筑後平野を中心に、日向、韓半島南部に及ぶ(3)。長湯7号墓の位置は、現在のところ分布の東限である。紫根木型貝銅をもつ古墳は、その墳形や副葬品から当該地域の有力層の墳墓とみなされるので(木下1996)、こうした有力者層の關係が、筑後から豊後に及んでいたことを、本銅は示している。

ヤコウガイは、3世紀から7世紀の種子島以南の地域において、容器の素材としてしばしば使用されていた(31～35)。九州では薩摩半島市端の松ノ尾遺跡で、ヤコウガイの繖帯に近い部分の破片がみつかったものの(4、戸崎ほか1981)、製品の出土はこれまでに知られていなかった。ただ、5世紀後半から6世紀の韓半島池山洞4号墳でヤコウガイ製品が副葬されているので(2)、九州の古墳における製品の出土も一方では予測されていた。今回の出土でその空白が埋められたわけである。しかし長湯7号墓のヤコウガイ製品は、貝殻のごく一部を使用したに止まり、素材の形状を生かしたものではない。ヤコウガイ容器が九州でも出土することを、今後は予測していだろう。

ちなみに、ヤコウガイと同様の動きをみせるのがギンタカハマである。ギンタカハマも、熱帯産の大型巻貝で、その貝殻には、ヤコウガイと同様の真珠光沢がある。これは種子島、北部九州、韓半島にこれまで1例ずつ確認されている（1、11、26）。古墳時代の貝交易では、ゴホウラやイモガイのほかに、ヤコウガイやギンタカハマのような光沢ある貝殻もわずかに取引され、琉球列島から九州を介して韓半島に登場するものがあったことを、今回のヤコウガイは語っている。

戸崎勝彦はか1981『松之尾遺跡』：福岡市松之尾上地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書(1)、福岡市教育委員会表1の本郷登谷古墳出土例について、橋口達也氏（九州歴史資料館）から教示を賜りました。記して感謝いたします。木下尚子 1996『古墳時代前古交易考』、『考古学雑誌』第81巻1号



図3 ゴホウラ背面利用の銅出土地（古墳時代）

表1 古墳時代のゴホウラ背面訓出土地一覧 (番号は図3に対応)

遺跡名	所在地	数	遺跡形態等	着目状況	時期	文献
1 長沼第六墓群7号	大分県直入郡直入町	1	横穴墓	不明	6世紀前半	本書
2 坂本古墳	福岡県糟屋郡古井町	1	前方後円墳	着目済	5世紀後半	西村1923、金子注小1983、田中1935
3 樋山古墳	福岡県飯塚市西町	1	横穴墓	不明	6世紀前半	本村1980、橋田1991
4 本郷西谷古墳	福岡県三井郡六刀洗町	2	円墳	不明	5世紀	大分県町教育委員会2002年調査
5 関行丸古墳	佐賀県佐賀市久保町	1	前方後円墳	着目済	6世紀初頭	渡辺1958
6 志木野9号古墳	福岡県山門郡深高町	2	円墳	着目済	5世紀後半	福岡県教育委員会1977
7 佐舟山古墳	熊本県玉名市紫根小	2	円墳	不明	5世紀後半	66年1925
8 大坪山D式横穴	宮崎県高岡郡高岡町	1	D式横穴墓	不明	5世紀末	石川1970
9 菓子野57号墳	宮崎県都城市菓子野町	1	D式横穴墓	男性、右腕	6世紀前後	高岡町教育委員会1983
10 造山古墳	大分県国東郡津島海南町	1	円墳		5世紀後半～6世紀初頭	国立九州博物館ほか1984、本下2001
11 海三古墳	鹿児島県姶野市西町	1	横穴墓		6～7世紀	河口1973
12 上築野	鹿児島県姶野市西町	1	横穴墓		3世紀～6世紀	河川1973
13 海宮	鹿児島県姶野市西町	1	横穴墓		6～7世紀	河口1977
14 志田	鹿児島県姶野市西町	28	土壇墓	男・女、老・若	3世紀～7世紀	広瀬遺跡研究会ほか2003
15 鹿野円形古墳	大分県大分市ノ上	1	円墳	男性	5世紀後半	真田1961
16 千塚古墳	大分県臼杵市藤田	1	前方後円墳		5世紀前半	真田1961、1971
17 千塚古墳	岡山県倉敷市久代	2	円墳	男性、両腕	5世紀後半	真田2001
18 緑山古墳群	岡山県総社市	1	不明	不明	不明	本下1996
19 新宮前山2号墳	兵庫県姫路市浜西町	1	方墳	男性、右腕	4世紀末～5世紀前半	清水1996
20 八丁塚古墳1号墳	長野県麻績市八丁	2	円墳、横石塚	不明	4世紀末	小塚注小2000

【文献】(五十音順)

- 石川勉太郎 1970 『国富町大坪地下式古墳調査報告』、『宮崎県文化財調査報告書』15、宮崎県教育委員会
- 梅原未治 1925 『熊本県下にて発掘せられたる古墳の調査—玉名郡紫根木の古墳』、『熊本県史跡名勝天然記念物調査報告』2
- 金子文雄・石山隆 1983 『塚堂古墳の調査』、『塚堂遺跡1』、『一般国道210号線洋羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第1集、福岡県教育委員会』
- 賀川光男 1958 『五遺族以上合葬の一例—大分県大分市木上宇世利門古墳』、『考古学雑誌』第44巻1号、1961 『旧塚古墳について』、『大分県史料』20・考古資料、1971 『大分県の考古学』
- 河川貞徳 1973 『上能野貝塚発掘概報』、『鹿児島考古』7号、鹿児島県考古学会
- 岸本道昭編 1996 『新宮前山古墳群』、『姫路市教育委員会』
- 本下尚子 1996 『古墳時代南島交易考—南海産貝類と貝の道を中心に—』、『考古学雑誌』第81巻第1号
- 2001 『古代朝鮮・琉球交流試験—朝鮮半島における紀元1世紀から7世紀の大型巻貝使用製品の考古学的検討』、『首丘学術論集』第18集、財団法人韓国文化研究振興財団
- 木村幾多郎 1980 『所謂広田型貝輪の細分について』、『史淵』第117輯
- 国立九州博物館・百濟文化開発研究院1984 『海市月松早造山古墳』、『九州博物館学術叢書』第4輯
- 小林宇彦ほか 2000 『長野県史跡「八丁塚」—史跡公園西部に先立つ範囲確認調査報告書』、『須坂市教育委員会』
- 嶋田光一 1991 『福岡県樋山古墳の再検討』、『児島隆人生喜寿記念論集—古文化論叢』
- 須高町教育委員会 1977 『名木野古墳』、『須高町文化財調査報告書』1
- 田中幸夫 1935 『筑後国千牟牟郡第九塚堂古墳前方部における埋葬の状と遺跡の一二』、『考古学雑誌』25
- 橋口達也 1977 『南海産貝類に関する考古学考察と出土地名表』、『立岩遺跡』、『立岩遺跡調査委員会』

広田遺跡字術調査会誌・鹿児島県立歴史資料センター説明館 2003 『種子島広田遺跡』

前角和夫 2001 『岡山納整センター造成事業に伴う市後遺跡群の発掘調査概要報告』、『総社市埋蔵文化財調査年報』11

都城市教育委員会 1983 『都城・中之城・菓子野地下式横穴』、『都城市文化財調査報告書』3

高崎勇蔵 1935 『筑後国杵臼郡千年村徳丸塚堂古墳』、『史跡名称天然記念物調査報告書』10-11

渡辺正氣 1958 『佐賀市関行丸古墳』、『佐賀市文化財調査報告書』7

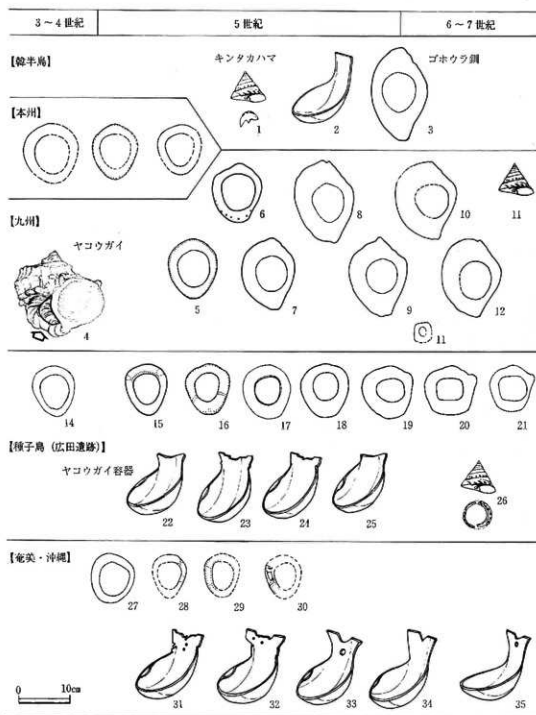


図4 ゴホウラ、ヤコウガイ、ギンタカハマ製品の動向(3～7世紀)

ゴホウラ：3. 龜山古墳、5. 並利門古墳、6・7. 佐左山古墳、8. 名木野9号墳、10. 長湯横穴群7号墓、12. 榑山古墳、14. C14号人骨、15-17. F X 1号人骨、16. E 3号人骨、18. A 7号人骨、19. D Ⅱ 3号人骨、20. C Ⅱ地区、21. D Ⅱ地区集骨、26. D Ⅱ地区、27-30. 高地LⅡ、38. 以志塚具塚、29. 安座間原古、36. 八丁陶塚1号墳、37. 新宮東山古墳2号墳1号棺、38. 牛塚古墳、ヤコウガイ：2. 池山44号墳、4. 松ノ尾、11. 長湯横穴群7号墓、22. E 1号人骨、23. F X 2号人骨、24-25. E X 1号人骨、31-32. ナガツ原西Ⅱ塚、33-34. 清水川塚、35. 小湊フワガネタ、ギンタカハマ：1. 林堂ⅡE 1号古墳、13. 鹿ノ尾Ⅱ-1号横穴墓、26. D Ⅱ地区。

石川健*・舟橋京子**・渡辺誠***・原田智也***・田中良之**

*九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座

**九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座

1. はじめに

大分県由良郡直入町長湯横穴墓遺跡から保存状態が良好な人骨が出土した。調査にあたった大分県教育委員会から田中に人骨調査の依頼があり、舟橋らとともに現地へ赴いて人骨の観察・実測・取り上げを行った。その後出土人骨は、九州大学へと搬入され、大学院比較社会文化研究院基層構造講座において整理・分析を行った。以下にその結果を記載する。なお、人骨は現在九州大学大学院比較社会文化研究院考古人類資料室に保管されている。

2. 出土状態

長湯横穴墓群からは、2号横穴墓、3号横穴墓、4号横穴墓、6号横穴墓、7号横穴墓、9号横穴墓から人骨が出土している。以下人骨の出土状態について記す。

2-1 長湯2号横穴墓

2号横穴墓からは、2体の人骨が出土した。玄室の左右に一体ずつ葬られていた。2体とも玄門側に頭位を向ける。玄室右側(東側)出土人骨を1号人骨、玄室左側(西側)出土人骨を2号人骨として、以下出土状態を記す。

1号人骨は、頭位を玄門側(南西)に向けた仰臥伸展葬である。顔面は下顎とともに玄室中央(左)を向いており顎関節が外れた状態である。椎骨は、頸椎・胸椎ともに若干乱れた状態である。右上肢は肩甲骨と上腕がほぼ関節しており、前腕は回内した状態で出土している。左上肢は、肩関節が外れ、肩甲骨と上腕骨の間に下顎が位置する。下肢は、骨盤が仙骨と左右寛骨が関節した状態であり、股関節及び膝関節も左右ともに関節状態にある。左膝蓋骨は左右膝関節の間に落した状態である。

このように、左肩関節部上位に下顎が位置することからみて、本来関節していた上腕骨は、軟部組織の腐朽に伴い頭部が肩関節上に傾いた際、肩関節が外れ肩甲骨から若干離れた位置に動いたものと考えられる。その後、頭骨についても軟部組織の腐朽により顎関節が外れたものと考えられる。左脛骨の玄室側に鉄線群の崩壊がみられる。

2号人骨は、1号人骨同様頭位を玄門側(南西)に向けた仰臥伸展葬である。頭蓋骨は顎関節が外れた状態で、顔面が玄室中央(右)を向いた状態である。ただし、下顎はオトガイが奥側側面を向いた状態であることから、軟部組織の腐朽後右側に傾いたものと考えられる。椎骨は第12胸椎から第3腰椎までやや乱れた状態であるが、そのほかの残存する椎骨はほぼ関節した状態を保持する。右上肢は上腕と前腕がほぼ関節した状態を保持しており、前腕は1号同様回内した状態である。左上肢は、遺存状況が悪いが、肩甲骨・上腕骨頭・上腕骨体の位置関係から原位置を大きく動くものではない。左腕骨は上腕骨遠位端から若干離れた状態で出土している。骨盤は左右の寛骨が仙骨と近接した状態で出土し、ほぼ原位置を保つ。下肢は右側に若干乱れがみられる。右大腿骨は寛骨から外れ、後面が上を向き外旋した状態である。右膝関節も外れた状態で、脛骨内側縁が上面を向き大腿骨同様外旋した状態である。右腓骨は近位端が脛骨近位に近接し、腓骨遠位端は脛骨から離れた位置にある。したがって、右下肢は、軟部組織の腐朽後、土砂等の影響により右股関節が外れ玄室中央側へ流されたものと推定される。左下肢は、股関節・膝関節ともに関節状態であるが、腓骨は脛骨から若干離れた位置から出土している。右大腿骨F位及び近接した位置から鉄線3点が出土し、脛骨の玄室中央よりから鉄線2点が出土している。また、上顎に接した位置から鉄線1点、右尺骨遠位端に近接して鉄線1点が出土している。

2体の間の埋葬順位については、1号人骨が埋葬されていた玄室東側に6枚あり、2号人骨より葬ら

れ方が丁寧なことから、1号人骨が初葬であると考えられる。

2-2 長湯3号横穴墓(図1)

3号横穴墓からは最低9体の成人と1体の小児が検出された。部分的に関節状態を保持するものがあるが、大半の個体が引つけられており、玄室中央付近の人骨の遺存状態が極めて悪い。そのため、いずれが最終埋葬時の被葬者であるかについては確定することが困難である。ただし、頭蓋骨の多く及び上肢骨は玄門側で出土し、一方下肢骨は奥壁側にその多くが認められることから、本来ほとんどの個体が玄門側に頭位をとる埋葬であったものと推定される。出土人骨は、玄門側の左右両側に頭蓋骨6体分と上肢骨が、奥壁側左右両側と中央に下肢が数体ずつ片づけられた状態で出土した。奥壁側からは、下肢骨に加え2体分の頭蓋骨が出土している。

玄室西側玄門近くからは、3体分の頭蓋骨が出土した(玄室中央側から1号頭蓋・2号頭蓋・3号頭蓋とする)。3体とも頭蓋のみの出土である。1号頭蓋は、顔面を奥壁側(北側)に向けた状態である。1号頭蓋の歯牙が、頭蓋前面からまとまって出土している。2号頭蓋は、1号頭蓋骨の西側に位置し、1号頭蓋の左前額骨に接した状態で出土する。2号頭蓋が1号頭蓋の下になっている。2号頭蓋は後頭骨を下にし、顔面が上を向いた状態である。下顎は、オトガイが奥壁側(北)を向いた状態で、2号頭蓋骨北側の近接した位置から出土している。軟部組織の腐朽後顎関節が外れ、頭蓋が玄門側へ傾いたものと考えられる。3号頭蓋は、2号頭蓋の右後頭部に接し、2号頭蓋の下から出土している。3号頭蓋は後頭骨を下にし、顔面が東側を向いた状態である。下顎は3号頭蓋の下からほぼ関節した状態で出土している。以上3体の頭蓋骨の重複関係から、これらの中では3号頭蓋が時間的に先行して埋葬されたものと考えられる。

これら頭蓋骨の北側からは、前腕骨及び尺骨骨がまとまって出土している。いずれも関節状態にはない。さらに奥壁側(北側)からは、下肢骨が3体分出土しており、個体ごとに若干位置をずらしつつも、上下に重なった状態で出土している。最も上に位置する個体(下肢A)は、右下肢骨と左下肢骨が近位を玄門側にし、大腿骨が交差した状態で出土している。右脛骨の奥壁側より、右足根骨がまとまって出土している。これらの右足骨は、右脛骨との位置関係から、下肢Aに伴うものと考えられる。下肢Aの下からは、玄室中軸線にはば軸をそろえ近位を玄門側にした状態で左下肢骨が出土している(下肢B)。下肢Bは、左右とも膝関節及び足根骨以下の足骨が関節した状態を保つ。また、右大腿骨は右脛骨と関節した状態である。下肢Bの左右脛骨の間から左足骨がややまとまって出土しているが、上下の位置関係及び下肢Bには関節状態の足骨があることから、下肢Aの左足骨と考えられる。下肢Bの下からは、ほぼ下肢Bと長軸をそろえ近位を玄門側にした、左右脛骨が出土している(下肢C)。下肢C右脛骨直下からは、下肢Cの右腓骨が解剖学的正位置を保った状態で出土している。下肢C右脛骨近位側、下肢A右大腿骨の下から左右大腿骨が出土している。下肢A・Bには左右ともに大腿骨があることから、下肢Cの脛骨とセットになる大腿骨と考えられる。3体の下肢骨のうち、下肢Cが最も下から出土している。また、下肢AやBは下肢骨のみではあるものの、ほぼ関節した状態を保持している。下肢Cは保存状態が良好ではないが、大腿骨と脛骨の位置関係から、ほぼ関節状態を保っているものと考えられる。

玄室玄門付近東側から4体分の頭蓋骨が出土しており、玄室中央側から4号頭蓋・5号頭蓋・6号頭蓋・9号頭蓋とする。玄門の東側からは、これら4体分の頭蓋に加え、下顎骨が3体分、上肢骨が3体分、小児のものと考えられる歯牙が出土している。

4号頭蓋は下顎骨と関節し、顔面を奥壁側に向けた状態で出土している。5号頭蓋は、4号頭蓋の東側に位置し、前頭部を玄門側に向けた状態である。5号頭蓋の下顎は、頭蓋の北側からオトガイを下にした状態で出土している。6号頭蓋は5号頭蓋の北側に位置し、左側頭部を下にし、顔面を南側に向けた状態で出土している。6号頭蓋の下顎は、頭蓋の下からオトガイを南側に向けた状態で出土している。6号頭蓋下顎の下からは、小児のものと考えられる9号頭蓋片及び歯牙が出土している。

3体分ある上肢骨のうち1体分は、4号頭蓋の奥壁側(北側)に位置し、椎骨・鎖骨・肩甲骨及び上腕骨がほぼ関節した状態で出土している(4号上肢)。椎骨は一部を除き、ほぼ関節状態を保つ。また、椎骨の東側から

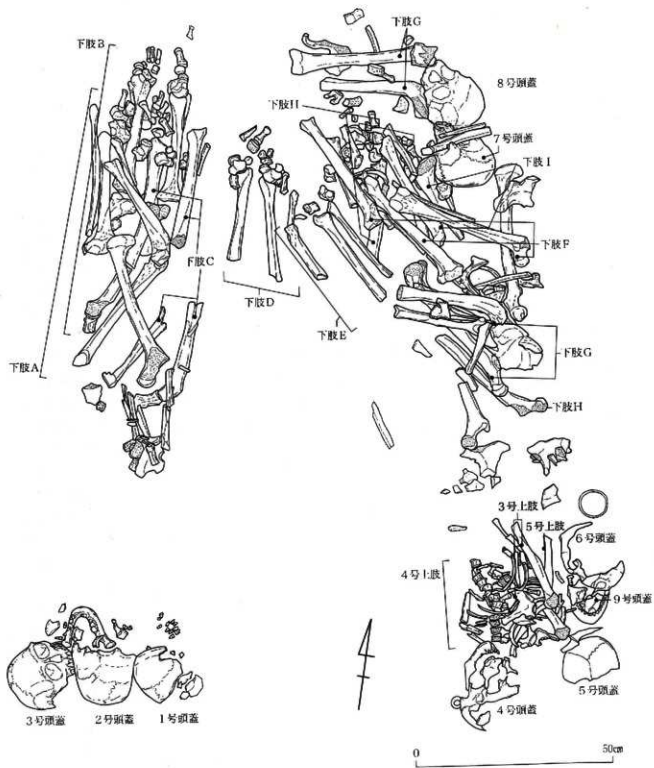


图1 3号横穴墓人骨出土状况

右鎖骨・右肩甲骨、更に若干東側に離れて右上腕骨が出土している。これらは関節した状態ではないが、椎骨や4号頭蓋との位置関係から、ほぼ解剖学的正位置を保つものと考えられる。また、4号上肢の右上腕骨下からは別個体の右上腕骨が出土している(5号上肢)。さらに、4号上肢右胸部からは4号とは別個体の右肩甲骨が出土し、4号上肢右腕骨上からも別個体の右腕骨が出土している(3号上肢)。これら3号上肢とした右上腕骨と右肩甲骨は、相互の位置関係から関節状態を保っていた可能性が高い。

以上のように、玄室東側玄門付近には、少なくとも4体分の頭蓋骨及び下顎骨が出土しており、一部は上下顎が関節した状態で出土している。また、これらの頭蓋のうち成人の頭蓋骨3体分に対応するように、成人3体分の上肢が上下に重複して出土しており、そのうちの2体は一部関節した状態を保持していたものと考えられる。

玄室東側の中央から奥壁側にかけては、玄室西側と同様に下肢骨が多数出土している。これらのうち、同一個体のものと判別可能であった下肢骨は6体分である。玄室中央付近の下肢Cの東側から左右脛骨・右腓骨・足骨が出土している(下肢D)。下肢Dの左右脛骨と左右腓骨・踵骨はほぼ関節状態を保つ。また、右腓骨も脛骨とは若干離れた位置から出土するが、相互の位置関係からはほぼ関節した状態に近いものと考えられる。下肢Dの東南側から、ほぼ軸を同じくする左右脛骨・右腓骨が出土しており(下肢E)、下肢D右腓骨の骨体部上に下肢Eの左脛骨遠位端が重なった状態である。下肢E右脛骨と右腓骨はほぼ関節した状態を保つ。また、右脛骨遠位端から奥壁側に一連の足根骨がやや乱れた状態で出土する。これらの足根骨もその位置関係から、下肢Eと同一個体のものと考えられる。以上の下肢D・Eは、脛骨以下のみであるものの、関節状態をほぼ保持しているものといえる。これらの下肢D・Eより東側からも、下肢骨を中心とした長管骨が多数出土している。それらの多くは軸をほぼ南北にそろえた状態で出土している。個体識別が可能であった下肢は4体分である。これらのうち、下肢Eの東側に隣接した位置から左人大腿骨及び左脛骨の一群が出土しているが(下肢F)、その左右の大腿骨は、左大腿骨が後面を上にし、骨頭は玄門側に位置する。左脛骨は大脛骨との関節が外れ、前面を上にした状態で、下肢E東側に近接して出土している。一方、右大腿骨は左大腿骨遠位側の下から出土するが、骨頭は左とは逆に奥壁側に位置する。下肢Fの下からは2体分の脛骨が出土している。より上位の位置にあるものは、下肢F左大腿骨直下から出土した左右の脛骨である(下肢I)。この脛骨も、その他の下肢とはほぼ軸をそろえた状態である。ただし、左脛骨は奥壁側に近位端が位置するのに対し、右脛骨は玄門側に近位端が位置する。そのため、本来の位置関係を保つものではない。下肢Iの右脛骨下から別個体の右脛骨が出土し、この右脛骨と同一個体の左脛骨は下肢F及び下肢Eの下から出土している(下肢II)。これらの脛骨は、左右とも足根骨以下の足骨がほぼ関節した状態である。下肢IIの南東の若干離れた位置から左大腿骨が出土している。下肢H脛骨と同様に最も下から出土していることから、同一個体と考えられる。この下肢Hの大腿骨上からは左大腿骨と左脛骨が出土している。個体識別の結果、この左下肢と同一個体となるのは玄室東側から出土した一群の人骨のうち、最も奥壁側から出土する右大腿骨と脛骨である(下肢G)。下肢Gの左下肢は、大腿骨の上に左脛骨が位置し、関節した状態を保っていない。右下肢も、大腿骨と脛骨がともに遠位端を玄室中央側に向けほぼ軸をそろえた状態であり関節状態を保つものではない。また、これまで述べてきた下肢とは異なり、左右の下肢骨がかなり離れた位置から出土していることから、下肢の軟部組織が腐化した後、玄門側と奥壁側に左右分けて片づけられたものと考えられる。

以上の下肢の他に、玄室東側の下肢G・Iの東側からは男性のものと思われる頭蓋が2個体分出している(玄門側を7号頭蓋、奥壁側を8号頭蓋とする)。いずれも下顎を伴わないことから、軟部組織の高朽後、頭蓋骨のみ片づけられたものと考えられる。このように、玄室東側に片づけられている人骨群のうち、比較的上位から出土している下肢は解剖学的正位置を保つものが少なく、その周辺からは、下肢同様に関節が外れた状態の下顎や上肢骨・寛骨などが散乱した状態で出土している。

以上のように、玄室西側からは頭蓋骨3体分(1号頭蓋-3号頭蓋)、下肢骨3体分が出土し、玄室中央から東側では、頭蓋骨が小児も含めて6体分(4号頭蓋-9号頭蓋)、下肢骨が6体分出土している。いずれにおいても、片づけの結果、頭蓋骨と下肢骨との位置関係は埋葬時の状態を保持していない。ただし、玄室の西側から出土した下肢と頭蓋の個体数は一致していることから、これら3体分の頭蓋骨と下肢骨がそれぞれ対応すると考

えられる。また、膝関節や股関節の関節状態の相違から、埋葬側及び片づけの間隔に若干差異が認められるものといえる。同様のことは、玄室東側から出土した下肢骨群についてもいえることである。ただし、東側の下肢骨群は、西側の一層の下肢骨に比べ、関節状態を保持する個体が少ないという傾向が見られる。特に玄室中央に近接する下肢D・E、及び最下位から出土した下肢IIは脛骨と足骨の関節が外れていない状態であり、それより上から出土している下肢F・G・Iは関節が完全に外れた状態に近いものであり、片づけまでの間隔に差があったものと考えられる。以上の点を考慮すると、玄室西側の状況と同様に下肢骨と頭蓋骨及び上肢骨の個体識別は困難であるが、関節状態の相違から、一部のみではあるが関節した状態を保持している玄室東側玄門付近の上肢と、奥壁側下肢群のうち一部関節状態を保持しているD・E・Hのいずれかが、同一個体である可能性が考えられる。また、下肢D・Eは玄室中央から出土しており、関節状態にあることから、いずれかが最終埋葬の可能性が高いといえよう。その他の被葬者の埋葬順位については不明である。

2-3 長湯4号横穴墓

4号横穴墓からは2体の成人人骨が出土している。頭蓋骨は2体ともに玄室東側より出土しており、玄門側を頭蓋A、奥壁側を頭蓋Bとする。女性と推定される頭蓋Aは、後頭部を上面にした状態で、頭蓋東側より歯牙がまとまって出土している。また、下顎骨および歯牙が頭蓋Aの西側から若干散乱した状態で出土している。後述する頭蓋B下顎と重複部位があることから頭蓋Aの下顎と考えられる。下顎体は頭蓋Aの西側延長線上に位置し、歯牙片がその奥壁側に散乱したような状態であることから、頭蓋Aは、本来下顎体の位置に、玄室中央を向いた正位置の状態であった可能性が想定される。その後軟部組織の腐朽に伴い、顎関節が外れ、東側に反転したものと考えられる。男性と推定される頭蓋Bは顔面を上面にした状態である。玄室中央、頭蓋A下顎と歯牙の西側から上肢骨が出土し、その西側からは骨盤が出土している。骨盤の西側奥壁寄りからは右大腿骨・脛骨がまとまって出土し、玄門よりからは男性とも考えられる大腿骨が出土している。

人骨の残存状況が悪く、また女性頭蓋と考えられる頭蓋Aの西側からは、粗線の発達した男性の可能性の高い大腿骨が出土しており、男性頭蓋と考えられる頭蓋Bに対応する下肢の位置からは、骨体が細く女性の可能性が考えられる大腿骨が出土している。そのため、どの程度埋葬時の原位置を保持しているか不明であり、埋葬順序についても不明である。しかし、上記のように玄室東側から頭蓋及び歯牙が出土し、中央部から骨盤、西側から下肢骨がまとまって出土していることから、2体ともに頭位を東に向けた状態で埋葬されていた可能性が考えられる。

2-4 長湯6号横穴墓

第6号横穴墓からは2体の人骨が出土している。2体ともに頭位を玄門側(南西)に向けた、仰臥伸展葬である。西側出土人骨を1号人骨、東側出土人骨を2号人骨とする。

1号人骨は、頭蓋骨及び右下肢の関節が外れている他は、ほぼ関節状態を保っている。頭骨は、顔面を玄室中央(右)に向けた状態であるが、下顎トクガイが奥壁側を向いていることから、埋葬時には頭蓋骨も正位置であったと考えられ、軟部組織の腐朽に伴い、頭蓋骨のみ右側へ倒れたものと考えられる。上肢骨は、右肩甲骨が遺存していないが、右鎖骨は肩峰端を右腕近位に近接した状態で右第1肋骨の上から出土している。鎖骨と上腕骨頭部の位置関係から、軟部組織の腐朽に伴い、鎖骨が胸骨とともに右肋骨上に滑り落ちたものと考えられ、ほぼ原位置を保持するものといえる。左上肢はほぼ関節状態にある。左鎖骨は、胸骨端を下肢骨側に肩峰端を頭蓋側に向けた状態で、左肋骨上から出土する。左肩甲骨・上腕骨の位置関係から、軟部組織の腐朽後、動いたものと考えられる。椎骨は胸椎から腰椎まで関節状態にある。下肢は、右大腿骨が外旋し股関節が外れた状態である。脛骨及び腓骨も大腿骨同様外旋した状態で出土している。軟部組織の腐朽に伴い、股関節が外れたものと考えられる。左下肢は股関節、膝関節ともに関節状態にあり、膝蓋骨は膝関節にのった状態である。足骨は左右とも乱れた状態で出土し、原位置を保つものではない。右足根骨は、腓骨前面が玄室中央を向いた状態で、跗骨、腓骨

遠位端の若干西側から出土している。足骨の多くは脛骨より玄室中央寄りから出土している。このような位置関係から、軟部組織の腐朽に伴い右股関節が外れた際、足根骨は、膝関節同様軟部組織の腐朽が進んでおらず、脛骨・腓骨とともに外旋したものと考えられる。左足根骨は、脛骨が脛骨遠位とはほぼ関節状態であるのに対して、距骨は腓骨外側中位に近接して出土している。左下肢は上記のように関節した状態であり、膝蓋骨が膝関節上に位置したままであることから、右下肢と同様の理由で距骨のみ移動したとは考えにくい。また、左足骨が乱れた状態であることから、軟部組織腐朽後に脛骨と関節した状態にある距骨のみを取り出し、腓骨外側中位に接して置いたものと考えられる。

副葬品として、左上腕骨上から刀子が、右前腕外側に近接して刀子1、右寛骨下位より鉄鏃が出土した。また、右足骨の奥壁側に近接して、鉄鏃が出土している。

2号人骨は、膝蓋骨及び足骨に若干乱れがみられるが、その他はほぼ関節した状態にある。頸蓋骨は玄室中央側に顔面を向けた状態で、上下顎は関節している。頸椎以下腰椎まではほぼ関節した状態にあることから、埋葬時の状態を保つものと考えられる。上・下肢はともに関節した状態を保持する。右前腕は回内した状態である。下肢は股関節・膝関節ともほぼ関節した状態を保持する。膝蓋骨は、左右ともに膝関節の外側から出土し、いずれも後面を上にした状態である。これらの膝蓋骨は、軟部組織の腐朽後、膝関節から落下したものと考えられるが、一方で、股・膝関節ともほぼ関節状態である点、膝関節の正面が上を向いている点、及び左右ともに後面を上に向けた状態で出土している点などから、人為的に動かされた可能性も考えられよう。足根骨は、脛骨及び距骨は脛骨との位置関係から左右ともにほぼ関節した状態を保つものと考えられるが、足骨は若干乱れた状態である。

埋葬順位については、1号人骨は鉄鏃・刀子などの副葬品が見られることから、初葬の可能性考えられる。また、埋葬間隔に関しては、6号横穴墓は玄室内が非常に狭く、追葬に際し作業空間を確保するために、初葬者の片付けが可能であった場合、初葬者を片付けた後に追葬を行う可能性が高い。しかし、初葬と考えられる1号人骨は、片付けられたような人骨の乱れは見られない。したがって、初葬から追葬までの間隔が比較的短く、初葬者の軟部組織が腐朽していなかったため、片付けが行われなかったことによるものと考えられる。

2-5 7号横穴墓(図2)

7号横穴墓は、玄室奥壁に向かって左に2段、右に1段の屍床を有している。左側の屍床から2体、玄室中央付近から右側の屍床にかけて1体の埋葬が確認された。左側屍床の2体のうち、喉側の個体を1号人骨(熟年後半から老年男性)、玄室中央よりの個体を2号人骨(成年女性)とし、右側屍床にかけての個体を3号人骨(小児)とする。3体とも全ての関節がはずれ、原位置から移動した状態で状態で出土している。

1号人骨は、玄室奥壁に向かって左側壁近くに位置しており、左上腕骨・右尺骨・左鎖骨・左右大腿骨・脛骨・腓骨が軸をそろえた状態で片づけられている。左右の寛骨がこれらの長管骨の上のり、下顎骨が上下を逆転した状態で、左腓骨外果の下に左下顎頭を接した状態で検出された。右上腕骨・桡骨は長管骨の一群からやや離れた位置から検出された。仙骨と左鎖骨がこれに接している。頭蓋骨は顔面を玄室側に向け、左側頭部を上に向けた状態で検出され、上顎の付近からは頸椎1、腰椎3が検出された。軀幹骨は散乱しており、肋骨は右大腿骨・尺骨の下から、一部2号人骨の肋骨と混じった状態で検出された。

2号人骨は、玄室奥壁に向かって左側屍床に、1号人骨に接してやや中央よりから検出された。玄室奥壁近くから下股骨が検出され、右脛骨・左右大腿骨は長軸を横穴墓の軸線に一致させた状態で検出されたが、位置関係は乱れており、二次的に移動された結果と考えられる。右脛骨と左脛骨・腓骨は右脛骨よりやや玄室左奥壁よりに位置し、長軸を他の下肢骨とは方向を違えて検出された。左右の大腿骨はともに後面を上、骨頭を外側に向けた状態で検出され、左大腿骨頭近くに左寛骨が、右大腿骨頭から玄室中央よりにやや離れた位置から右寛骨が検出された。上肢骨と軀幹骨は散乱している。左尺骨と肋骨・椎骨の一部は、1号人骨の肋骨と混ざり、玄室左側屍床中央部付近に散乱している。頭蓋骨は右側頭部を下に向けた状態で検出され、下顎骨は上下を反転させ、頭蓋骨前面にオトガイ部右側を接した状態で検出された。

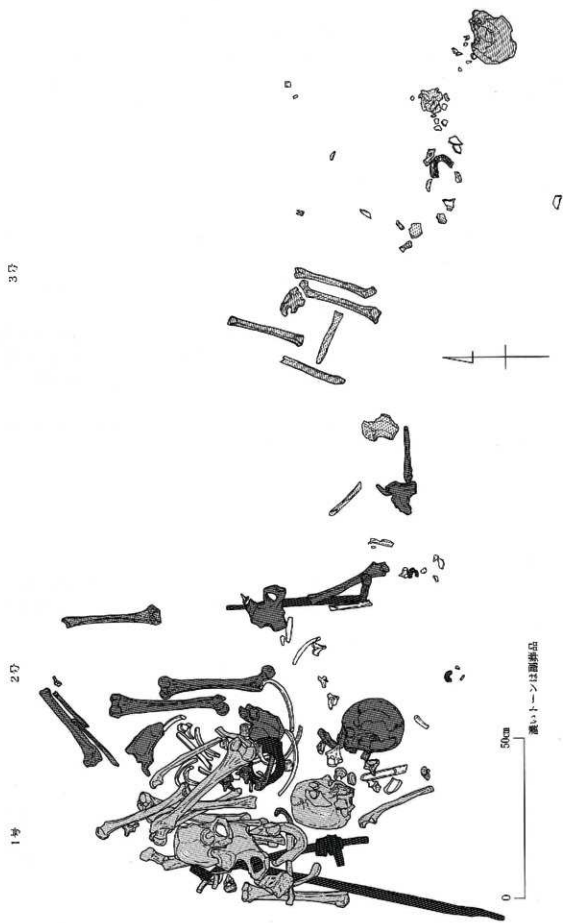


図2 7号横穴墓人骨出土状況

図2 7号横穴墓人骨出土状況

3号人骨は、玄室中央から右側屍床にかけて散乱した状態で出土された。頭蓋骨は、下顎骨・上顎骨・頭蓋左側の大きく3つの部位に分かれ散乱している。下肢骨は左右の腸骨・大腿骨・腓骨と仙骨が遺存しているが、上肢骨と頸椎骨は左上腕骨・橈骨が遺存するのみである。いずれの骨も二次的に移動されている。

以上のように7号横穴墓から出土した3体分の人骨は、いずれも二次的に移動された状態であることから、埋葬順位については不明である。

2 6 9号横穴墓

9号横穴墓からは1体の成人人骨が出土したが、各部位の関節が全て外れた状態で、玄室内にまとまった状態で出土した。頭蓋骨は左側頭骨を下にした状態で、顔を玄門に向けた状態である。下顎骨は、頭蓋骨と関節が外れた状態で、頭蓋骨の南側に位置する。下顎骨と大腿骨を除いた部位は、全て頭蓋骨より玄室右側（東側）からまとまった状態で出土している。左右の寛骨は、恥骨結合面がともに東側を向いた状態で出土している。これらの寛骨の間から、四肢骨が長軸をほぼ北西-東南の方向にそろえて出土している。これらの四肢骨のうち、左右肩甲骨は重ねられた状態であり、左右腕骨が上下に一部重なって近接した位置から出土している。ただし、その他は部位ごとにまとまって出土するといったような何らかの規則性は認められない。これら以外に左右大腿骨が出土しているが、左大腿骨は、頭骨の北西側から後頭骨に接した状態で、北東-南西方向で近位を奥壁側にした状態で出土している。右大腿骨は、上記四肢骨の南側から、北西-東南方向で近位を奥壁側にした状態で出土している。

以上のように、9号横穴墓出土人骨は、関節状態を保つ部位はなく、埋葬時の原位置を保持するものではない。したがって、埋葬後かなりの時間を経たのち再開口し、動かされたものと考えられる。

3. 人骨所見

3-1-1 2号横穴墓1号人骨

【保存状態】

人骨の保存は良好で、ほぼ全身の骨が遺存している。

頭蓋骨は、左側頭骨の一部を欠損するが、それ以外は残存している。眼窩上隆起、外後頭隆起および乳様突起が発達している。頭蓋主縫合は、冠状縫合、矢状縫合、ラムダ状縫合とともに、内板はほぼ癒合、外板は一部閉じている。残存歯式は以下のとおりである。

×	○	M ¹	P ¹	P ¹	C	○	○	I ¹	I ²	×	×	P ²	M ²	M ²	○
×	M ₂	○	○	○	C	×	I ₁	×	○	○	○	P ₂	M ₂	M ₂	○

(○歯槽開放、×歯槽閉鎖、/欠損、△歯根のみ、・遊離歯、() 未萌出、C 齶歯、以下同様)

歯牙の咬耗度は概算 2°b-3°である(橋原1957)。上顎右第1大臼歯の歯槽には、膿瘍がみられる。

頸椎骨は左右鎖骨、左右肩甲骨、頸椎、胸椎、肋骨が残存する。鎖骨は左右ともに肩峰端が欠損している。肩甲骨は左右ともに関節窩および外側縁付近が遺存する。胸椎は第1頸椎から第7頸椎まで遺存する。胸椎10点が残存する。肋骨は右肋骨8本、左肋骨は9本が遺存する。仙骨は仙骨底付近が遺存するのみである。

上肢骨は、左右上腕骨および左右の前腕骨が残存している。上腕骨は左上腕骨肩頭部を欠損する。右上腕骨は骨体部が一部欠損するが、その他はほぼ全体が残存する。右橈骨は遠位端が欠損し、右尺骨は近位端から骨体中位までが遺存する。左橈骨と尺骨はほぼ全体が残存する。上腕三角筋前面は発達している。

下肢骨は、寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨、足骨が残存する。寛骨は左右ともに腸骨および坐骨上半部が遺存する。右大腿骨は小転子から骨頭にかけての部分が一部欠損し、遠位端内側面を欠損する。左大腿骨は大転子を欠損する。他はほぼ全体が残存する。脛骨は左右ともほぼ完全している。腓骨は右腓骨が骨体を一部欠損し、左腓骨は骨

体部の破片が残存するのみである。足骨は右が踵骨、距骨、立方骨、内側楔状骨、第3、4中足骨が残存する。左は踵骨の小片、距骨、中足骨1が残存する。寛骨大坐骨切痕角は狭く、大腿骨粗線及びヒラメ筋線は発達している。

【年齢・性別】

頭蓋縫合の癒合もみられ、歯牙の咬耗度も進行していることから、熟年と推定される。性別は、眼高1隆起・外後頭隆起の発達のみられ、大坐骨切痕角が狭く、大腿骨粗線・ヒラメ筋線の発達のみられることなどから、男性と判定される。

【形質】

頭蓋主要計測値、四肢骨計測値、および頭骨小変異は表1-7に示した。頭蓋は、最大長が185.5mm、Ba-Br高が937.0mmとやや大きく、それに対して頭蓋最大幅は131.5mmと小さい値であることから、頭蓋は幅狭で長く高い傾向が見られる。顔面は、上顔高は61.5mmと低く、中顔幅が96.5mmであったため、上顔示数(V)は63.7となり、豊後の古墳人としてはかなり低上顔傾向を示す。頬骨弓幅は、137.5mmであり、豊前と豊後古墳人の中間ほどの値であるが、コルマンの上顔示数は44.7で南九州古墳人の平均値より小さい値となっている。眼窩は、眼窩高(左)が32.1mmとやや低めであるものの、眼窩幅が42mmと大きいことから、結果的に眼窩示数は76.4となり、豊後人の平均的な値に近い。鼻幅、鼻高ともやや小さい値である。四肢骨は、上腕が最大長304mmと西日本古墳人の平均的な値に比べて大きい。また、骨体中央周も75.5mmであることから、同時代の平均的な上腕より骨幹が太く長い傾向を示す。大腿骨は最大長431mm、中央周90mmと大きめで、北部九州弥生人に近い。脛骨は最大長は338.5mm、栄養孔径が92.0mmであり、西日本古墳人より最大長は小さく、骨体はやや大きな値である。

3-1-2 2号横穴墓2号人骨

【保存状態】

人骨の保存は比較的良好で、ほぼ全身の骨が遺存している。

頭蓋骨は、左右の頬骨弓を欠損する他はほぼ残存する。下顎は右下顎枝から左下顎歯槽部付近にかけて残存する。外後頭隆起、乳様突起が発達している。頭蓋土縫合は、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合が内・外板ともに開放している。残存歯式は以下の通りである。

○	M ¹	M ²	P ¹	P ²	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	○
M ₁	M ₂	M ₃	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃
					•				•						

歯の咬耗度は橋原1°c~2°aである(橋原1957)。

軀幹骨は左肩胛骨、胸椎、腰椎、肋骨、仙骨が遺存する。左鎖骨は胸骨端、肩峰端を欠損する。胸椎7点、腰椎5点が残存する。肋骨は右10点、左5点が残存する。仙骨はほぼ完存する。

下肢骨は、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨および左右の足骨が残存する。寛骨は左腸骨翼が欠損し、左右ともに恥骨下枝が欠損する他はほぼ残存する。右大腿骨は骨頭の一部、大転子および外側顆を欠損する。左大腿骨はほぼ完存する。右脛骨はほぼ完存し、左脛骨は内側顆を欠損する。右腓骨は骨端の一部が欠損し、左腓骨は近位端を欠損する。足骨は右脛骨、距骨、舟状骨、外側楔状骨、立方骨、第2~第5基節骨、第2および第4中足骨が残存する。左は踵骨、距骨、内側楔状骨、舟状骨、第2基節骨、第1中足骨および第2あるいは第3中足骨が残存する。寛骨大坐骨切痕角は狭く、大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線はともに発達している。

【年齢・性別】

頭蓋土縫合は内・外板ともに開放しているが、歯牙の咬耗度からみて、本人骨は成年後半~熟年と推定される。また、外後頭隆起・乳様突起の発達のみられ、腿骨粗線・ヒラメ筋線の発達のみられることから、男性と判定さ

れる。

【彩頁】

頭蓋主要計測値、四肢骨計測値、および頭骨小変異は表1～7に示した。頭蓋は、最大長が183mm、Ba-Br高が136.0mmで、頭蓋最大幅は137.5mmとやや小さい値であることから、頭顱高示数は98.9と幅状の傾向を示す。顔面は上顔高が68.3mm、中顔幅が101.1mmで、上顔示数(V)は67.6と北部九州古墳人の平均値よりやや小さく、低下傾向を示す。眼窩は、眼窩高(左)が32.9mmであり、眼窩幅は43.7mmとやや大きいことから、結果的に眼窩示数は75.3となり、豊後人の平均値よりやや低く、低眼窩である。鼻幅は27.1mmで広鼻である。四肢骨は、上腕骨骨体中央周が67mmと北部九州・山口の弥生人に近く、西日本古墳人に比べやや太い傾向を示す。前腕は、桡骨最小周が若干古墳人の平均を上回る。これらから、上肢骨幹が西日本古墳人に比べ若干太い傾向といえる。大腿骨は最大長407mm、中央周83.5mmとやや小さい。脛骨は最大長は333.9mm、栄養孔位周が92.5mmであり、西日本古墳人より最大長は小さく、骨体はやや太い傾向を示す。

3-2 長湯3号横穴墓出土人骨

人骨の保存状態は個体によって異なるが、おおむね良好である。人骨は片付けのため頭蓋骨とその他の部位がほとんどが離れた位置から出土していることから、調査時に下肢骨を中心とした個体識別を行った。また、整理・分析過程で性判定及び年齢推定を行ったが、各部位を総合した個体識別を行うことが困難であり、各部位ごとの個体数の同定を行った。その結果、出土状況のところでふれたように、木横穴墓に伴う人骨は、少なくとも成人9体、小児1体の合計10体と考えられる。以下頭蓋を中心に、年齢・性別を記載し、四肢骨については、形質的特徴を中心として記載する。

1) 頭蓋骨

1号頭蓋

【保存状態】頭蓋の遺存状況は良くない。前頭骨および頭頂骨頭頂部付近が残存する。眼窩上隆起は発達している。頭蓋主縫合は冠状縫合、矢状縫合の内・外板ともに開いた状態である。下顎は残存しないが、当頭蓋に伴うと判断される歯牙が頭蓋骨の奥壁側から出土している。残存歯牙の歯式は以下のとおりである。

•	•	•	•	•	•	•	•		•	•
/ M ⁺ M ⁺ P ⁺ P ⁺ /	I ⁺ /		/ / C	P ⁺ /	/ / / / /	/ / / / /	/ / / / /			
M ₁ M ₂ M ₁ P ₂ P ₁ /	/ /		I ₁ /	/ / / / /	/ / / / /	/ / / / /	/ / / / /			
•	•	•	•	•	•	•	•		•	•

歯牙の咬耗度は榊原の2°b-3°である(榊原1957)。

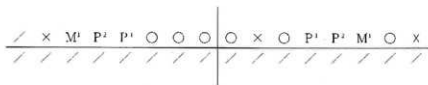
【性別・年齢】性別は、眼窩上隆起の発達が見られることから、男性と判定される。年齢は、頭蓋主縫合の癒合は進んでいないが、歯牙の咬耗がかなり進行していることから、熟年以上と推定される。

2号頭蓋

【保存状態】人骨の遺存状態は良好である。上顎骨、鼻骨および右頬骨が欠損し、また、右側頭骨後方から後頭骨にかけての部分も欠損する。眼窩上隆起および外後頭隆起がやや発達し、乳棘突起も発達している。前頭結節の発達が見られる。頭蓋主縫合は、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合において外板が開放、内板が一部癒合している。また、前頭縫合外板も一部開放している。下顎は右側顎枝および左側顎角を欠損する他は残存する。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

•	•	•	•	•	•	•	•		•	•
x x M ⁺ P ⁺ P ⁺ x x x	x x x		x x C	x x x x x	x x x	x x x	x x x			
x M ₁ M ₁ P ₂ Δ C I ₂ I ₁	/ / /		I ₁ I ₂ C	P ₁ P ₂ M ₁ M ₂ ○	/ / /	/ / /	/ / /			

aである。



【性別・年齢】性別は、眼窩上隆起・乳様突起・外後頭隆起の発達がみられることから、男性と判定される。年齢は、頭蓋結合の癒合状況および歯牙咬純度から、成年と推定される。

【形質】頭蓋主要計測値、および頭骨小変異は表1・2・7に示した。頭蓋は、最大長が178mm、Ba-Br高が131mmで、頭蓋最大幅は132mmであり、全体的にやや小さい値である。頭幅高示数は、99.2と長頭で幅が狭いという傾向を示す。顔面は、上顔高が65.4mm、中顔幅が97.4mm、頬骨幅が135mmである。上顔示数は67.1(V)、48.4(V)といずれも低い値で、顔が低く広い傾向を示す。眼窩は、眼窩高が32.8mmで豊後古墳人の平均値に近いが、眼窩幅が44.4mmとやや大きいことから、眼窩高示数は73.9で豊後人の平均値より低く、低眼窩の傾向を示す。鼻幅は26.2mmで過広鼻である。

8号頭蓋

【保存状態】人骨の保存状態は良好である。頭蓋は上顎骨体、左右頬骨弓、右頭頂骨の一部を欠損する他は残存する。眼窩上隆起・外後頭隆起は発達する。乳様突起はやや発達する。頭蓋主結合は、冠状縫合・矢状縫合は外板が一部開き、内板はほぼ閉鎖した状況である。ラムダ状縫合は外板が一部閉じ、内板はほぼ閉鎖した状況である。

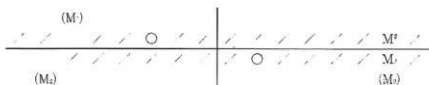
【性別・年齢】性別は、眼窩上隆起・外後頭隆起の発達がみられることから、男性と判定される。年齢は、頭蓋主結合の癒合状況から、成年以上と推定される。

【形質】頭蓋主要計測値、および頭骨小変異は表1・2・7に示した。頭蓋は、最大長が185mm、Ba-Br高が132.0mmで、頭蓋最大幅は130.5mmである。頭蓋最大幅が小さいことから、頭幅高示数は101.5、頭長幅示数は70.5となり、幅が狭く長頭の傾向を示す。顔面は、眼窩高が35.9mm、眼窩幅が45.1mmでともにやや大きく、眼窩高示数は79.6と豊後古墳人に比べやや高く、筑前古墳人の平均値に近い。

9号頭蓋

【保存状態】人骨の保存状態はあまり良好ではなく、頭蓋骨小片および歯牙が一部遺存するのみである。

頭蓋は小片のため部位は不明である。残存歯牙の歯式は以下のとおりである。上下顎の歯冠のみが形成されている。



【性別・年齢】性別は、小児であることから判定不能である。年齢は、歯冠のみ形成されている永久歯牙が残存するが、残存状況が悪く詳細は判定不能である。

以上9体の頭蓋のいずれに帰属するのかわからないが、下顎が遺存する。残存歯牙の歯式は以下のとおりである。性別は不明であるが、ほとんどの後歯が脱落し、歯槽も閉鎖していることから、老年と推定される。



ii) 四肢骨

上肢骨の保存状態は、あまり良くない。下肢骨については、おおむね良好な保存状態である。

上肢の主要計測値は表3・4に、下肢骨の主要計測値は表5・6に示した。上肢は、4号上肢上腕の骨体中央周70mmが最大で、2号上肢の62mmが最小値である。2号上肢をのぞくその他の上腕は、西日本古墳人よりも太いことを示している。前腕は計測可能な個体が1体のみであるが、橈骨最小周は39.5mmと西日本古墳人よりやや太い。下肢は、大腿骨最大長が下肢F、Jで計測可能であるが、いずれも西日本古墳人より短い数値である。骨体中央周は、下肢Aの91mmが最大で、下肢Fの78mmが最小である。西日本古墳人の平均値を上回るのは2体である。そのほかの下肢H、J、Gは古墳人の平均値をやや下回る。骨体中央断面示数は西日本古墳人の平均値を4体が上回る。このことから、大腿骨は、西日本古墳人の平均値より短く、骨体もやや細いが、柱状性は平均的古墳人より強い傾向を示すものと考えられる。脛骨は、全長、最大長のいずれをみても、計測可能であった個体は西日本古墳人よりも短い。栄養孔位周は、6体中2体で西日本古墳人の平均値を上回るが、そのほかは平均値以下である。

4号頭蓋と同一個体と考えられる上肢も含めた、四肢骨の各部位ごとの個体数は、表8のとおりである。脛骨の個体数から男性が少なくとも7体、また骨髄の個体数から女性が少なくとも2体、合計9体の成人が埋葬されていたものと考えられる。これらの四肢骨について、骨端が遺存している人骨のなかで骨端線がみられるものはない。また、骨端が遺存していない人骨に関しても、骨体中央の太さや骨の厚みなどから、これらの人骨に未成年者が含まれている可能性は低いと考えられる。

3-3 長湯4号横穴墓出土人骨

【保存状態】人骨の遺存状態は良くない。頭蓋片2体分、下顎骨・歯牙・四肢骨片・寛骨片が残存する。

頭蓋A：頭蓋骨は、前頭骨から顔面にかけては小片のみ残存し、頭頂骨および側頭骨、後頭骨も一部欠損する。外後頭隆起・乳様突起ともに発達し弱い。矢状縫合・ラムダ縫合は内・外板ともに開いている。上顎は残存しない。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/ / M' / / P' C I' I'		I' I' C P' P' M'	/ /
M ₂ × M ₁ × P. ○ I ₂ I ₁		I ₁ I ₂ C P ₂ × × M ₂	/ /

歯牙の咬耗度は橋原 2°b-3°である（橋原 1957）。この他に歯種の特定は不可であるが、歯根1点が残存している。

頭蓋B：頭蓋骨は上顎骨、前頭骨右半、右頭頂骨、後頭骨の一部を欠損している。外後頭隆起・乳様突起は発達しているが、眼窩上隆起の発達し弱い。冠状縫合・矢状縫合の外板は開いているが、内板は閉じている。ラムダ縫合は内・外板ともに開いている。下顎は髁骨のみが遺存する。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/ / P' P' C I' I'		P' P' / /	/ /
/ / / / / / / / / / / / / / / /		/ / / / / / / / / / / / / / / /	/ /

歯牙の咬耗度は橋原の 2°bである（橋原1957）。

これら頭蓋骨の他にも脛骨、上肢骨および下肢骨が残存するが、遺存状態が悪く個体識別は大腿骨以外は不可である。

脛骨は肋骨片が確認されるが、遺存状態は不良である。

上肢骨は、前腕骨と思われる破片が認められるが、遺存状況が悪いことから部位等については不明である。

下肢骨は寛骨片、数片の大腿骨片が認められる。そのうち、大腿骨の粗線が発達しているものと、大腿骨体が細みのものの2体分が残存する。

【性別・年齢】

頭蓋A：性別は、外後頭隆起・乳様突起が未発達である点から、女性の可能性が考えられる。年齢は、矢状縫合・ラムダ縫合の内・外板ともに開いているが、歯牙咬耗度がかなり進行していることから、熟年後半以上と推定される。

頭蓋B：性別は、外後頭隆起・乳様突起が発達している点から、男性の可能性が高い。年齢は矢状縫合・冠状縫合の外板が開いて、内板が閉じている点、ラムダ縫合が、内・外板ともに開いているが、歯牙咬耗度が胸原2°bとかなり進行していることから、熟年と考えられる。

大腿骨：大腿骨は、粗線の発達が認められる個体と、骨体が華奢な個体が認められたことから、前者は男性、後者は女性の可能性が推定される。そのため上記頭蓋骨のうち、男性と考えられる人腿骨は頭蓋Bに属し、女性と推測される大腿骨は頭蓋Aに属する可能性が考えられる。

3-4-1 長湯6号横穴墓1号人骨

【保存状態】人骨の保存状態は良好で、手骨以外は概ね遺存している。

頭蓋骨は右前頭部、右頭頂骨と左側頭骨の一部および後頭骨右下を欠損する。舌骨が残存する。外後頭隆起および乳様突起は発達している。冠状縫合は内・外板ともに開いているもの、矢状縫合・ラムダ縫合は内・外板ともに一部閉鎖している。下顎は、左右の下顎角および下顎頭付近が欠損している他はほぼ遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

M ³	M ²	M ¹	P ³	P ²	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³
M ₃	M ₂	M ₁	P ₃	P ₂	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃

歯牙の咬耗度は胸原1°bである(橋原1957)。

軀幹骨は頸椎、胸椎、腰椎、仙骨、胸骨、肋骨が残存する。頸椎は第1頸椎を欠損する他は全て残存し、胸椎、腰椎についても全て遺存する。仙骨は耳状面付近を欠損する。胸骨は刺状突起および胸骨先端部を欠損する他は遺存する。左右肋骨ともに9本残存している。

上肢骨は左右鎖骨、左右肩甲骨、左右上腕骨、左右尺骨、左右腕骨、右指骨が認められる。いずれも、破損しており、完存するものはない。右鎖骨は肩峰端を欠損し、左鎖骨は胸骨端・肩峰端ともに欠損する。肩甲骨は、右は関節窩のみ残存し、左は関節窩から外側縁にかけての部分が残存する。上腕骨は左右ともに骨頭が欠損する。指骨は右のみが認められ、小指形骨、中手骨が3本、第1末節骨が残存している。上腕三角筋粗面は発達している。

下肢骨は、左右寛骨、左右大腿骨、左膝蓋骨、左右脛骨、左右腓骨、左右距骨、左右踵骨、左右指骨が認められる。右寛骨は耳状面付近を欠損し、左寛骨は腸骨翼を一部欠損するが、そのほかはほぼ残存する。大腿骨は左右ともに骨頭部を欠損している。脛骨は左右とも骨端部を一部欠損する。踵骨は左右ともに一部欠損している。左の距骨、踵骨片、舟状骨、立方骨、楔状骨(内・中・外)第1～5中足骨、右の第1～4基節骨、第1末節骨、左の基節骨が残存している。寛骨大坐骨切痕角は狭い。恥骨結合面には平行隆線が明瞭にみられ、腹背方向に貫通するが、谷が若干浅くなっている。大腿骨粗線及び脛骨ヒラメ筋線は発達している。

【性別・年齢】性別は、外後頭隆起・乳様突起がよく発達している点、大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線・上腕骨三角筋粗面が良く発達している点、大坐骨切痕角が狭い点から、男性と判定される。年齢は、矢状縫合・ラムダ縫合が内・外板ともに一部閉鎖しているが、冠状縫合は内・外板ともに開いており、歯牙の咬耗度がそれほど進んでおらず、恥骨結合面に平行隆線が比較的に明瞭に認められる点などから、10代末から20代前半と推定される。

【形質】頭蓋主要計測値、四肢骨計測値、および頭骨小変異は表1～7に示した。頭蓋は、最大長が196.5mmと大きく、Ba-Br高が137.5mmで、頭長高示数が77.9とやや頭が高い傾向を示す。顔面は、上顔高が71.4mm、中顔幅が103.1mmで、上顔示数(V)は69.3と筑後古墳人の値に近く、低上顔な傾向を示す。眼窩は、眼窩高が35.6mm

で、眼窩幅が14.8mmといずれもやや大きい。眼窩示数は79.5で豊後人の平均値よりやや高い、中眼窩である。鼻幅は24.7mm、鼻高は48.3mmといずれもやや小さく、広鼻である。四肢骨は、上腕骨体中央周は75.1mmと西日本古墳人の平均値よりやや太い傾向を示す。大腿骨は、骨体中央周が72.5mmで、西日本の古墳人平均値と比べてかなり小さい。脛骨は、最大長が309mm、栄養孔周が78.5mmであり、短く葉骨である。

【特記事項】顔面に朱の付着が認められた。

病変としては、右腕骨下面下位の骨間線から外側縁にかけて、骨折痕と考えられる骨変化がみられた。右尺骨には明瞭な骨折痕は認められない。骨折箇所は骨体がねじれた状態で変形癒合している。

3-4-2 6号横穴墓2号人骨

【保存状態】人骨の保存状態は良好で、手骨以外は概ね遺存している。

頭蓋骨は左頬骨と左側頭骨の一部を欠損する。眼窩上隆起はよく発達している。冠状縫合は内・外板ともに開いているものの、矢状縫合・ラムダ縫合は内・外板ともに一部閉じている。下顎は右下顎頭を欠損する他はほぼ完存する。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

M ³	M ²	M	P ³	P ²	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	/
M ₂	M ₂	M	P ₁	P ₁	C	I ₁	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₂

歯牙の咬耗度は橋原2^aである(橋原 1957)。

軀幹骨は頭椎、胸椎、腰椎、仙骨、胸骨、胸骨、左右肋骨が遺存する。頸椎は第1頸椎から第7頸椎まで完存する。胸椎は第1～第3および第8～第12胸椎が遺存する。そのほかに胸椎片3点が認められる。腰椎は第1～第5腰椎まで遺存する。肋骨は右肋骨2本および小片、左肋骨8本と小片が遺存している。胸骨はほぼ完存する。また一部欠損しているが、仙骨も認められる。腰椎にはリッピングが認められる。

上肢骨は左右肩甲骨片、左右鎖骨、左右上腕骨、左右尺骨、左右桡骨、右指骨が遺存する。肩甲骨は左右ともに関節窩付近が遺存するのみである。左右の上腕骨はともに骨頭部を一部欠損する他はほぼ完存する。桡骨は、右桡骨遠位端、左桡骨近位端が欠損する。尺骨は左右ともに骨端が欠損する。また、指骨は右の中手骨、基節骨、左の中手骨片が遺存している。上腕骨の三角筋粗面が発達している。

下肢骨は、左右寛骨、左右大腿骨、左右膝蓋骨、左右脛骨、左右腓骨、左右距骨、左右踵骨、左右指骨が認められる。寛骨は腸骨翼および坐骨を欠損している。大腿骨は左右とも大転子付近を欠損し、左大腿骨は遠位端も欠損する。脛骨は左右とも骨端部を一部欠損する。右膝蓋骨は後面のみ遺存している。また、足指骨は左右の距骨、踵骨、舟状骨、立方骨、外側楔状骨、右の内側楔状骨、第1～4中足骨、第1基節骨、左の第1～5中足骨、基節骨が遺存している。寛骨大坐骨切痕角は狭い。大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線が発達している。

【性別・年齢】性別は、眼窩上隆起が発達している点、大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線・上腕骨三角筋粗面が良く発達している点、大坐骨切痕角が狭い点から、男性と判定される。年齢は、冠状縫合の内・外板、矢状縫合・ラムダ縫合の外板は開いているものの、矢状縫合・ラムダ縫合の内板が一部閉じており、歯牙咬耗度の進行状態から、成年と推定される。

【形質】頭蓋主要計測値、四肢骨計測値、および頭骨小変異は表1～7に示した。頭蓋は、最大長184.5mm、Ba-Br高141.0mm、頭蓋最大幅142.5mmで、頭高示数98.9、頭長示数76.4である。脳蓋が高く狭頭の傾向を示す。顔面は、上顔高が68.5mm、中顔幅が117.4mm、頬骨弓幅が138.6で、ウイロビウ上顔示数(V)61.3、コルマン上顔示数(K)は49.4であり、上顔が低く広い傾向を示す。眼窩は、眼窩高は33.8mmで豊後古墳人の平均値に近いものの、眼窩幅が45.5mmと大きな値であることから、眼窩示数は74.3となり肥前古墳人の平均値に近い、低眼窩である。鼻幅25.8mm、鼻高49.2mmで、鼻示数52.4の広鼻である。四肢骨は、上腕骨体中央周は69.5mmで津雲純文人より大きな値である。大腿骨は、最大長398mm、中央周88.5mmで、西日本古墳人よりも短く頭尖な傾向

を示す。脛骨は、最大長は327.5mm（右）、栄養孔位周が94mmであり、大腿骨と同様に西日本古墳人の平均値よりも短く頑丈な傾向を示す。

【特記事項】顔面に朱の付着が認められる。

3-5-1 7号横穴墓1号人骨

【保存状態】人骨の遺存状態は良く、ほぼ全身の骨が遺存する。

頭蓋骨はほぼ完存している。頭蓋主縫合は、冠状・矢状・ラムダ縫合の内板は閉鎖しているが、外板は冠状・ラムダ縫合が線のみ残り矢状縫合は閉鎖している。外後頭隆起・乳様突起は発達している。眼窩上隆起の発達は弱い。下顎骨は筋突起、下顎角の先端を欠くが、その他は残存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	×		
M ₂	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	○	×	×	○	○	P ₂	×	M ₂

歯牙の咬耗度は極原3°である（極原1957）。下顎右第2大臼歯槽部に歯周疾患と思われる膿胞が認められた。また下顎右第2大臼歯は、歯牙の咬耗度が1°bであり、対向歯牙が早くに脱落した可能性が考えられる。

軸幹骨は頸椎1、胸椎3、腰椎2、右肋骨4本が遺存している。仙骨は下端を欠いている。

上肢骨は左右鎖骨、左上腕骨、左右尺骨、左右桡骨が遺存している。右腕骨は骨頭部の背面側を、左上腕骨は骨頭部前半部をそれぞれ欠いている。上腕骨の三角筋筋面は発達している。

下肢骨は左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、右距骨が遺存している。大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線の発達はともに良好である。

【性別・年齢】性別は、乳様突起・外後頭隆起が発達していること、また大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線が発達していることから、男性であると考えられる。年齢は、歯牙の咬耗が進行しており、上顎における後歯の脱落と歯槽閉鎖が見られること、また頭蓋縫合の閉鎖が進行していることから、熟年後半から老年であると考えられる。

【形質】頭蓋主要計測値、四肢骨計測値、および頭骨小変異は表1-7に示した。頭蓋は、最大長が189mm、Ba-Br高が135.5mmで、頭蓋最大幅は141.5mmであることから、頭輪高示数は95.8であり豊後古墳人の平均値よりやや頭が高く若干頸が狭い傾向を示す。顔面は、上顔高が69mm、中顔幅が97.9mm、頬骨弓幅が138.8mmで、ウィルヒョウ上顔示数（V）が70.5と豊後や豊前古墳人を上回る値である。コルマン上顔示数（K）は49.7で豊後古墳人の平均値と同様の値である。眼窩は、眼窩高が35.5mm（右）で、眼窩幅が43mm、眼窩示数は80.3（右）の中眼窩である。鼻幅は25.4mmで中鼻である。四肢骨は、上腕骨中央周が69.5mmと西日本古墳人に比べたい傾向を示す。大腿骨は、最大長426mm（右）、中央周91mmで、最大長は西日本古墳人に近い値であるが、骨体中央周は大きく頑丈な傾向を示す。脛骨は、最大長は356mm、栄養孔位周が97.5mmであり、最大長・骨体周とも西日本古墳人の平均値より大きい。このことから下肢は、全体的に太く頑丈な傾向を示す。

【特記事項】頭蓋骨左側頭部、左鎖骨肩峰端、右尺骨遠位内側、左上腕骨遠位外側に受傷痕が認められる。頭蓋骨の傷は、左側面の顔面部から後頭部までを、左上から斜に横断する長い斬創である。傷の全長は14cmに及び、顔面部の左上顎骨体の梨状口から左眼窩下縁、左頬骨の眼窩外側縁をへて、後頭部の左アステリオンに達している。傷は顔面部では少なくとも鼻終に達し、脳頭蓋では乳様突起に達しており、傷の深さは最も深い部分で5cmに及んでいる。頭蓋骨の切断面より下部、すなわち頬骨弓や外耳を含めた側頭骨の大半は横穴墓内から検出されなかった。左鎖骨は、肩峰端2-3mm程度が、水平面に対しほぼ垂直に切断されている。右尺骨は遠位内側、左上腕骨は遠位外側に、長軸方向に沿った傷が見られた。

病変としては右腕骨遠位端に骨折痕と考えられる骨変化が認められる。拳腕から背面へ斜め近位方向に骨折痕が認められることから、手をついて倒れた際に骨折することの多いColles型の骨折と推定される。この種の骨折は、腕骨の骨折と同時に尺骨茎状突起骨折や手根骨の骨折を伴うことがあるが、尺骨には明瞭な骨折痕は認めら

れない。

3-5-2 7号横穴墓2号人骨

【保存状態】人骨の遺存状態は良好でほぼ全身の骨が遺存する。

頭蓋骨は大後頭孔周辺の頭蓋底を欠く。眼窩上隆起、前頭結節、乳様突起、後後頭隆起の発達はあまり顕著でない。頭蓋主縫合は内板では一部閉鎖しており外板は開放している。下顎骨は左右の下顎頭を欠く。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

M ¹ M ² ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ M ¹ ○
M ₂ M ₁ M ₁ P ₂ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ P ₁ ○ M ₂ M ₂ M ₂

歯牙の咬耗は橋原1°c~2°aである(橋原1957)。

軀幹骨は、肋骨、椎骨については欠損が多い。肋骨は右肋骨3本、左肋骨6本、左右不明肋骨片4のほかに破片若干が遺存する。椎骨は軸椎、胸椎1点、腰椎2点が遺存する。このほかに個体同定に卒らなかつた椎骨片が残存する。仙骨は下半を欠いている。

上肢骨は左右肩甲骨、左右上腕骨、左右尺骨、左橈骨が遺存している。上腕骨の三角筋粗面は発達している。

下肢骨は左右寛骨、左右人腿骨、左右脛骨、左右腓骨、左距骨、左右不明中足骨1本が残存している。寛骨大坐角切痕角は広い。大腿骨、脛骨は良好に遺存しており、それぞれの粗線の発達がみられる。腓骨は左右とも近位側約半分を欠損する。

【性別・年齢】性別は、眼窩上隆起と乳様突起、下肢骨の粗線の発達が弱いこと、寛骨の大坐角切痕角が広いことから、女性であると考えられる。年齢は、歯牙の咬耗、頭蓋縫合などから、成年と推定される。

【形質】頭蓋主要計測値、四肢骨計測値、および頭骨小変異は表1-7に示した。頭蓋は、最大長が176.5mmと大きく、頭蓋最大幅は132mmと小さい値であることから、頭長幅示数は74.8となり、頭の幅が狭く、長頭の傾向を示す。顔面は上顔高が61.4mm、中顔幅が101mm、頬骨弓幅が127.6mmである。上顔示数は、ウィルヒョウ上顔示数が、60.8(V)で南九州と同値である。コルマン上顔示数(K)は48.1で陳ヶ台人骨に近い。これらのことから上顔が低く広い傾向を示すものといえる。眼窩は、眼窩高が33.2mm、眼窩幅が41.6mmであり、東九州・西中国地方の古墳人に比べ眼窩高がやや大きく眼窩幅が小さい。眼窩示数は79.8の中眼窩で、東九州・西中国地方古墳人に比べ眼窩が低く、西九州古墳人に近い。四肢骨は、大腿骨は骨体中央周が73mmとやや細い。脛骨は、榮養孔位周が75.5mmであり、西日本古墳人より細い値である。

【特記事項】2号人骨にも1号人骨同様に、右機骨遠位端に骨折痕が認められる。掌側から背面へ斜め近位方向に骨折痕が認められることから、手をついて倒れた際に骨折することの多い、Colles型の骨折と推定される。この骨折は、同時に尺骨茎状突起骨折や手根骨の骨折を伴うことがあるが、尺骨には明瞭な骨折痕は認められない。骨折箇所は変形した状態で治癒しており、橈骨骨端が掌面に屈曲した状態である。

3-5-2 7号横穴墓3号人骨

【保存状態】人骨の遺存状態は良好で、軀幹骨以外は良く残存している。

頭蓋骨は左頭頂骨、後頭骨の過半、前頭骨の左半分、左側頭骨、上顎骨が遺存している。頭蓋主縫合は内・外板とも開放している。下顎骨は、左右の下顎枝を欠き、内部に未萌出の永久歯が確認される。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

(M ¹)(M ²)	(P ¹)(C)	(M ²)(M ¹)
m ² / / ○ ○	○ I ² d c m ² M ²	
/ M ₂ m ₂ m ₁ ○ ○	○ ○ ○ m ₁ m ₂ M ₂ M ₂	

上肢骨は左上腕骨、左桡骨が遺存している。左上腕骨は近位端を欠いている。また左上腕骨の遠位端は癒合していない。左橈骨は骨体が遺存する。

下肢骨は左右大腿骨、左右脛骨が遺存する。遺存は良好であるが左脛骨のみ近位側を欠く。大腿骨、脛骨ともに全ての骨端が癒合していない。

【性別・年齢】性別は、小児骨であることから不明である。年齢は、歯牙の萌出の進行程度から8ないし9歳であると推定される

3-6 9歳横穴墓出土人骨

【保存状態】人骨の保存状態は良好である。頭蓋骨及び四肢骨はほぼ全体が残存する。

頭蓋骨は、左右頬骨弓、左乳様突起及び大後頭孔付近から蝶形骨翼状突起にかけての部分欠損する他はほぼ残存する。眼窩上隆起、乳様突起が発達する。頭蓋半縫合は冠状縫合・矢状縫合の内・外板とも一部癒合している。ラムダ状縫合は外板は開放し、内板はほぼ閉じた状態である。下顎骨は下顎体前面を欠損する。残存歯牙の歯式は以下のとおりである。

M ³	M ²	M ¹	P ³	P ²	C	I ²	I ¹		I ²	I ¹	C	P ³	○	M ¹	M ²	M ³
/	/	/	/	/	/	/	/		/	/	/	/	/	/	/	/
M ₂	M ₁	/	/	/	/	/	/		/	/	/	/	/	M ₁	M ₂	M ₃
.

歯牙咬耗度は橋原の1°c-2°aである(橋原1957)。

上肢骨は、左右肩甲骨、左右上腕骨、右尺骨、左桡骨・尺骨が残存する。肩甲骨は左右ともに下角から内側縁下半にかけての部分欠損する。右上腕骨は骨頭を欠損し、左上腕は遠位端を欠損する。右前腕骨は、右尺骨が残存するが遠位端を欠損する。左前腕骨は、橈骨はほぼ完存するが、尺骨は骨体中位より遠位端までの部分を欠損する。上腕三角筋粗面が発達する。

下肢骨は、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨及び左右腓骨が残存する。寛骨は右寛骨恥骨下枝及び左寛骨腸骨翼を欠損する他はほぼ遺存する。大腿骨は、右大腿骨大転子から骨頭にかけての部分及び左大腿骨骨頭、遠位端の一部が欠損する。脛骨は、右脛骨は骨端の一部が欠損する。左脛骨は近位端後面を一部欠損する他はほぼ完存する。腓骨は、右腓骨は骨体中位のみが残存し、左腓骨は腓骨頭を欠損する他はほぼ残存する。寛骨大坐骨切痕角は狭い。大腿骨粗線は発達するが、ヒラメ筋線の発達は弱い。これらの他に左右不明の肋骨片1が認められる。

【性別・年齢】性別は、眼窩上隆起及び大腿骨粗線の発達がみられ、大坐骨切痕角が狭いことから、男性と判定される。年齢は、頭蓋半縫合の癒合状況及び歯牙咬耗度から、成年と推定される。

【形態】頭蓋主要計測値、四肢骨計測値、および頭骨小変異は表1-7に示した。頭蓋は、最大長が176mm、頭蓋最大幅は131mmと両値ともに小さい値である。頭長幅示数は74.4で、頭が長く幅が狭い傾向を示す。顔面は、上頭高が65.4mm、中顔幅が98.1mmで、ウィルヒョウ上顔示数(V)は66.7と低く、低下顔傾向を示す。眼窩は、眼窩高が34.1mm、眼窩幅が43.8mmである。眼窩示数は、豊後古墳人より若干高く、77.9の中眼窩である。鼻幅は25.4mmで広鼻である。四肢骨は、上腕骨中央幅が75mmで、頑丈な傾向を示す。大腿骨は、中央幅90.5mmであり、西日本古墳人よりも太く北部九州弥生人に近い。脛骨は、最大長は346mm、榮養孔幅が96mmであり、西日本古墳人より最大長は短く、骨幹が太く、北部九州弥生人に近い。

4. 考察

4-1 計測的特徴

①頭蓋骨

各個体の計測的特徴については人骨所見で既に述べてきた。個々の個体のイメージを得るため、比較群の平均値との比較を行ったのであるが、本来このような比較は本遺跡の集団の形質的特徴をみるには必ずしも有効では

なく、平均値同士を比較するべきであることはいままでのままだ。そこで、個体数が必ずしも多くはなく、木道跡出土人骨の平均値が本来の長湯集団を代表させうるかには問題があるものの、以下に頭蓋主要計測値及び主要示数の平均値を検討してみる。

まず、男性は、頭幅高示数は100.9（8個体）で、比較群中最も大きな値である（表1）。これは、頭蓋最大幅が131.0mmと西南日本現代人よりも小さく、Ba-Br高が136.0mmと南豊前古墳人と同じ値でやや高いことによる。そのため、脳頭蓋の幅が狭く高い頭であることを示している。上顔示数は、ウィルヒョウ（V）が66.4（9個体）で豊後古墳人と南九州古墳人のほぼ中間であり、コルマン（K）が48.0（5個体）で比較群中の古墳人の中では南九州に次いで低く、南九州古墳人と陸ヶ台古墳人の中間ほどの値である。これは、頬骨幅が138.1mm（5個体）と南豊前古墳人と豊後古墳人の中間であるのに対し、上顔高が67.9mm（10個体）で、古墳人のなかで最も上顔高の低い南九州古墳人に次ぐ低い値であることによると考えられる。眼高示数は78.1（11個体）と中眼窩で、豊前地域古墳人より低く、豊後古墳人よりやや高い値である。鼻示数は53.6（10個体）で、南豊前と豊後の中間的な値である。以上から、脳頭蓋が狭く高いという特徴に加え、顔面は低顔で、眼窩が豊後古墳人に比べてやや高いという特徴がみられる。このことから、長湯古墳人は、やや低顔で低眼窩・広鼻であるとされてきた豊後古墳人と、やや面長で高眼窩の南豊前古墳人の中間的な顔立ちをしているものと考えられる。

女性は1体のみであるが、頭長幅示数が74.8で比較群中最も低い値であり、脳頭蓋の幅が狭いことを示している（表2）。上顔示数はウィルヒョウ（V）が60.8で南九州古墳人と同値である。コルマン上顔示数（K）は48.1で陸ヶ台古墳人と近く、南九州古墳人や西北九州弥生人よりやや高い値である。顔示数はウィルヒョウ（V）が102.1と比較群中最も低く、コルマン（K）が80.8で津雲縄文人に次ぐ低い値である。眼窩示数は79.8で南九州古墳人より若干高い値である。また、鼻示数は53.5と東九州・西中国古墳人に近い値である。これらから、脳頭蓋の幅が狭く、低顔で、眼窩が低く、鼻はやや幅広であるが、顔自体は小作りな顔立ちであったことが伺える。ただし1体のみであることから、長湯人女性の形質的特徴をどれほど反映しているかについては問題があるものと考えられるが、男性同様に狭顔で低顔という特徴は共通してみられる。

次に、これらの特徴を比較群とともに総合的にみるために、頭蓋計測値を用いて主成分分析を行った。男性は頭蓋計測値9項目（表9）、女性は資料条件に恵まれなかったことから8項目を用いた（表10）。まず、男性であるが、第1主成分は固有値2.964、寄与率32.933%、第2主成分は固有値1.996、累積寄与率55.108%である（表11）。第1主成分と第2主成分の固有ベクトルを表9に示す。第1主成分は、頬骨幅・鼻幅・頭蓋最大幅・眼窩幅などがプラスに働き、頭の高さ・眼窩高・上顔高・鼻高がマイナスに働いていることから、プラスである程、広顔

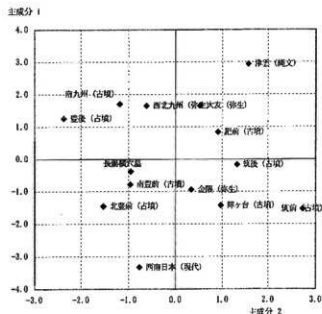


図3 主成分得点 (男性)

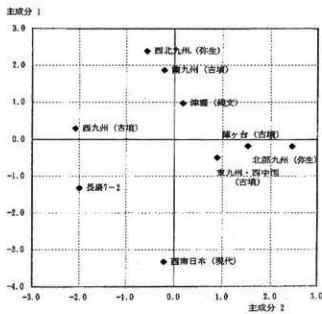


図4 主成分得点 (女性)

で頭が低く、顔が幅広く低く、眼窩も低いことを示している。第2主成分は、鼻幅がマイナスに働いている他は、プラスに働いていることから、頭及び顔のサイズがプラスに働いているものとみられる。

第1主成分をY軸に、第2主成分をX軸にとって、長湯古墳人と他の比較群の主成分得点をプロットしたのが図3である。長湯古墳人は、南豊前古墳人や北豊前古墳人とおなじ第3象限に分布し、豊後古墳人とは若干離れた分布である。これは、頭が高く幅が狭いという特徴と、眼窩がやや高いという特徴が反映していることによると考えられる。

次に女性であるが、第1主成分は固有値2.915、寄与率36.444%で、第2主成分は固有値2.236、累積寄与率64.396%である(表12)。第1主成分と第2主成分の固有ベクトルを表10に示す。第1主成分は、頭蓋最大幅・頬骨弓幅・鼻幅・頭蓋最大長・眼窩幅がプラスに働き、眼窩高・上顔高・鼻高がマイナスに働いていることから、プラスである程、広顔で頭が長く、顔が幅広く眼窩が低く、鼻が広くて低いことを示している。第2主成分は、眼窩幅がマイナスに働いているが弱く、その他はプラスに働いており、頭及び顔のサイズがプラスに働いているものとみられる。

第1主成分をY軸に、第2主成分をX軸にとって、長湯古墳人と他の比較群の主成分得点をプロットしたのが図4である。長湯古墳人は、西日本本現代人とともに第3象限にあり、Y軸において東九州古墳人や北九州弥生人と比較的近く、X軸において西九州古墳人と近い。これは長湯古墳人が、頭蓋計測値のほとんどの値で比較群中小きな値であることから、X軸においてマイナスになり、頭が狭く、顔も幅が比較群中最も狭く、顔が小作りであるにも関わらず、眼窩幅、眼窩高の数値がやや大きいことからY軸においてマイナスになったものと考えられる。

以上の結果から、長湯古墳人は、男女とも、全体として類似する比較群は認められなかった。男性では、上顔示数等で豊後や南九州の古墳人に類似した部分があるものの、眼窩においては豊後古墳人よりも若干高く豊前地域の古墳人にやや近い特徴を持つものといえる。このように顔面の異性ごとに異なる地域との類似性が認められることは、長湯横穴墓と同様豊後地域の陣ヶ丘古墳人についても既に指摘されている(田中・大森1999)。また、長湯横穴墓出土人骨の大きな特徴として、男女ともに頭蓋幅が他の比較群に比べて狭く、男性は頭が高いという特徴がみられた。このような特徴が、豊後地域のなかでどのように位置づけられるのか検討する上でも、今後の資料の増加が期待される。

②四肢骨

上肢骨は、男性では上腕骨・前腕骨の計測が可能であった(表3)。上腕骨は最大長の平均値が306mm(2体)で比較群中のいずれよりもかなり長い。また、骨体中央周平均値は69.8mm(10個体)、骨体横断面示数も75.1(7個体)と比較群中最も大きな値である。これらから、骨幹が太く頑丈で、腕が長いことを示している。前腕は、橈骨最小周平均値が43.9mmと津雲縄文人に次ぐ数値である。また、骨体断面示数も比較群中で最も高値である。尺骨骨体欠伏径の平均値は13.7mmで、同時代の平均より大きく、尺骨横径も16.6mmと大きなことから骨間線が発達している。以上から上腕、前腕ともに骨幹が比較的太く、頑丈な上肢であるものといえる。

女性では2体のみ上肢骨の計測が可能であった(表4)。最大長は計測不可であったが、中央最大径及び最小径をみると、西日本の古墳人に比べ大きく、骨幹が太い傾向を示す。前腕は計測可能箇所が少ないが、橈骨最小周や尺骨最小周を見る限り、西日本古墳時代人にならばやや骨幹が太い。

下肢骨は、男性15体で計測が可能であった(表5)。最大長の平均値は408.8mmと比較群中最も短い値である。ただし、長湯古墳人は、西日本古墳人に近い420.0-430.0mm前後に収まる個体と、最大長が400.0mm前後の個体に大きく分かれるようである。骨体中央周の平均値は85.7mmとはほぼ西日本古墳時代の平均値に近い値である。骨体中央断面示数の平均値は106.9で西日本古墳時代人より高い数値である。脛骨は、最大長平均値が327.1mmで比較群中最も小さい。栄養孔位周は平均値が98.9mmで、西日本古墳時代の平均値を下回る。中央断面指数平均値は88.9で、比較群中最も大きく扁平性がみられる。腓骨は、最大長平均値333.5mm、中央周平均値47.0mmで、最大長は比較群中最も小さいが、骨体は西日本古墳時代人の平均値を上回る。以上から、男性の下肢は、個体により変異

は認められるものの、概して骨体が短く、骨幹は同時代人と同様か若干細い傾向を示す。また、大腿骨は西日本古墳時代人に比べ柱状性がみられ、脛骨は筆者で扁平な傾向を示す。

女性では1体で下肢骨の計測が可能であった(表4)。大腿骨骨体中央周は73.0mmと比較群中最も小さく、骨体中央断面示数は最も小さい数値で柱状性が弱い。脛骨栄養孔位周は75.5mmで比較群中最も小さく、中央断面示数は86.6と最も大きな数値であり扁平性が強い。以上から、長湯女性人骨は、骨体が筆者で大腿骨・脛骨とも扁平であるといえる。ただし1体のみであることから、一般的特徴をどの程度反映しているかは問題がある。

以上のように、概していえば、男女ともに上肢は比較的肉幹が太く頑丈であるのに対し、下肢は男性では、大腿骨・脛骨ともに短く、大腿骨は比較的肉丈で脛骨が筆者な傾向がみられた。女性の下肢は資料数が少ないことから、一般的特徴については不明であるが、全体的に筆者で、扁平な傾向が見られる。

③推定身長

大腿骨最大長にPearsonの式を適応して推定身長を求めた。推定が可能であったのは全て男性で、2号横穴墓1号・2号人骨、3号横穴墓D号・J号下肢、6号横穴墓2号人骨及び7号横穴墓1号人骨である。それぞれの身長は、2号横穴墓1号人骨162.3cm、2号人骨157.8cm、3号横穴墓F号下肢151.1cm、J号下肢160.3cm、6号横穴墓1号人骨156.1cm、7号横穴墓1号人骨161.3cmであった。これら6体の推定身長の平均値は158.2cmであり、北部九州・山1の古墳人(男性)の推定身長162.8cmを下回り、北部九州・山口地域の同時代人に比べ低身長な傾向を示す。

4-2 被葬者間の親族関係

長湯横穴墓のうち、複数個体の人骨が出土している横穴墓を対象とし、人骨の遺伝的形質、とりわけ歯冠計測値・頭骨小変異を用いて、分析を行った。

長湯横穴墓群のうち、複数個体出土して分析が可能であった横穴墓は2・3・6・7号墓の4墓である。これらのうち、2・6号横穴墓は下りて埋葬順位はうかがえるが、他の2墓は片づけによって全く順位を知ることができなかった。したがって、3・7号横穴墓については、構成を復元することは困難である。

さて、2号横穴墓は男性2体の埋葬であり、初葬の1号人骨が熟年男性、追葬された2号人骨は成年後半～熟年であった。この2体の埋葬間隔を知るための考古学的情報は無いが、1号人骨の胸部のうち胸椎のみが大きく乱れている点が注意される。全体的に土砂の流入があったことから、これもその際の乱れである可能性は否定できないものの、胸椎のみが大きく乱れている点を重視すると、人為的である可能性もあるからである。したがって、2号横穴墓については

【2-①】1号人骨の埋葬後、10年以上の間隔において2号人骨が追葬され、したがって、2体は2世代であった。

【2-②】1号人骨の埋葬後、ほどなくして2号人骨が埋葬され、したがって、2体は熟年と成年後半～熟年という同世代であった

の二つの世代構成モデルが考えられる。

6号横穴墓については、副葬品の量から見ても1号人骨が主埋葬で、それ故初葬である可能性が高いと考えられるが、きわめて鉄棺な墓室に2体が埋葬されていることから、埋葬間隔が長い場合には初葬の遺体を片づけた可能性が高いと考えられる。ところが、1号人骨には大きな乱れはなく、初葬が2号人骨であったとしても、2号人骨も同様であることから、この2体は間隔を置かずして埋葬されたと考えられるのである。そうすると、10代後半～20代前半の1号人骨に対して、2号人骨は20～成年前半という同世代の構成であったと考えられる。

さて、表13はそれぞれ各横穴墓の歯冠計測値であり、この値に基づいていられたQモード相関係数を表14に示した。必ずしも歯牙の保存状態が良好ではなかったため、多くの歯種の組み合わせでも検証が困難な横穴墓もあるが、2号横穴墓の2体は高い値が得られており、血縁関係にあった可能性が高い。したがって、2号横穴墓は父子あるいは兄弟が埋葬されていたことになる。また、6号横穴墓では、一つの歯種の組み合わせのみで0.50以上の値が得られた。ただ、他の組み合わせでも0.2～0.5の値が多く、血縁者であった可能性は低くない。したがっ

て、6号横穴墓被葬者は兄弟であった可能性が高いといえよう。

3号横穴墓は、10体が埋葬されていたが、片づけられた個体ばかりで、埋葬順位は不明であった。表14のように、1号(熟年以上の男性)と4号(性別不明熟年)、1号と7号(成年男性)、2号(成年男性)と3号(成年男性)、2号と6号(熟年男性)、2号と7号、4号と7号の間に0.500以上の値が得られており、血縁関係にある可能性が高いペアが複数見られる。

頭骨小変異に関しても、2号墓・3号墓・6号墓において、複数の項目で一致が見られる。ただ、歯冠計測値による分析ができなかった7号横穴墓被葬者については、頭骨小変異においても特に一致する項目はなかった。しかし、そのこと自体は7号横穴墓の被葬者の間に血縁関係がなかったことを示すものではない。

古墳時代の親族関係および埋葬原理については、3-5世紀代にはキョウダイ原理、5世紀後半以降に父系直系家族が埋葬され、6世紀前半から家長の妻が埋葬されるようになることと推測してきた(田中1995)。しかし、その変化には地域性があり、5世紀後半-末の宗像市浦谷C-4号墳では男性2体の兄弟が埋葬されていた(田中1995)。また、6世紀中葉-後半の島根県玉湯町岩尾遺跡ではキョウダイ関係で葬られており(田中2001)、実際は多様であったことがうかがえる。その意味では、長湯6号横穴墓はキョウダイであり、2号横穴墓もその可能性を有することは、この地域の6世紀代がまだ古い親族関係と埋葬原理を有していたことを示しており、この横穴墓群が山間部に位置することを加味して関心が持たれるところである。

4-3 長湯横穴墓群出土人骨にみられた葬送儀礼

長湯横穴墓群においても、当然のことながら、埋葬においては前庭部・墓室において儀礼行為が行われている。その中でも遺体を用いた儀礼行為と考えられる所見が得られた。まず、6号横穴墓1号人骨であるが、左の距骨が抜き取られ、腓骨の骨体中央部付近に置かれていた。距骨は本来脛骨・踵骨と関節しているものであり、このような移動はきわめて不自然であり、人為を考慮するべきである。そして、踵骨と指骨が若干乱れていることを考慮すると、距骨を抜き去ったのは遺体の軟部組織が腐朽した後であったと考えられるのである。また、6号横穴墓2号人骨も、左右とも大脳骨・脛骨がわずかに外に傾くだけであるにもかかわらず、左右の膝蓋骨が外側に転落しかつ反転していて、やはり埋葬後相当の期間を経て再開口し、膝蓋骨を外して再配置した可能性を示すものである。さらに、2号横穴墓においても、1号人骨の膝関節がきちんと関節し上を向くにもかかわらず、左膝蓋骨は大脳骨内側顆の脇という不自然な位置にあるし、右の膝関節も同様にしっかりしているもの、膝蓋骨は見あたらず、これもまた、儀礼行為による可能性が高いと考えられる。

このような行為は、5世紀後半から認められ、埋葬後10年ほど経過してから再開口して遺体の足を乱すが、その際にヒョウタンなど飲食物を供献した例があることから、黄泉(イタ)と関連した再生阻止儀礼であると考えている(田中・村上1994)。長湯横穴墓群における事例も、飲食物供献の物的証拠は欠くものの、同様な事例であると考えられる。

そして、さらに注目されるのが他の横穴墓である。というのも、3・4・7号横穴墓はいずれも閉塞状態で、前庭部土壇にも乱れはなかったにもかかわらず、本来の埋葬状態を保つ人骨は一体もなかったからである。そればかりか、全体的に関節が外れており、散乱した印象すら受ける。追葬時に片づけを行ったとしても、当然のことながら最終埋葬の被葬者は全身が関節状態で保全されるはずである。これらの横穴墓には十分なスペースがあり、2・6号横穴墓では通常の埋葬を行っており、人骨が個体ごとにまとまっておらず散乱に近い状態であることなどを考慮すると、他の場所に埋葬して骨化した後に改葬した可能性は考えがたい。したがって、これらの横穴墓においては、最終埋葬を終えて10年ほど経過した後には再開口し、最終的にはすべての被葬者の関節のほとんどを外してしまうという行為を行っていると考えられるのである。個々の被葬者の関節外しが、順次行われたのか、それとも最終埋葬後に一括して行われたのかは明らかではないが、意図的に関節を外す行為は、2・6号横穴墓のような足を乱す行為に通じると考えられる。すなわち、死後の再生阻止儀礼が、当初は脚部に行われていたものが、次第にエスカレートしていき、全身に及んだと考えられるのである(田中・村上1994)。

このような人骨の状態は、先験的に「擾乱」として処理されることが多かったと思われるが、上記のように実際は人為的な儀礼行為であった例を含んでいる可能性がある。そして、この儀礼は、大分県や九州に限定されることなく、こんにちでは関東まで事例が伴われており、古墳時代後期に広く行われた儀礼行為であると考えられる。大分県の山間部に位置する本横穴墓群においても、この儀礼行為が確認されたことは、古墳時代後期における葬送儀礼の波及を考察する上で重要であり、今後のさらなる事例増加が期待される。

4-4 7号横穴墓1号人骨に見られる創傷について

1) 創傷の観察結果

7号横穴墓1号人骨の所見においても若干述べたが、1号人骨には、左側面の顔面部から後頭部までを、左上から斜に横断する、長い斬創が認められる。以下、当人骨にみられる総称についての観察結果と、受傷契機等の問題についての検討を行う。

傷の長さは、顔面部の左上顎骨体の梨状口から左眼窩下縁、左頬骨の眼窩外側縁をへて、後頭部の左アステリオン（頭頂骨・額頭骨・後頭骨の接する点）に達し、その全長は14cmに及ぶ。しかも、傷は顔面部では少なくとも鼻腔にまで達し、最も深い部分では傷の深さは5cmに及んでいる。また、切断面より下部、すなわち頬骨弓や外耳を含めた側頭骨の大半は残存していない。但し、乳様突起内側の乳突切痕付近に創底、即ち傷の底が見られることから、この傷は、組織を完全に切断していない亦斜創であり、脳髄蓋の切断面下部は、本来乳様突起付近でろうじて脳頭蓋とつながっていたものと考えられる。

傷口の状況については、傷の縁は直線的で鋭く、乳様突起の外側近くで、下方へ緩やかにカーブし、乳突切痕、即ち乳様突起の内側の根元付近で止まっている。傷の縁には生存時に受けた傷に特有な、縁辺部の微細な反り返りが認められる。さらに、傷の断面も傷の縁と同じく、乳様突起の外側付近で変化が見られる。梨状口から乳様突起付近までは、傷の断面は平坦であるが、乳様突起の外側近くには、傷の縁にたいしてナメの段差が見られ、創底即ち傷の底付近では、傷の縁に平行な段差が見られる。以上の傷の様相から、頭蓋骨の傷は、鋭い利器で、左側面から骨表面に対し左や斜め上から叩き切るように断りつけられる事により付けられた物であり、乳様突起の外縁の近くで、刃先をしなせながら、乳様突起の内側付近で刃が止まったことを示すものと考えられる。

以上が頭蓋骨の受傷状況であるが、鎖骨をはじめとする上肢の状況は、肩峰端、つまり鎖骨の片側の端2～3mm程度が、左斜め上から切断された傷が認められる。傷の縁は頭の傷と同様に鋭く、傷の断面も平坦である。これらの傷の様相から、左鎖骨は、肩側の端を左斜め上から右斜め下へ、鋭い利器を用いて切断されたと考えられる。なお、鎖骨の肩峰端に近接している、左上腕骨の肩側には傷は見られないことから、鎖骨を切り落とした傷は、上腕骨には届いていないと考えられる。

右尺骨、左上腕骨には、遠位側に長軸方向に沿った傷が見られる。まず、右尺骨には手首に近いほうの、小指側に2カ所の傷が見られる。1カ所目は、手首側から9cmの所に見られる、幅5mm、長さ2mmの傷である。傷の縁は直線的で鋭く、傷の断面も平坦である。傷の角度から、尺骨内側の近位側、ヒジの方から受けた傷と考えられる。これらの傷の様相から、この傷は、鋭い利器を用いてヒジの方から手首の方に断りつけられる事により生じたものと考えられる。さらに、その延長線上に4cm離れた位置から、幅5mm、長さ3cmの長方形の傷が認められる。傷の縁は若干の屈曲が見られ、傷の断面には、骨の長軸方向に対して、直角に走る若干の凹凸が見られる。この凹凸は、同尺骨骨体部に見られる鬚歯頰の噛み傷とは明らかに異なる。鬚歯頰は、前歯2本が発達しており、その噛み痕は2本の線が一セットになっており、W字状の断面になる（田中2003）。これに対して、傷の断面に見られる凹凸は、1つ1つが独立しており、鬚歯頰の噛み傷とは明らかに異なる。したがって、この段差は、刃が骨に引っかかった際にできた凹凸であるものと考えられる。傷の方向は、近位側に刃のついた直線的な線が形成されており、ヒジ側から手首側に抜けた傷であると考えられる。これらの傷の様相から、この傷は、同じ右尺骨の先の傷同様、鋭い利器を用いて近位から遠位へ断りつけられて生じたものと考えられることができる。以上のよ

うに、尺骨に見られる傷は、2カ所ともに内側縁を近位側から遠位側に斬りつけられた傷であり、一連の傷であると考えられる。

次に左上腕の状況について述べる。遠位外側に長さ3cm、幅5mmの傷が見られる。背面から観察すると、左右の上腕骨を比べると、傷を受けた部位が平坦になっていることがわかる。傷の面は一部破損しているが、遺存している傷の縁は直線的で鋭く、傷の断面も平坦である。傷の縁が一部破損しているため、斬りつけられた方向は不明であるが、傷の様相から、この傷も、頭蓋骨・左鎖骨・右尺骨の傷と同様に、鋭い利器を用いて斬りつけられて生じたと考えられる。

ii) 受傷の様相

1号人骨に見られる創傷は以上の5カ所である。次に、これらの創傷の様相をまとめるとともに、どのような利器により、どのように傷を受けたかについて検討を行う。

これらの傷の縁には、一部屈曲が認められるものの、その大半が直線的で鋭いものである点共通する。また、傷の断面は一部に、利器が骨に引っかかった際にできたと考えられる段差が見られるものの、大半が平坦なものである。これらの傷の特徴から、骨折のように陥没をがす、鈍器による挫創の可能性は否定され、先述のように、刃を持った鋭利な利器による傷の可能性が考えられる。では、「鋭い利器」とは具体的にはどのようなものであろうか。上肢骨の傷は、鋭利な利器を長軸方向に引いたり、押し付けて切られた「切創」の様相を呈しており、頭部の傷に関しては、斧・なた・日本刀のような鋭く、重量のある利器で叩き切る作用により生じた「割創」に類似した受傷痕である。これらの重量のある利器でも、より刃が厚く重量のある斧やなたのような利器による割創は、図5に見られるように傷の端に、裂創即ちひび割れが生じる傾向にある。しかし、この人骨に関しては、尺骨、頭蓋骨に見られるように、傷の端にはそのような裂創は認められない。また、日本刀のような薄く鋭い利器には、上肢に見られるような「切創」を付けることも可能である。したがって、これらの割創・切創は日本刀のように比較的薄く鋭い、重量のある利器によって付けられた「刀創」であると考えられる。また、このような刀創を形成することが可能な、利器としては、7号横穴墓の属する6世紀前半という時期から推定すると、剣や大刀の可能性が考えられる。

さらに、これらの刀創は、全て傷が治癒する過程でおこる骨増殖が認められないことから、死の直前に受傷したと考えられる。では、これらの傷の程度・方向などから、どのように傷を受け、死亡に至ったかを推定する。これらの傷のうち、右尺骨・左上腕骨、即ち左腕部・右前腕部の傷は、死亡に直接結びつくような刀創ではない。一方で、法医学においては、体をかばった際に出来る防御創は、上肢の切創であることが多いとされている（高津1996）。したがって、これらの上肢に見られる刀創は、体をかばった際に出来た防御創の可能性もある。また、左鎖骨即ち左肩口の上から斬りつけられた傷も、上腕部には達しておらず、致命傷になったとは考えにくい。一方、顔面から後頭部の広範にわたる刀創は、乳棘突起付近で一部脳に達しており、これが致命傷になったものと考えられる。また、刀創の跡を見ると、乳棘突起付近に刃部がしなったような痕跡が見られることから、後頭部創が刃の薄い刃先であり、正面から斬りつけられたものと考えられる。斬りつけられた方向から、どのような姿勢を想定しても、図6のように、体の4つの部位にこれらの刀創を1刀で同時に付ける事は困難と考えられる。肩から左腕の傷に関しては、鎖骨の傷はすぐ下にある上腕骨に届いておらず、左上腕骨近位端に刀創を残さずに、左鎖骨肩峰端を切断し、左上腕骨遠位外側に一刀のもとに斬りつけるのは困難である。したがって、左肩から左腕にかけての傷も、一刀のもとに形成された刀創ではないと考えられる。

以上の点から、1号人骨は死亡に至るまでに、少なくとも3度にわたり斬りつけられ、左肩口・左腕部、右前腕部に傷を受けている可能性が考えられる。ただし、これらはあくまでも遺存している人骨に見られる刀創であることから、人骨に残らない傷を受けていた可能性も考えられる。したがって、1号人骨は死亡に至るまでに数度、少なくとも3度にわたり斬りつけられた後に、最終的に相手と向かい合った状態で、正面から、側頭部に斬りつけられ、死亡したと考えられる。

このような数度にわたる致命傷とはならない刀創と、確実に致命傷となりうる頭部の刀創を受けた際の、受傷

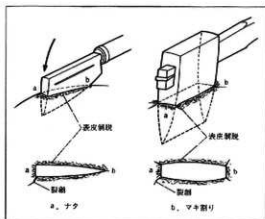


図5 箭頭

(高津光洋1996『検死ハンドブック』より引用)



図6 7号横穴墓1号人骨上肢骨受傷部位

個の防御態勢はどのようなものであろうか。近年、今回報告を行ったような受傷人骨の評価に関しては、戦争と結びつけられる傾向にある。以下当該期に見られる武器に関する事例を概観することにより、これらの刀創が形成された受傷契機について若干言及したい。

本横穴墓には鹿角製装具を持つ刀剣・ゴホウラ製貝輪が副葬されており、鹿角製刀装具を有する刀・剣は1号人骨に伴う可能性が高いと考えられる。また本横穴墓群中の3号横穴墓で辻金具・巻・具等の馬具が副葬されていた。したがって、これらの副葬品から見ると、本横穴墓では金属製の防御用武器は確認されなかったが、1号人骨が、木甲・革製の甲冑など何らかの有機質製の防御用武器を所有していた可能性は十分考えられる。但し、木甲の当該期における出土例は確認されておらず、橋本達也氏の研究によれば、定型化した中期甲冑の成立とともに木甲は姿を消すと考えられている(橋本1996・2003)。したがって、木甲の可能性についてはここでは保留しておく。

革甲については、木甲以上に残存しにくい材質であり、そのため出土例は木甲以上に少なく、当該期の資料も少ない状況である。しかし、文献上の記述としては、隋書倭国伝に「皮を漆りて甲と為し」という記述が見られ、また、東大寺献物帳・正倉院文書や続日本紀などにも皮革による甲の修復や革甲の生産の記録が残っている。これらのことから、古墳時代後期に属する当該人骨が何らかの革製の甲冑を有していた可能性はあるものと考えられる。革甲の民族例としては、アイヌの革製の挂甲があげられる(末水・伊藤1979, 末水1981)。アイヌの革製挂甲は、その形態が古墳時代の金属製の挂甲に類似しており、興味深い事例である。このように1号人骨が何らかの有機質製の甲や冑を所有していた場合には、今回刀創が確認された部位である頭部、肩部、また前腕部はそれぞれ冑・肘甲・小手で保護されていた可能性が考えられます。特に頭部については何らかのヘルメット状のものが存在し、側頭部も鎧や頬当て状のもので保護されていた可能性が高いと考えられる。しかし、1号人骨頭部の刀創は非常に鋭利で深い傷であることから、鉄製ないし革製の冑や、頬当てなどで保護された状態で受けた傷ではなく、左鎖骨も肩峰部が完全に切断されていることから、肩部にも防御用武器を装着していなかったものと考えられる。

したがって、1号人骨は防御用武器を身につけていた可能性が低いと考えられる点、また熟年後半から老年に達するという、当時ではかなり高齢であったと考えられる点から、その受傷契機を戦争と直結させるのは困難と考えられる。当人骨についての受傷の契機を断言することは困難だが、いずれにせよこれほど顕著な古墳時代の受傷例は希有であり、今後の古墳時代における当該分野の重要な資料となると考えられる。

5 おわりに

長湯横穴墓群からは、男性14体、女性4体、小児2体の計20体の人骨が出土した。

人骨の形質的特徴としては、顔の高さは豊後古墳人に近く低いものの、眼高は豊後古墳人に比べてやや高く、

豊前地域に若干近い特徴がみられた。また伏顎で頭が高いという特徴がみられた。顔面の特徴において、このように豊後古墳人とは異なる特徴が部分的に認められる点については、既に玖珠地域の隣々古墳人について指摘されている(田中・大森1999)。今後、このような豊後地域における地域性の問題を解明する上で、資料増加が期待される。

また、四肢骨をみると、男女ともに上肢は比較的骨幹が太く頑丈である。下肢は男性では、大腿骨・脛骨ともにやや短く、大腿骨が比較的頑丈で脛骨は華奢な傾向を示した。女性の下肢は、資料数が少ないことから、長湯古墳人の一般の特徴については不明であるが、全体的に華奢で、扁平な傾向が見られた。

親族関係については、2・3・6・7号墓の4基で分析が可能であったが、簡易計測値による分析は7号横穴墓を除く3基において可能であった。その結果は、3号横穴墓ではいくつものペアで血縁関係が認められたが、埋葬順位が不明なため、血縁者を基礎とした被葬者であったということしかわからなかった。しかし、埋葬順位が想定できた2・6号横穴墓においては、2号横穴墓は父子あるいは兄弟、6号横穴墓被葬者は兄弟であった可能性が高いという結果が得られた。この構成は、古墳時代前半期のものであるが、親族関係の変化には地域差があることが知られてきており、長湯においても古い親族関係が残存していたことを示している。

また、長湯横穴墓群においては、埋葬後に相当の期間を経て再開口し、遺体の脚部あるいは全身の関節を外すという再生阻止儀礼が確認され、古墳時代における葬送儀礼研究に重要な知見を加えることができた。

7号横穴墓出土1号人骨にみられる受傷事例に関しては、熟年後半から老年と推定される男性に計5カ所の傷が確認された。受傷箇所の詳細な観察から、これらの傷は、日本刀のような薄く鋭利な利器により形成された刃創であると考えられた。また、致命傷を頭部に受けるまでに、少なくとも3度にわたり上肢に斬りつけられていた。受傷部位及び、受傷程度から、武器を装着していない状況での受傷の可能性が考えられた。このような受傷事例及びその刃機の問題については、今後更に事例を増やしながらか検討していく必要があり、今後の資料の増加が望まれる。

謝辞 長湯横穴墓出土人骨を調査・研究するにあたって、さまざまなご教示、ご助力をいただいた大分県教育委員会の甲斐寿義氏ならびに関係諸氏に感謝申し上げます。また、現地における人骨調査にあたっては九州大学総合研究博物館岩永省三教授、大学院人文科学研究院岡田裕之助手のご助力を賜った。さらに、大学院比較社会文化学府事務局構造講壇の諸氏には人骨の整理等でも協力頂いた。記して謝意を表したい。

参考文献

- Doi, N. and Tanaka, Y., 1987: A geographical cline in metrical characteristics of Kofun skulls from western Japan. *Anthrop. Soc. Nippon*, 95-3.
- Dodo, Y. and Ishida, H., 1990: Population history of Japan as viewed from cranial nonmetric variation. *人類学雑誌*, 98-3.
- 原田忠昭, 1954: 現代西南日本人頭骨の人類学的研究. *人類学研究*, 1
- 橋本達也, 1996: 古墳時代前期甲冑の技術と系譜. 雪野山古墳の研究 考察編. 雪野山古墳発掘調査団
- 橋本達也, 2003: 有機質製甲冑・盾・鞆・胡籬・弓. 考古学資料人眼7, 小学館
- 池田次郎, 1988: 古備地方海岸部の縄文時代人骨一時代差と地域性の成立一. 考古学と関連科学. 鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会
- 池田次郎, 1993: 古墳人. 古墳時代の研究1. 藤山園
- 石山 夫, 1978: 法医学ノート. サイエンス社
- 伊藤隆, 1983: 2上肢. 解剖学講義. 南山堂
- 永永雅雄, 1981: 増補 日本上代の甲冑. 木耳社
- 永永雅雄・伊藤信夫, 1979: 株甲の系譜. 藤山園

- 城一郎, 1938a: 古墳時代人骨の人類学的研究 第二部 上肢骨, 人類学輯報, 1
- 城一郎, 1938b: 古墳時代人骨の人類学的研究 第三部 下肢骨, 人類学輯報, 1
- 金岡丈夫・永井昌文・佐野一, 1960: 山口県豊浦郡豊北町土肥ヶ浜遺跡出土弥生時代人頭骨について, 人類学研究, 1
- 松下孝幸, 1981: 大友遺跡出土の弥生時代人骨, 大友遺跡, 佐賀県教育委員会
- 内藤芳篤, 1971: 西九州出土の弥生時代人骨, 人類学雑誌, 79:3
- 内藤芳篤, 1985: 市九州およびその隣国一国家成立前後の日本人一, 季刊人類学, 16:3
- 中橋孝博・永井昌文, 1989: 弥生人の形質, 弥生文化の研究1, 雄山閣
- 中橋孝博・土肥直美・永井昌文, 1985: 金隈遺跡出土の弥生時代人骨, 史跡 金隈遺跡, 福岡市教育委員会
- 高津光洋, 1996: 3-D.創傷の検査, 検死ハンドブック, 青山堂
- 田中良之, 1993: 古墳被葬者とその変化, 九州文化史研究所紀要, 38
- 田中良之, 1995: 古墳時代親族構造の研究, 柏書房, 東京,
- 田中良之, 2001: 岩屋古墳群出土人骨の親族関係, 岩屋遺跡・平床Ⅱ遺跡, 中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書6, 日本道路公団中国支社・鳥根県教育委員会, 松江,
- 田中良之, 2003: IV-2. 人骨からみた聖域河原の再検討, 聖域河原遺跡検証報告, 日本考古学協会,
- 田中良之・村上久和, 1994: 墓室内飲食物供献と死の認定, 九州文化史研究所紀要, 39
- 田中良之・大森門, 1999: 陣ヶ台遺跡出土の人骨について, 陣ヶ台遺跡, 玖珠町文化財調査報告書第9集, 玖珠町教育委員会
- 橋原博, 1957: 日本歯牙咬耗に関する研究, 熊本医学会雑誌, 31 (補冊4)
- Yamaguchi, B., 1985: The incidence of minor non-metric cranial variants in the protohistoric human remains from eastern Japan, Bull. Nat. Sci. Mus., 11.
- 和川清・石原道博, 1951: 訳注 隨書卷八一東夷伝倭国, 魏志倭人伝, 他三篇, 岩波書店

表1 頭蓋骨計測値(男性)

No	項目	長径2号線穴				長径3号線穴				長径6号線穴		長径7号線穴	長径8号線穴	矢 幅		胸+背の幅(活用)		
		1号人骨	2号人骨	3号人骨	4号人骨	5号人骨	6号人骨	7号人骨	8号人骨	1号人骨	2号人骨	1号人骨	2号人骨	N	M	N	M	
1	頭蓋最大長	185.5	188.0	178.0	179.7	—	—	176.0	186.0	196.5	181.0	169.5	176.0	9	183.0	1	184	
8	側蓋最大長	131.5	137.5	132.0	133.9	—	—	132.0	136.5	—	147.2	141.5	131.0	9	134.9	1	145	
17	Ba-Ba高	137.0	136.9	137.5	136.5	—	—	131.0	132.0	137.5	141.0	135.5	—	5	136.2	3	136.7	
8/1	眼長短率比	70.9	76.1	70.3	72.9	—	—	74.5	76.5	—	77.2	74.9	74.4	9	74.9	—	—	
17/1	眼長高率比	74.9	74.5	79.0	76.0	—	—	73.6	73.4	77.9	76.4	71.7	—	9	75.0	1	71.2	
17/5	眼短高率比	104.2	98.9	104.5	104.3	—	—	99.2	101.5	—	96.9	95.6	—	8	100.9	1	107.1	
45	眉骨幅	137.0	—	—	136.5	—	—	135.9	—	—	138.0	—	—	5	138.1	2	140	
46	中顔幅	96.5	101.1	—	97.7	93.0	101.5	97.4	97.1	103.1	117.4	107.3	106.1	11	100.1	3	99.7	
47	側蓋	115.4	—	—	118.6	115.0	123.0	—	—	120.0	120.5	—	—	6	113.5	3	117	
48	上唇高	59.5	58.2	—	59.3	70.1	72.3	65.4	—	71.4	68.2	69.0	63.4	10	67.9	3	68.7	
47/45	眼高比(K)	82.5	—	—	84.4	—	—	—	—	—	98.9	—	—	3	84.6	2	86.9	
47/46	眼高比(V)	117.5	—	—	121.4	121.7	121.5	—	—	117.0	108.2	—	—	6	118.3	3	117.4	
48/45	上唇高比(K)	64.7	—	—	47.9	—	—	—	—	—	149.4	145.7	—	5	48.0	2	49.4	
48/46	上唇高比(V)	163.7	57.6	—	66.9	75.4	57.6	67.1	—	68.3	61.5	—	166.7	9	64.4	2	68.9	
41	眼距離(左)	42.0	43.1	—	43.1	43.2	46.8	44.4	45.1	44.8	43.5	45.0	44.2	43.8	11	41.2	3	42
57	眼距離(右)	35.1	35.9	—	36.7	36.8	33.9	31.6	33.0	33.6	33.6	33.5	34.1	11	34.5	3	34.5	
42/51	眼高比(左)	76.4	73.5	—	87.5	84.6	74.0	73.9	79.6	79.5	74.3	53.2	57.9	11	75.1	3	81.8	
54	鼻高	54.3	57.1	—	56.4	58.9	57.0	56.2	56.6	49.7	45.6	35.4	24.4	11	50.3	3	51	
55	鼻長	48.7	53.1	—	50.9	48.1	48.0	44.1	—	48.3	49.3	51.9	48.2	10	49.2	3	51	
54/55	鼻高比	50.7	51.0	—	55.8	60.1	54.0	59.4	—	57.1	59.4	48.9	52.7	10	53.6	3	47.1	
71	兩眼間距離	69.0	73.0	—	60.8	61.0	63.0	—	—	—	—	71.0	53.0	7	61.3	—	—	

No	項目	上唇高比(左)		上唇高比(右)		鼻高比(左)		鼻高比(右)		鼻高比(平均)		鼻高比(左)		鼻高比(右)	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	16	180.2	9	182.0	13	190.4	10	181.8	16	186.2	14	184.5	4	181.3
8	側蓋最大長	21	141.4	9	149.3	10	140.4	12	142.8	20	147.0	14	142.5	5	139.8
17	Ba-Ba高	12	135.2	6	136.0	12	132.8	15	136.2	13	136.8	11	136.4	6	132.9
8/1	眼長短率比	18	78.0	9	77.2	13	78.5	5	78.0	14	76.9	13	77.4	5	75.7
17/1	眼長高率比	17	74.5	6	74.8	21	73.4	9	75.0	19	73.6	10	73.9	4	72.5
17/5	眼短高率比	12	96.9	8	93.4	12	96.0	8	98.1	17	95.3	11	95.7	3	94.6
45	眉骨幅	11	136.9	5	137.4	12	136.2	8	139.5	17	139.4	6	140.3	7	139.4
46	中顔幅	16	104.6	5	104.7	16	101.8	15	105.2	21	105.9	9	104.1	9	104.4
47	側蓋	7	124.7	3	122.3	11	118.3	14	114.9	12	121.3	5	120.0	3	118.8
48	上唇高	16	74.9	6	71.7	17	59.4	23	64.9	19	73.9	9	72.1	7	71.4
47/45	眼高比(K)	5	90.9	2	89.9	7	83.5	6	81.5	11	85.5	4	84.4	4	84.1
47/46	眼高比(V)	7	115.8	3	118.5	9	114.0	10	113.0	13	113.7	2	116.3	5	113.6
48/45	上唇高比(K)	10	34.0	5	51.8	10	49.7	7	45.9	16	52.1	6	39.7	6	52.0
48/46	上唇高比(V)	16	65.3	6	68.3	16	68.2	13	62.8	19	65.9	9	65.4	7	69.3
51	眼距離(左)	17	47.6	5	42.4	12	42.8	31	43.1	16	43.9	8	43.6	6	45.3
52	眼距離(右)	17	31.2	6	31.8	13	33.9	26	33.0	17	34.9	8	32.5	6	33.8
52/51	眼高率比(左)	17	66.5	5	69.1	13	77.1	31	77.0	16	79.9	8	76.9	6	74.7
54	鼻高	16	25.9	6	27.0	16	26.6	26	27.1	19	28.5	11	26.7	8	26.8
55	鼻長	16	49.3	6	51.0	18	49.7	25	50.2	19	52.5	10	52.1	9	51.0
54/55	鼻高比	15	51.5	6	49.9	16	36.2	24	34.9	19	36.8	10	51.4	8	33.6
71	両眼間距離	—	—	—	—	—	—	10	71.4	—	—	—	—	—	—

No	項目	二子ヤ(%) (男女)		金剛(%) (男女)		笠野東部(%) (男女)		大友(%) (男女)		西七九州(%) (男女)		関東(%) (男女)		近日本国(%) (男女)	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	垂直最大径	24	182.4	21	182.3	20	183.0	24	183.7	21	182.6	37	185.3	169	181.4
8	垂直最大幅	24	142.0	23	142.6	27	143.5	24	142.3	20	145.0	44	146.0	168	139.3
17	Da/Dc高	43	134.7	21	136.0	14	137.3	23	135.0	13	131.0	31	133.3	168	130.3
8/1	傾斜高示数	43	78.1	23	77.8	21	78.3	21	77.9	20	79.7	37	78.8	168	76.6
17/1	傾斜高示数	42	78.7	21	78.0	14	73.1	16	74.3	13	76.2	32	71.7	168	76.9
17/3	傾斜高示数	43	94.3	21	95.6	13	93.4	18	94.4	14	93.1	33	91.1	168	100.1
45	傾斜角	37	139.4	24	140.4	14	138.4	5	140.7	15	138.1	21	143.9	168	134.3
36	中頸幅	37	103.4	24	103.6	24	103.2	21	103.8	17	106.0	28	102.6	167	99.9
47	傾斜	36	173.4	20	173.4	3	186.0	18	178.7	14	177.1	36	175.5	95	122.1
48	上頸幅	38	72.4	19	74.3	23	73.9	16	68.0	17	68.1	28	65.8	92	71.8
47/16	傾斜角(%)	34	38.3	19	37.4	4	38.0	7	33.9	12	34.6	18	39.9	54	35.4
47/46	傾斜角(V)	34	119.3	19	117.3	3	118.6	17	116.6	14	111.3	26	112.6	53	122.3
48/45	上頸示数(%)	31	31.9	23	33.1	13	33.3	7	47.6	12	49.3	19	45.9	39	53.3
48/46	上頸示数(V)	31	70.0	23	71.3	22	70.3	15	63.3	17	66.3	21	64.8	51	71.3
51/51	傾斜高(%)	38	42.7	21	42.3	20	43.9	23	44.0	13	43.1	30	43.5	168	33.0
52	傾斜高(%)	43	51.2	21	54.0	20	54.3	24	53.3	13	53.8	25	52.8	168	31.4
53/21	傾斜示数(%)	38	69.1	21	69.0	20	70.0	22	78.3	13	76.2	27	77.4	168	80.3
54	傾斜	28	27.1	26	26.9	20	27.0	25	27.4	16	27.8	33	28.9	168	25.9
55	傾斜	30	23.1	25	21.8	21	22.7	33	20.7	16	21.0	35	19.8	168	22.2
54/33	傾斜角	27	31.0	25	32.0	19	31.3	22	34.5	16	34.4	27	32.7	168	39.8
74	旋轉傾角	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

*1) 日本1999.2.3(4)67(8)111, Doi and Tanaka 1987, 3) 内藤 1965, 9) 全開他 1960, 10) 中橋他 1985, 12) 安下 1981, 13) 内藤 1971, 14) 池田 1988, 15) 原正

表2 女性頸椎骨計測値

No	項目	長瀬? 笠野 大? 大友		傾斜角 (%)		東九州(利根?) (%)		西九州 (%)		門九州 (%)	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	垂直最大径	176.0	177.0	49	175.8	5	171.0	6	176.7		
8	垂直最大幅	133.0	135.6	45	136.3	6	136.3	3	139.0		
17	Da/Dc高		126.0	10	129.4	2	132.0	7	131.0		
8/1	傾斜示数	74.8	72.1	37	78.0	5	79.4	1	78.7		
17/1	傾斜高示数	-	89.5	36	74.0	2	76.4	4	73.9		
17/3	傾斜高示数	-	88.2	29	94.7	2	97.0	2	93.8		
45	傾斜角	127.6	121.7	33	130.5	3	125.4	2	131.2		
46	中頸幅	101.0	93.8	42	99.5	5	94.4	2	99.3		
47	傾斜	103.1	109.7	20	109.9	4	106.0	9	109.1		
48	上頸幅	61.4	65.3	17	66.7	3	61.0	12	61.0		
47/46	傾斜角(%)	86.6	82.7	17	84.3	4	87.4	2	83.0		
47/46	傾斜角(V)	132.1	115.7	16	109.3	1	113.7	6	108.6		
48/46	上頸示数(%)	48.1	48.3	29	51.3	2	47.6	2	51.3		
48/45	上頸示数(V)	69.9	69.7	27	67.1	3	63.7	7	60.8		
51	傾斜角(%)	47.5	39.8	40	41.2	2	31.9	14	40.9		
37	傾斜高(%)	33.2	33.3	44	33.6	4	32.1	14	37.0		
52/51	傾斜角(%)	79.6	83.7	43	81.0	3	80.0	14	78.7		
24	傾斜	34.4	32.3	41	28.1	5	26.3	12	26.4		
33	傾斜	45.4	50.0	41	48.2	4	44.0	14	45.7		
54/33	傾斜角	53.5	56.9	41	54.1	4	49.7	12	55.0		
74	旋轉傾角	62.0		20	67.1	3	51.0	9	69.6		

No	項目	北尾九州 _(a) (學生)		北尾九州 _(c) (學生)		沖 志 _(c) (漁夫)		西有F _(a) (農工)	
		N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭最大径	86	177.0	15	176.1	39	175.9	42	172.8
8	頭少量大径	81	138.4	12	139.3	41	141.2	42	133.8
17	Be-Be高	66	130.7	7	127.3	28	127.1	42	131.5
8/1	頭長顯示数	72	78.1	15	78.2	37	80.2	42	77.2
17/1	頭長顯示数	92	74.1	7	71.4	28	72.2	42	76.2
17/8	頭短顯示数	56	94.9	7	92.0	27	89.5	42	95.4
45	骨节号解	61	131.3	6	130.2	15	132.0	42	124.3
46	中鎖端	67	99.8	11	95.9	21	99.6	42	93.6
47	肘高	43	116.2	9	104.9	21	105.2	10	111
48	上鎖端	66	70.1	12	69.9	23	62.6	48	68.6
47/45	鎖示数(K)	34	88.7	6	87.7	11	80.1	10	90.2
47/46	鎖示数(V)	39	116.7	9	109.5	15	109.9	10	118.3
48/45	上鎖示数(K)	49	53.7	6	47.0	11	47.6	40	55.1
48/46	上鎖示数(V)	57	70.2	11	63.5	15	63.8	40	73.2
51	肩胛轴(L)	66	41.6	10	41.1	18	41.9	42	40.7
52	肩高(L)	85	34.1	10	31.7	14	33.8	43	34
52/51	肩高示数(L)	62	83.0	10	75.9	14	81.5	42	83.7
54	肩幅	72	26.6	12	26.6	26	25.4	42	25.2
55	肩高	71	49.8	12	46.3	25	46.2	43	48.7
54/55	肩示数	89	33.8	12	37.4	23	34.7	42	31.9
74	肩峰間距	47	67.9	-	-	-	-	-	-

* 1) 田中他1999, 2) 3) 5) 池田 1993, 4) 内藤 1985, 6) 内藤 1971, 7) 熊州 1998, 8) 原山1954.

表3 上肢骨計測値 (男性)

No 上肢骨	項目	長径1号骨穴		長径3号骨穴			長径4号骨穴		
		1号人骨	2号人骨	①号上肢	②号上肢	③号上肢	④号上肢	1号人骨	2号人骨
1	最大径	304.0*	--	--	--	--	--	--	
2	全长	294.3*	280.0	--	--	--	--	--	
3	中央最大径	235.0	227.2	223.9	221.3	224.5*	223.0*	220.9	225.1
6	中央最小径	20.8	18.9	18.5*	16.8	16.9*	19.4*	15.7	17.5
7	管状最小径	74.0	62.0	60.0	37.0	69.0*	61.5*	57.5*	63.0
7*	中央距	175.3	69.0	66.5	62.0	167.3*	170.9*	175.1	169.5
6/7	管体短显示数	--	76.1	--	174.3	169.0*	161.5*	--	169.7
7/1	管体长显示数	--	--	--	--	--	--	--	--
管径									
1	最大径	219.0	217.0*	--	--	--	--	--	210.0
2	腕部径	209.0	207.5*	--	--	--	--	--	215.0
3	腕小径	44.5*	45.5*	39.5*	--	--	--	40.0*	46.0
4	管体横径	18.4*	14.7	15.7*	--	--	--	--	18.2
4*	管体中央横径	18.9*	14.4	--	--	--	--	15.1*	17.8
5	管体尖状径	12.9*	12.2	11.3*	--	--	--	--	12.2
5*	管体中央尖状径	13.0*	12.3	10.8*	--	--	--	10.5*	11.8
3/2	管体示数	--	21.9*	--	--	--	--	--	21.4
5/4	管体短显示数	70.1*	83.0	72.0*	--	--	--	--	67.0
5.4/4*	管体中央短显示数	68.8*	63.1	--	--	--	--	65.2*	66.3
尺骨									
1	最大径	227.0	--	--	--	--	--	--	--
2	桡部径	213.0	--	--	--	--	--	--	--
3	茎小径	40.0	36.0*	--	--	--	--	--	--
11	尺骨尖状径	--	13.0*	12.3*	--	--	--	12.9	12.4*
12	尺骨横径	--	16.9*	15.8*	--	--	--	15.1	19.1*
3/2	尺骨示数	18.8	--	--	--	--	--	--	--
11/12	管体短显示数	--	76.9*	64.7*	--	--	--	--	70.2*

No 上肢骨	項目	尺骨7号線穴		尺骨6号線穴		尺骨5号線穴		西日本(清野) ¹⁾		北里(清野・三浦) ²⁾		津波(清野) ³⁾	
		1号人骨	2号人骨	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	最大径	208.0	--	2	206.0	7	206.7	51	204.1	--	--	30	204.3
2	全長	202.0	--	5	202.5	--	--	--	--	--	--	--	--
5	中央最大径	94.8	(24.6)	10	93.8	13	92.4	107	93.2	50	94.1	--	--
6	中央最小径	16.9	(30.2)	10	17.6	13	17.4	137	17.0	50	17.6	--	--
7	骨体最小径	66.5	69.0	10	65.1	12	69.2	147	63.8	50	64.0	--	--
7/9	中央径	69.5	(73.0)	10	69.8	11	64.2	132	67.7	50	68.3	--	--
6/5	骨体最大径	76.2	(78.9)	7	75.1	13	77.6	137	75.6	50	73.9	--	--
7/1	尺骨示数	21.6	--	1	23.6	3	30.3	50	21.0	38	21.7	--	--
骨骨													
1	最大径	238.0	227.0	5	228.2	--	--	--	--	--	--	--	--
2	腕離長	219.0	213.0	5	213.1	--	--	--	--	--	--	--	--
3	最小径	46.0	46.0	7	43.9	3	39.3	129	42.9	38	41.0	--	--
4	骨体最大径	17.5	15.9	6	16.7	7	17.0	135	17.1	42	17.1	--	--
4a	骨体中央最大径	17.6	16.0	6	16.9	--	--	--	--	--	--	--	--
5	骨体矢状径	15.7	14.2	6	15.6	7	11.7	130	13.3	42	12.0	--	--
5a	骨体中央矢状径	13.4	13.0	7	12.1	--	--	--	--	--	--	--	--
3/2	尺骨示数	21.0	21.4	4	21.4	--	--	--	--	--	--	--	--
5/4	骨体最小径	72.6	89.3	6	75.7	7	70.5	130	71.1	42	70.3	--	--
5a/4a	骨体中央矢状径	76.1	82.3	6	73.5	--	--	--	--	--	--	--	--
尺骨													
1	最大径	--	--	1	237.0	--	--	--	--	--	--	--	--
2	腕離長	227.5	--	7	233.3	--	--	--	--	--	--	--	--
3	最小径	39.5	(50.3)*	4	41.5	2	36.1	86	37.7	34	37.7	--	--
11	尺骨矢状径	14.6	14.7*	6	13.7	5	13.0	119	13.7	50	14.3	--	--
12	尺骨横径	18.2	16.4*	6	16.6	8	15.1	149	17.5	50	16.3	--	--
3/2	尺骨示数	17.4	--	2	18.1	--	--	--	--	--	--	--	--
11/12	骨体最小径	80.2	89.6*	5	89.2	8	85.4	149	76.0	50	88.5	--	--

*1) 城1938b, 2) 中橋・水井 1989, 3) 津田 1988.

表4 上肢骨計測値(女性)

No 上肢骨	項目	尺骨3号線穴		尺骨7号線穴		西日本(清野) ¹⁾		北里(清野・三浦) ²⁾		津波(清野) ³⁾	
		1号人骨	2号人骨	N	M	N	M	N	M	N	M
1	最大径	--	--	1	206.0	42	204.1	37	204.4	--	--
2	全長	--	--	--	--	37	200.0	19	159.6	--	--
5	中央最大径	(21.4)*	19.9*	4	18.3	78	20.7	40	18.1	--	--
6	中央最小径	(18.1)*	16.3*	4	15.5	79	15.4	41	14.0	--	--
7	骨体最小径	--	64.0*	5	51.2	96	56.5	42	53.9	--	--
7a	中央径	(85.5)*	68.5*	12	58.8	74	59.9	40	56.6	--	--
6/5	骨体最大径	(84.6)*	76.8*	4	75.0	78	74.7	40	71.3	--	--
7/1	尺骨示数	--	--	1	20.8	42	19.6	21	20.4	--	--
骨骨											
1	最大径	--	--	1	208.6*	38	217.3	37	208.2	--	--
2	腕離長	--	--	--	191.0*	31	206.8	26	196.4	--	--
3	最小径	--	38.0*	2	34.0	88	37.7	30	36.4	--	--
4	骨体最大径	--	3	15.0	95	13.6	34	14.6	--	--	
4a	骨体中央最大径	--	--	--	52	14.3	--	--	--	--	
5	骨体矢状径	--	3	16.0	95	16.7	34	15.9	--	--	
5a	骨体中央矢状径	--	--	--	52	16.7	--	--	--	--	
3/2	尺骨示数	--	--	--	30	17.8	25	18.2	--	--	
5/4	骨体最小径	--	3	68.5	93	68.8	34	67.3	--	--	
5a/4a	骨体中央矢状径	--	--	--	33	75.4	--	--	--	--	
尺骨											
3	最小径	--	32.0	3	31.0	64	34.3	24	37.8	--	--
11	尺骨矢状径	--	11.1	2	11.3	26	11.3	37	11.3	--	--
12	尺骨横径	--	13.9	2	12.5	96	15.8	37	13.6	--	--
11/12	骨体最小径	--	79.0	2	89.9	95	71.7	37	83.5	--	--

*1) 城1938b, 2) 中橋・水井 1989, 3) 津田 1988.

表5 下肢骨計測値(男性)

No	項目	長海7号橋穴		長海3号橋穴							長海6号橋穴		
		1号人骨	2号人骨	F長A	F長B	F長C	F長G	F長H	F長J	F長K	1号人骨	2号人骨	
大筋骨													
1	股大腿	431.0	437.0	-	371.0	-	-	-	420.0	-	-	-	268.0
2	股前筋長	445.5	406.0	-	368.0	-	-	-	421.0	-	-	400.0*	25.6
6	骨体中央筋長	21.2	25.7	(30.7)	22.6	(30.1)	(26.5)	(26.3)	26.3	(26.3)	(26.3)	26.3	25.6
7	骨体中央筋幅	25.0	26.9	(27.8)	25.4	(26.0)	(27.0)	(25.1)	24.8	(24.1)	(24.1)	24.1	26.9
8	骨体中央筋	83.0	83.2	(91.6)	78.0	(90.5)	(83.2)	(83.2)	84.0	(72.0)	(72.0)	84.0	88.5
9	骨体上筋幅	20.2*	20.2	21.0	19.0	-	34.5	21.8	20.3	-	-	27.2*	21.2
10	骨体上筋長	(28.0)*	28.1	24.9*	22.0	-	24.1	25.3	25.2	-	-	21.9*	22.0
8/2	長厚筋長	20.0	20.0	-	(21.2)	-	-	-	20.0	-	-	-	21.1*
6/7	骨体中央筋幅穴	22.2	25.2	(110.4)	22.4	113.6	(96.0)	(112.7)	116.9	(10.7)	(10.7)	116.9	116.0
10/9	上骨体筋幅穴	22.4*	21.1	(80.0)*	22.0	88.5	20.1	21.6	22.0	-	-	22.0	83.0
筋骨													
1	全長	327.5	327.0	300.0	-	-	-	-	-	-	-	290.0	325.0*
1A	股大腿	(322.0)	333.0	(330.0)	-	-	-	-	280.0	305.0	327.0*	327.0*	29.6
2	中央筋長	-	28.1	30.4	(30.9)	(32.2)	(32.0)	(27.7)	24.1	28.2	(28.1)	-	-
8A	骨体中央筋長	33.3	33.1	37.3	32.2	33.6	30.3	-	36.7	29.0	31.1	-	-
9	中央筋幅	22.2	27.2	23.9	(20.7)	(23.2)	(22.1)	(22.2)	19.8	19.3	(23.0)	-	-
9A	骨体中央筋幅	24.6	26.7	24.4	21.3	24.5	21.2	-	23.2	21.5	25.8	-	-
10	筋骨幅	-	32.0	25.0	(20.0)	(22.0)	(22.0)	(22.0)	27.3	23.0	(23.0)	-	-
10A	骨体中央筋幅	26.0	27.5	26.5	22.0	22.5	21.0	-	23.0	21.0	21.5	-	-
10B	筋骨幅	25.5	27.5	27.5	23.0	(22.0)	(22.0)	(22.0)	27.2	23.0	(23.0)	-	-
9/8	中央筋幅穴	-	20.1	22.6	(22.0)	(22.0)	(22.0)	(22.0)	27.2	23.0	(23.0)	-	-
9A/8A	骨体中央筋幅穴	24.5	20.7	25.4	(22.5)	(22.5)	20.3	-	27.8	22.9	23.0	-	-
10/9/1	長厚筋長	22.4	22.5	23.7	-	-	-	-	-	-	-	22.1	24.0
骨骨													
1	股大腿	-	-	227.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2	中央筋長	15.4*	(15.1)	18.0	(17.2)*	-	-	-	-	-	-	(12.0)	-
3	中央筋幅	12.5*	(10.4)	10.0	(13.0)*	-	-	-	-	-	-	-	-
4	骨体中央筋	19.3*	143.0	46.0	(10.0)*	-	-	-	-	-	(28.0)	-	-
4A	筋骨幅	(20.5)*	28.3*	26.2	-	-	-	-	-	-	(28.0)	-	-
3/2	骨体中央筋幅穴	21.1*	(20.0)	22.2	(20.1)*	-	-	-	-	-	-	-	-
4A/1	長厚筋長	-	-	11.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-

No	項目	長海7号橋穴		長海3号橋穴		長海6号橋穴		長海7号橋穴		長海3号橋穴		長海6号橋穴	
		1号人骨	2号人骨	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
大筋骨													
1	股大腿	426.0*	-	6	408.8	3	426.2	27	432.5	19	414.1	-	-
2	股前筋長	426.0*	-	6	409.1	3	422.2	46	430.7	19	412.1	-	-
6	骨体中央筋長	(30.5)	-	12	28.2	22	27.2	234	29.0	67	29.0	-	-
7	骨体中央筋幅	(27.6)	-	13	26.4	22	26.8	238	27.8	67	26.0	-	-
8	骨体中央筋	(31.0)	-	13	28.7	21	28.9	233	30.2	67	27.4	-	-
9	骨体上筋幅	21.2	-	11	21.8	24	21.0	189	22.0	43	20.1	-	-
10	骨体上筋長	25.9	-	11	25.1	27	24.4	189	26.1	43	24.2	-	-
8/2	長厚筋長	21.2*	-	6	21.2	3	21.1	44	20.9	19	21.2	-	-
6/7	骨体中央筋幅穴	(110.5)	-	12	108.9	22	101.8	224	108.8	67	111.8	-	-
10/9	上骨体筋幅穴	22.2	-	11	20.7	17	20.1	189	20.2	43	20.1	-	-
筋骨													
1	全長	346.0	337.0	7	326.5	2	338	46	347.6	20	340	-	-
1A	股大腿	350.0	346.0	8	327.1	2	332.2	73	332.2	22	333.6	-	-
2	中央筋長	31.7	31.9	13	28.8	17	28.9	110	31.2	46	32.3	-	-
8A	骨体中央筋長	36.1	35.1	13	32.4	15	32.2	213	36.3	26	35.2	-	-
9	中央筋幅	24.0	23.7	14	23.3	16	21.4	111	22.7	46	20.4	-	-
9A	骨体中央筋幅	27.3	25.7	15	24.1	16	23.0	212	25.3	28	25.2	-	-
10	筋骨幅	26.5	28.0	14	24.3	16	23.9	113	23.6	43	24.5	-	-
10A	骨体中央筋幅	27.2	26.0	12	28.0	13	28.9	209	26.5	28	26.0	-	-
10B	筋骨幅	27.2	28.0	14	24.3	16	22.6	126	22.4	43	24.2	-	-
9/8	中央筋幅穴	25.7	24.8	13	27.7	16	24.2	110	25.2	46	23.3	-	-
9A/8A	骨体中央筋幅穴	25.2	23.2	12	24.2	14	22.8	211	22.7	26	23.0	-	-
10/9/1	長厚筋長	22.4	24.0	7	23.3	2	21.8	43	22.2	20	22.9	-	-
筋骨													
1	股大腿	343.0*	-	2	333.0	-	-	22	335.2	13	325.5	-	-
2	中央筋長	(16.5)	15.3*	6	18.9	7	13.6	93	17.0	41	17.8	-	-
3	中央筋幅	(11.2)	12.1*	7	10.2	7	11.4	83	11.0	44	12.2	-	-
4	中央筋	(17.0)	16.0*	6	17.0	7	14.3	81	17.2	41	13.3	-	-
4A	筋骨幅	43.2	28.5*	6	37.5	8	35.9	139	39.0	20	28.2	-	-
3/2	骨体中央筋幅穴	(27.9)	29.1*	6	29.6	8	23.9	20	26.1	64	28.6	-	-
4A/1	長厚筋長	11.4*	-	2	11.2	-	-	21	11.5	13	11.2	-	-

*長海(1938.2)中橋・水井 1989.3)造田 1988.

表6 下肢骨計測値(女性)

No	項目	長瀬7号模式		西日本(占領)①		北越丸用(山形県)②		津雲(福文)③	
		2号入骨	N	M	N	M	N	M	
大腿骨									
6	骨体中央部矢状径	21.7	25	24.5	162	25.7	45	25.5	
7	骨体中央部横径	24.5	24	24.7	162	26.3	45	24.2	
8	骨体中央周	73.0	23	78.1	161	81.3	45	78.0	
9	骨体上横径	31.1	15	30.4	136	30.7	42	28.4	
10	骨体上矢状径	21.7	13	21.9	136	23.2	42	22.2	
6/7	骨体中央部指示数	88.6	23	100.0	162	98.0	45	104.5	
10/9	上骨体断面示数	69.8	15	72.1	136	75.7	42	78.3	
胫骨									
8	中央最大径	(23.6)	12	26.9	77	26.9	42	27.3	
8a	栄養孔位置最大径	25.5	11	28.5	139	30.7	37	30.5	
9	中央横径	(20.6)	12	19.0	77	19.5	42	17.9	
9a	栄養孔位置横径	21.7	11	21.1	140	22.1	36	19.4	
10	骨体周	(68.5)	12	73.1	76	73.8	42	73.4	
10a	栄養孔位置周	75.5	9	81.2	138	82.9	35	81.3	
10b	最小周	64.0	12	67.0	136	68.7	35	67.6	
9/8	中央部指示数	(66.6)	12	70.8	77	73.9	42	68.8	
9a/8a	栄養孔位置指示数	85.1	10	71.9	139	72.0	36	63.6	

*1) 城1938a, 2) 中橋・永井 1989, 3) 池田 1988.

表7 頭骨小変異

(+, 有, - 無, / 不明)

頭骨小変異	頻度(%)	2-1		2-2		3-1(3)		3-2(3)		3-3(3)		3-4(3)		6-1		6-2		7-1		7-2	
		F	I	F	I	F	I	F	I	F	I	F	I	F	I	F	I	F	I	F	I
Mezopion	2.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Supraorbital nerve groove	20.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Supraorbital foramen	36.0	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
For. meningo-orbitale (ala major)		/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
Infraribital suture		+	+	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
Accessory infraorbital foramen		+	-	-	-	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
Ossicle at the lambda	10.4	-	-	-	-	+	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
Interparietale	*7.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Basitriconic suture (10mm)	12.3	-	-	-	-	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
Azetriconic base	13.5	-	-	-	-	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
Occipito-mastoid wormian	19.8	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	/	+	+	+	+	+	+
Parietal notch bone	18.9	+	-	+	-	/	-	+	-	-	-	-	-	-	/	+	+	+	+	+	+
Condylar canal	92.2	-	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+
Third occipital condyle		+	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+
Precondylar tubercle	8.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Precondylar process	1.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Hypoglossal canal bridging	16.9	-	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Foramen of HUSCHKE (0.5 or 1.0mm)	*23.1	-	-	-	-	-	+	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
For. ovale incomplete	1.9	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Foramen of VESALIUS	47.6	-	-	+	+	-	-	+	+	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+
Pterygo-sphenoid foramen	2.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pterygo-sphenoid bridging		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Medial palatine canal	7.5	-	-	-	-	/	/	/	/	/	/	/	/	/	+	+	+	+	+	+	+
Aural exostosis	*2.0	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+
Trans-zygomatic suture (5mm ⁻)	20.0	-	-	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	+	+	+	+	+	+	+
Clivoid bridging	2.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Accessory mental foramen	8.0	-	-	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
Mylohyoid bridging	8.5	-	-	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
Mandibular teeth	*16.7	-	-	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
Inguilar foramen bridging	*7.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Intermediate condylar canal		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Sagittal groove teeth	13.0	-	-	-	-	+	-	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
Palatine torus	37.8	-	-	-	-	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/

頻度はDoi and Ishida(1990)の関東東北古墳人、*はYamaguchi(1985)の関東東北古墳人のもの

表8 号横穴四肢骨の部位別個体数

部位	性別		
	男性	女性	不明
上腕骨	4	-	1
尺骨	1	-	4
橈骨	1	-	3
骨盤	2	2	4
大腿骨	7	-	-
脛骨	7	-	2
腓骨	4	-	2

表9 固有ベクトル (男性)

	主成分 1	主成分 2
頭蓋最大長	0.111149862	0.666714549
頭蓋最大幅	0.231323645	0.28147608
Ba-Br高	-0.422122985	0.090643801
頬骨弓幅	0.394046664	0.412366927
上顔高	-0.398904651	0.101026207
眼窩幅(左)	0.182830006	0.259588331
眼窩幅(右)	-0.406355712	0.281918079
鼻幅	0.360224605	-0.093693592
鼻高	-0.336263984	0.363526374

表11 固有値及び寄与率 (男性)

主成分No	固有値	寄与率(%)	累積(%)
1	2.963950634	32.93278503	32.93278503
2	1.995760202	22.17511368	55.10789871

表10 固有ベクトル (女性)

	主成分 1	主成分 2
頭蓋最大長	0.338293284	0.271087646
頭蓋最大幅	0.457300398	0.298653245
頬骨弓幅	0.452251077	0.294987619
上顔高	-0.353228931	0.496282548
眼窩幅(左)	0.052170083	-0.10433612
眼窩幅(右)	-0.418051064	0.316266716
鼻幅	0.358889371	0.195615426
鼻高	-0.198096648	0.593674217

表12 固有値及び寄与率 (女性)

主成分No	固有値	寄与率(%)	累積(%)
1	2.915490627	36.44363403	36.44363403
2	2.236183882	27.95229912	64.39593306

表13 歯冠計測値

(単位: mm)

		2号横穴墓				3号横穴墓							
		1号		2号		頭+下顎①		頭-下顎②		頭+下顎③		頭+下顎④	
		R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L
MD	UI 1	-	-	8.4	8.4	-	-	-	-	8	8.4	8.4	8.5
	UI 2	-	6.8	-	7.1	-	-	-	-	7.2	7.1	7.1	6.8
	UC	7.7	-	8.2	8.1	-	7.4	-	7.9	8.1	8.1	7.6	7.6
	UP 1	6.7	-	7.6	7.3	6.9	-	7.2	-	7.5	7.4	7	7.1
	UP 2	6.9	6.5	7.2	7.1	6.8	7.2	6.9	-	7.1	7	6.9	6.8
	UM 1	10.5	10.5	10.7	10.4	9.4	-	10.3	-	-	10.4	-	-
	UM 2	-	9.9	9.8	9.8	9.2	-	-	-	9	9	-	-
BL	UP 1	8.6	-	9.4	9.4	9.6	-	9.5	-	9.6	9.4	9.3	9.5
	UP 2	8.8	8.7	9.4	9.2	9.8	9.8	8.9	-	9.1	9.4	9.3	9.3
	UM 1	11.4	11.5	12	12.1	11.4	-	12.3	-	-	-	-	-
	UM 2	-	11.7	11.7	11.8	11.4	-	-	-	11.7	11.8	-	-
MD	LI 1	-	-	-	-	-	-	5.4	5.2	-	5.5	5.1	5.3
	LI 2	-	-	-	-	-	-	5.8	5.7	-	5.8	5.7	5.8
	LC	7	-	-	-	-	6.5	6.9	6.8	6.9	7	6.5	6.5
	LP 1	-	-	7.1	7.3	-	7.2	-	7	7.3	7.2	7	7.1
	LP 2	-	6.8	7.4	7.3	7.4	-	7.5	7.3	-	7.2	-	7.1
	LM 1	-	11.7	12	12	-	-	11.6	11.6	11.7	11.8	-	-
	LM 2	11.1	11.2	11.8	11.7	11.2	-	11.7	11.9	-	-	11.2	-
BL	LP 1	-	-	7.6	7.6	-	8.1	-	7.8	7.7	7.5	7.8	8.2
	LP 2	-	7.9	8.1	8.1	8.5	-	8.2	8.1	8.7	8.6	-	8.4
	LM 1	-	11	11.2	11.2	-	-	11	11	11.2	11	-	-
	LM 2	10.3	10.4	11.2	11.1	10.8	-	10.6	10.6	-	-	10.4	-

		3号横穴墓						6号横穴墓			
		下顎⑤		頭+下顎⑥		頭⑦		1号		2号	
		R	L	R	L	R	L	R	L	R	L
MD	UI 1	-	-	8.3	8.2	-	-	8.3	8.6	9.1	9
	UI 2	-	-	6.6	6.9	-	-	7.4	7.5	7.4	7.3
	UC	-	-	8.2	-	7.3	-	8.7	8.6	8.1	8.1
	UP 1	-	-	7.5	7.3	6.8	6.8	7.5	7.6	7.3	-
	UP 2	-	-	6.8	6.7	6.9	6.8	7.5	7.6	7.2	7
	UM 1	-	-	10.8	10.6	10.5	10.5	10.9	11	10.8	11
	UM 2	-	-	10	10	-	-	9.7	9.8	10	10.1
BL	UP 1	-	-	10.1	10.1	9	9.3	10.3	10.5	9.8	-
	UP 2	-	-	9.7	9.4	9.3	9.6	10.2	10.4	9.6	9.8
	UM 1	-	-	12.5	-	12	11.8	12.4	12.4	12.7	-
	UM 2	-	-	12.3	-	-	-	12	12.3	12.6	12.8
MD	LI 1	5.5	5.4	-	-	-	-	5.3	5.6	5.9	5.8
	LI 2	-	6.1	5.9	5.7	-	-	6	5.9	6.2	6.1
	LC	-	7	7.2	7.4	-	-	7.8	7.5	7.1	-
	LP 1	-	7.4	7.1	7	-	-	7.8	7.5	6.7	-
	LP 2	-	7.2	-	7	-	-	-	7.8	7.3	-
	LM 1	-	11.6	12.1	11.9	-	-	12.2	12.3	12.4	-
	LM 2	-	11.1	11.8	11.8	-	-	11.5	11.5	12.2	-
BL	LP 1	-	7.7	7.9	7.9	-	-	8.2	8.3	8.2	-
	LP 2	-	8.3	-	8	-	-	-	8.4	8.7	9
	LM 1	-	10.7	11	11.2	-	-	11.3	11.7	12.4	-
	LM 2	-	10	10.7	10.9	-	-	10.8	10.8	11.4	11.6

表14-1 2号墓・6号墓被葬者間のQモード相関係数

商種の組み合わせ	2-1*2-2	6-1*6-2
UL CP1P2M1	0.629	0.154
UL P1P2M1M2	0.721	0.233
UL P1P2M1	--	0.208
UL H12CM1	--	0.260
UL H12CP1P2	--	-0.238
UL H12CP1P2M1	--	0.065
UL H12CP1P2M1M2	--	0.142
UL P1M1	--	0.435
U H12CP1P2M1M2	--	0.293
U H12CP1P2M1	--	0.225
U CP1P2M1	--	0.435
U P1P2M1	--	0.504
L H12CP1P2M1M2	--	0.100
L P1P2M1M2	--	0.144

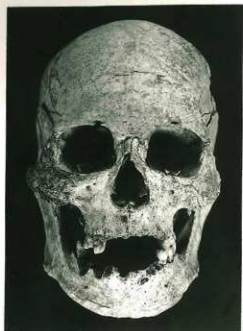
UL:上下類 U:上類 L:下類

表14-2 3号墓被葬者間のQモード相関係数

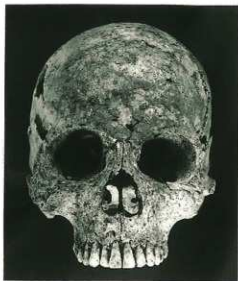
商種の組み合わせ	3-1*3-2	3-1*3-3	3-1*3-4	3-1*3-6	3-1*3-7	3-2*3-3	3-2*3-4	3-2*3-5	3-2*3-6
UL CP1P2M1	--	--	--	--	--	--	--	--	0.525
UL P1P2M1	--	--	--	--	--	--	--	--	0.551
UL P1M1	--	--	--	--	--	--	--	--	0.856
U CP1P2M1	0.127	--	--	0.212	0.490	--	--	--	0.698
U P1P2M1	0.149	--	--	0.265	0.390	--	--	--	0.698
U P1P2	-0.291	-0.584	0.964	0.217	0.945	0.618	-0.045	--	-0.018
L H12CP1P2M1M2	--	--	--	--	--	--	--	-0.076	--
L P1P2M1M2	--	--	--	--	--	--	--	0.103	0.810

商種の組み合わせ	3-2*3-7	3-3*3-4	3-3*3-6	3-3*3-7	3-4*3-6	3-4*3-7	3-5*3-6	3-6*3-7
UL CP1P2M1	--	--	--	--	--	--	--	--
UL P1P2M1	--	--	--	--	--	--	--	--
UL P1M1	--	--	--	--	--	--	--	--
U CP1P2M1	0.429	--	--	--	--	--	--	0.333
U P1P2M1	0.593	--	--	--	--	--	--	0.465
U P1P2	-0.328	-0.382	-0.751	-0.363	0.124	0.930	--	-0.112
L H12CP1P2M1M2	--	--	--	--	--	--	--	--
L P1P2M1M2	--	--	--	--	--	--	0.115	--

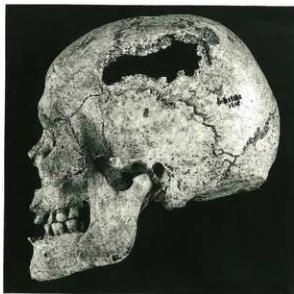
UL:上下類 U:上類 L:下類



2-1号 头盖骨 (正面觀)



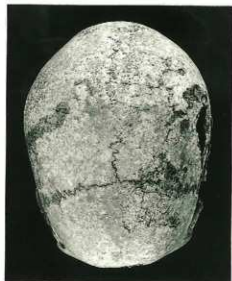
2-2号 头盖骨 (正面觀)



2-1号 头盖骨 (側面觀)



2-2号 头盖骨 (側面觀)



2-1号 头盖骨 (上面觀)



2-2号 头盖骨 (上面觀)



2-1号 上肢骨



2-2号 上肢骨



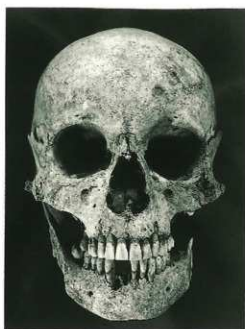
2-1号 下肢骨



2-2号 下肢骨



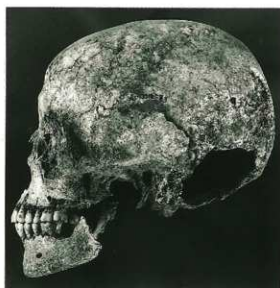
3-2号 頭蓋骨 (正面觀)



3-3号 頭蓋骨 (正面觀)



3-2号 頭蓋骨 (側面觀)



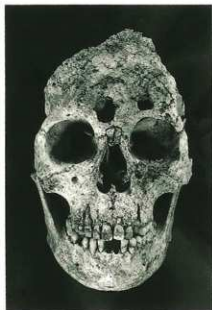
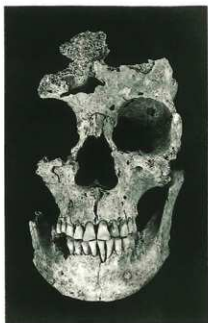
3-3号 頭蓋骨 (側面觀)



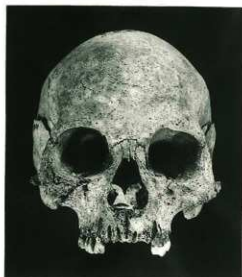
3-2号 頭蓋骨 (上面觀)



3-3号 頭蓋骨 (上面觀)



左上段 3-4号 頭蓋骨 (正面観)
中段 3-4号 頭蓋骨 (側面観)
下段 3-5号 頭蓋骨
右上段 3-6号 頭蓋骨 (正面観)
中段 3-6号 頭蓋骨 (側面観)



3-7号 頭蓋骨 (正面観)



3-8号 頭蓋骨 (正面観)



3-7号 頭蓋骨 (側面観)



3-8号 頭蓋骨 (側面観)



3-7号 頭蓋骨 (上面観)



3-8号 頭蓋骨 (上面観)



3-2号 下顎骨



3号 横穴部属不明下顎骨



3-B号 下顎骨



3-A号 下顎骨



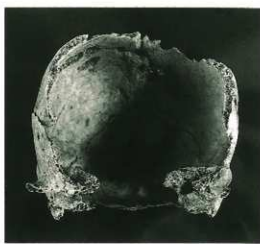
3-C号 下顎骨



左上段 3-F号 下肢骨
 中段 3-G号 下肢骨
 下段 3-H号 下肢骨
 右上段 3-D号 下肢骨
 中段 3-E号 下肢骨
 下段 3-I号 下肢骨



4-A号 頭蓋骨 (正面視)



4-B号 頭蓋骨 (正面視)



4-A号 頭蓋骨 (側面視)



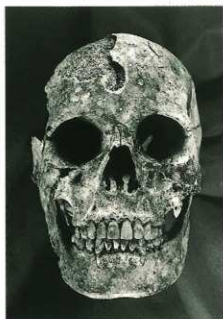
4-B号 頭蓋骨 (側面視)



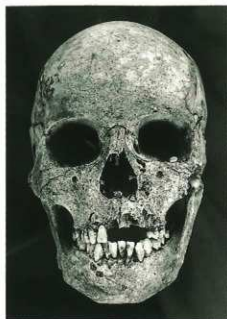
4-A号 頭蓋骨 (上面視)



4-B号 頭蓋骨 (上面視)



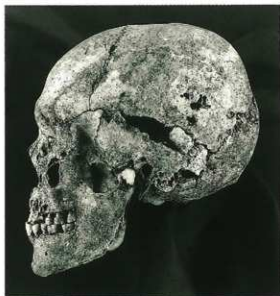
6-1号 頭蓋骨 (正面観)



6-2号 頭蓋骨 (正面観)



6-1号 頭蓋骨 (側面観)



6-2号 頭蓋骨 (側面観)



6-1号 頭蓋骨 (上面観)



6-2号 頭蓋骨 (上面観)



6-1号 上肢骨



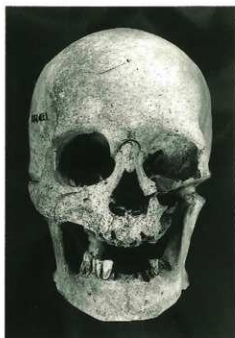
6-2号 上肢骨



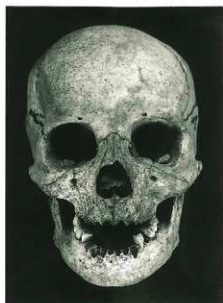
6-1号 下肢骨



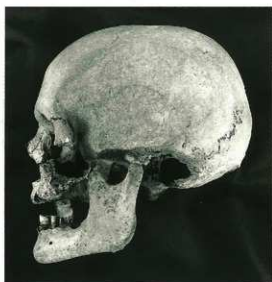
6-2号 下肢骨



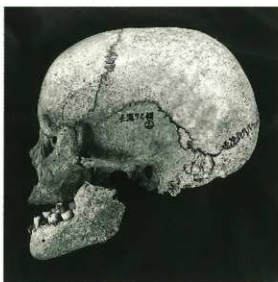
7-1号 頭蓋骨 (正面觀)



7-2号 頭蓋骨 (正面觀)



7-1号 頭蓋骨 (側面觀)



7-2号 頭蓋骨 (側面觀)



7-1号 頭蓋骨 (上面觀)



7-2号 頭蓋骨 (上面觀)



7-3号 頭蓋骨



7-2号 上肢骨



7-1号 上肢骨



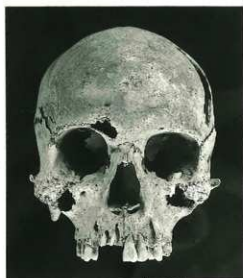
7-2号 下肢骨



7-1号 下肢骨



7-3号 四肢骨



9号 頭蓋骨 (正面観)



9号 上肢骨



9号 頭蓋骨 (側面観)



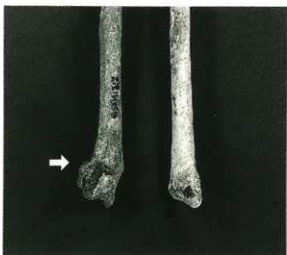
9号 下肢骨



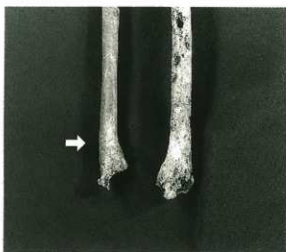
9号 頭蓋骨 (上面観)



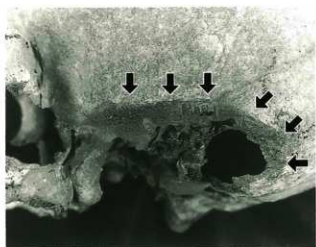
6-1号 右腕骨骨折治癒痕
(左6-1号、右6-2号)



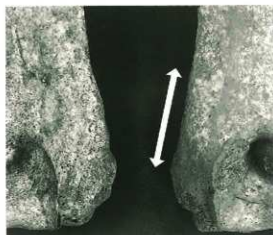
7-1号 右腕骨骨折治癒痕
(左7-1号、右7-2号)



7-2号 右腕骨骨折治癒痕
(左7-2号、右6-2号)



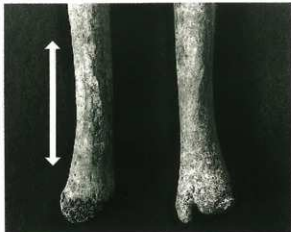
7-1号人骨 刀創 (側頭部)



7-1号人骨 刀創 (左: 右上腕骨: 創無し)
(右: 右上腕骨: 創有り)



7-1号人骨 刀創 (左: 右鎖骨: 創無し)
(右: 右鎖骨: 創有り)



7-1号人骨 刀創 (左: 右橈骨: 創有り)
(右: 右橈骨: 創無し)



7-1号人骨 刀創 (左: 右上腕骨: 創無し)
(右: 右上腕骨: 創有り)



7-1号人骨 げっ歯類による咬み痕

第4章 桑畑遺跡

第1節 調査の経緯と遺跡の概要

桑畑遺跡は、長湯横穴墓群の東、町の中心部を東西に流れる芦川左岸の丘陵から芦川へ向けて延びる低平な丘陵上、標高約480mに位置する。主要地方道庄内久住線道路改良工事に伴い、平成13年12月18日から20日の間に実施した試掘調査の際に5基の上坑を確認したので、試掘結果を基に竹山土木事務所と協議を行い、本調査を実施することとなった。

調査は、平成14(2002)年6月13日に開始した。まず、バックホーにより表土から順に土層を掘り取り、遺構検出を行った。その結果、試掘時に確認した土坑4基をあわせ11基の土坑を確認した。6月19日には10m×8mのグリットを調査区内に設定し、20日から遺構の掘り下げを開始し、平成14年8月9日に調査を終了した。調査面積は約300㎡である。

第2節 基本の層序

桑畑遺跡の表土下の基本層序は以下に示すとおりである。(第1図)

- I層 黒褐色土層。橙色のスコリアを多く含む。キメが細かくしまりがある。厚さは約40cmである。
- II層 暗褐色土層。I層同様に、橙色のスコリアを多く含む、キメが細かくしまりがある。厚さは約20cmである。
- III層 灰褐色土層。固くしまっている。厚さは約10～14cm。
- IV層 アカホヤ層。厚さは10cm～12cm。
- V層 黒色土層。厚さは10cm～20cm。
- VI層 茶褐色土層。漸移層である。キメが細かく固くしまっている。厚さ15cm～20cm。
- VII層 明貴褐色を呈すローム層である。

第3節 検出した遺構と遺物

桑畑遺跡では、遺構として11基の上坑を検出したが、そのうち10基の底面には、棒を立てるための小穴が掘り込まれていることから、陥し穴と判断した。しかし、遺物は検出しなかった。

1、陥し穴

1号陥し穴(第2図)

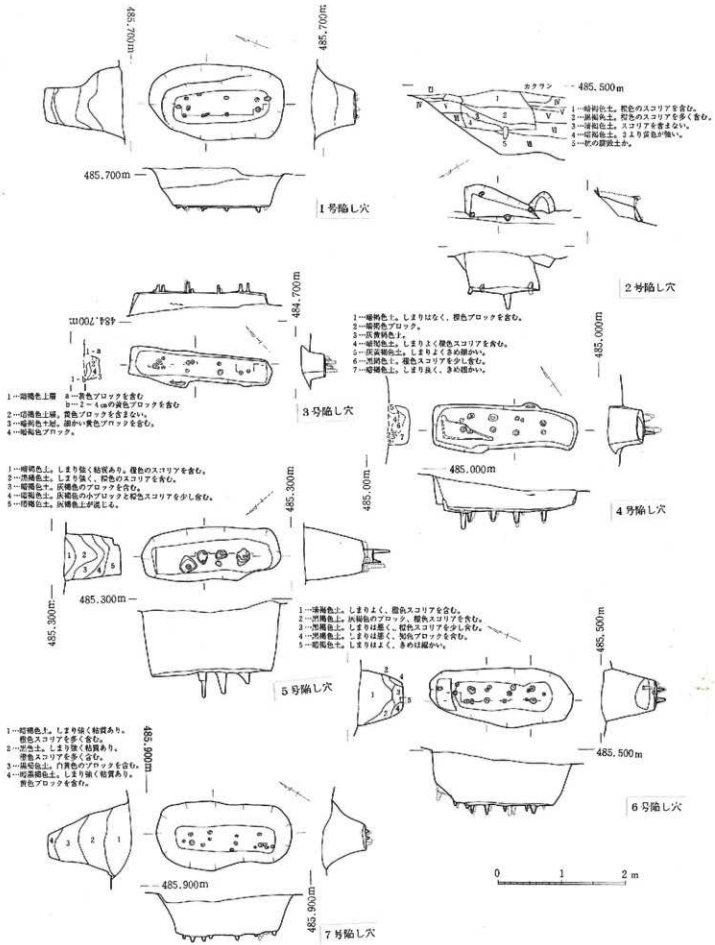
3D区で検出した。長軸はN-20°-Wにとる。遺構の検出面はローム層であるが、ここでは表上下がローム層であり、本来の土層はすでに消失しており、本来の遺構面は確認できなかった。埋土にはアカホヤは含まれず、橙色のスコリアを多量に含むクロボクが上層に堆積している。平面形は長楕円形で、壁の立ち上りは斜面をなす。底面は隅丸方形で小穴が長軸方向へ2列に11個の小穴が掘り込まれている。検出面で長軸は2.14m、最大幅1.2m、深さは0.84mを測る。

2号陥し穴(第2図)

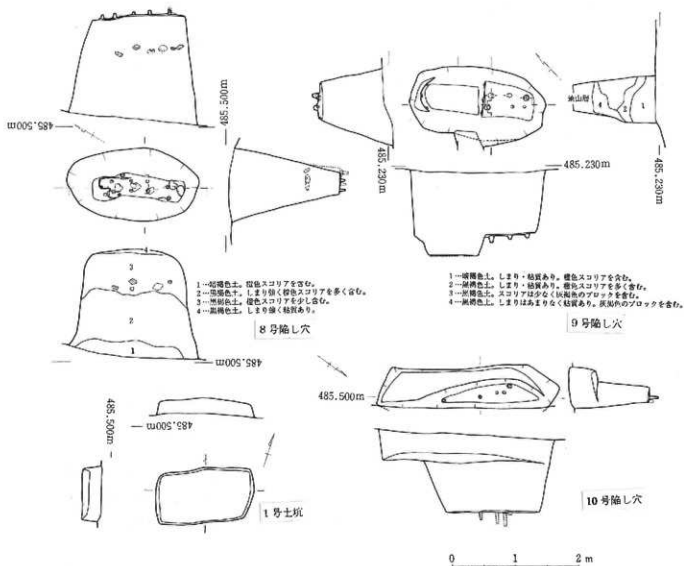
1号と同様3D区に位置する。アカホヤの上層で検出した。試掘トレンチで、北側半分が消滅している。現状で、長さ1.09m、幅0.52m、深さ0.76cmを測る。1号と同様に、橙色のスコリアを多く含むクロボクが堆積している。北側半分が消滅しているため、本来の形状は不明であるが、壁の立ち上りは、ほぼ垂直である。床面には2個、壁には斜め方向に2個の小穴が穿たれている。

3号陥し穴(第2図)

試掘の際にトレンチ東側、ローム層上面で検出した。3C区に位置する。試掘の際にローム層まで掘り下げたため上部を掘削していまい、上部の形状は不明である。現状の平面形は方形で、主軸はN-42°-Wにとる。長軸は2.27m、幅0.59cm、深さ0.48mを測る。底面も方形で、西側に小さいテラスを有し、長軸方向へ2列に12個の小穴が並んでいる。壁はほぼ垂直に近い。



第2図 桑畑遺跡遺構実測図 (1/60)



第3図 桑畑遺跡遺構実測図 (1/60)

4号陥し穴 (第2図)

3号と同様に試掘の際に試掘トレンチ東側ローム層上面で検出した。3C区に位置する。長軸はN-51°-Wにとり、3号の北東側に並ぶように位置する。平面形は隅丸方形で長軸2.3m、幅0.77m、深さ0.7mを測り。東側に小さいテラスを有す。床面も隅丸方形で、小穴は2列に掘り込まれており、11個を数える。北側が窪んでおり、壁は斜面をなしている。3号同様、試掘時に上部を掘削してしまい上部構造は不明である。

5号陥し穴 (第2図)

試掘時にトレンチ西側、ローム層上面で検出した。2C区4号の北西に位置する。平面形は楕円形で、長軸はN-41°-Eにとり、現状で長軸2.2m、幅0.84m、深さ1.4mを測る。床面はほぼ方形であり、小穴は1列4箇所、6個掘り込まれている。1箇所に数本の棒を立てたのであろう。壁はほぼ垂直に近い。埋土にはアカホヤは含まれず、暗色のスコリアを多量に含むクロボクが土層に堆積している。

6号陥し穴 (第2図)

試掘時にトレンチ西端、ローム層上面で検出した。2B区に5号の北西に位置する。平面形は楕円形で、主軸はN-21°-Wにとる。現状で長軸は2.32m、幅0.94m、深さ0.9mを測る。底面は楕円形であり、北西隅にテラスを有す。テラス上に1個、底面には2列に17個の小穴が掘りこまれ、壁の立ち上りは斜面をなしている。埋土には暗色スコリアを多く含むクロボクが分厚く堆積している。

7号陥し穴 (第2図)

2 C区、アカホヤ層より3層上のクロボク層で検出した。6号の南に位置する。平面は楕円形で、やや中央が緩れる。主軸はN-26°-Wを測り、長軸は2.14m、幅1.1m、深さ0.88mを測る。床面は隅丸方形で、15個の小穴が基本的には2列であるが、乱雑に掘りこまれている。壁の立ち上がりは斜面をなしている。7号同様、埋土上層には橙色スコリアを多く含むクロボクが堆積している。

8号陥し穴 (第3図)

7号と同様に2 C区、アカホヤ層より3層上のクロボク層で検出した。平面形は楕円形で、主軸はN-33°-Wにとる。現状で長軸2.29m、幅2.16mで、深さは、今回検出した陥し穴では一番深く深さ1.8mを測る。底面は不整形であり、2列に10個、左右の壁際に各1個ずつ、計12個の小穴が掘り込まれている。埋土上層には、他の陥し穴と同様に橙色のスコリアを多く含むクロボクが堆積しているが、その下層では底面から50cm~70cmの位置で円礫が並ぶ。壁の立ち上がりは、斜面をなすが上部は大きく開いている。

9号陥し穴 (第3図)

3 C区、アカホヤ層より2層上の暗褐色土層で検出した。平面は楕円形を呈しており、主軸はN-39°-Wにとる。現状で、長軸2.25m、幅1.26m、深さ1.02mを測る。底面は不整形であるが、土層観察の際に、掘り下げたため、小穴は2列で6個しか確認できなかったが、他の陥し穴同様に底面全体に広がっていたと思われる。壁の立ち上がりは斜面をなす。

10号 (第3図)

2 C区で検出。後世の開発により南側部分は消滅している。現状では段をなしているが、樹根等の覆土を受けており、上部は本来の形状を呈していない。深さは0.97cmを測る。床面には小穴が5個確認できた。

1号土坑 (第3図)

4 D区、ルーム層上で検出した。ここでは表土下がルーム層であり、本来の土層は消失しているので、本来の遺構面は確認できなかった。現状の形状は上部・底面共に方形で、底面には小穴は掘り込まれていない。主軸はN-22°-Wにとり、長軸は1.56m、幅0.87m、深さ0.31mを測る。陥し穴に比べると、規模が小さく浅い。

第4節 まとめ

桑洲遺跡では10基の陥し穴と1基の土坑を検出した。これらの遺構の検出面は橙色スコリアを含む黒褐色土層上面であるが、遺跡自体が後世の開発等でかなりの削平を受けており、本来掘り込み面を押えることはできなかった。しかし、土坑を除く陥し穴の覆土上層には、多量の橙色スコリアを含む黒褐色土が分厚く堆積しており、橙色スコリアの降下前後に掘り込まれた可能性が高い。この橙色スコリアを含む黒褐色土層であるが、周辺に展開する三反田遺跡(註1)や横枕B遺跡(註2)でも確認されており、縄文時代前期から古墳時代の遺物が出土している。また、この橙色スコリアは、久住連山のひとつ大船山の約3,500年前の噴火に伴うものとされ(註3)、また、高橋信武氏は、九州の膨大な陥し穴の集成を行い、形態別の所属時期による編年と、狩猟方法について見解を加えている(註4)、本遺跡で検出した陥し穴のように、平面形態が楕円形を呈し、底面のビット数が4基以上のものについては、縄文時代早期~晩期のものとしており、覆土の状況や高橋氏の見解からみても、今回検出した陥し穴はいずれも縄文時代後・晩期のものであると断定できよう。

陥し穴の形態については、平面が方形と楕円形のものが存在するが、方形については、いずれも試掘のトレンチにより上面が掘削されたものに限っていることから、本来の平面形はたと同様に楕円形を呈したものと思われる。底面の小穴については1列(4号)と2列(1・3・4・6・7・8号)に分かれており、陥し穴の配列については、一見散在しているようであるが、長軸の傾きからA(5号)B(3・4・号)C(1・6・7号)D(8・9号)にグループ化できる。前述のように、この遺跡全体は、構成の開発等でかなり削平を受けており、本来の地形を復元できないが、現状からみて斜面であった可能性が高く、長軸の傾き差は、地形上の制約によるものと考えられる。またB・C・Dのグループについては、いずれも同様の覆土であり、底面の小穴の並び方が類似していることからほぼ同時期のものと考えてよいが、Aについては長軸の傾きがことなり、小穴の並び方も一列であ

ることから他のグループに比べやや時期が古いと考える。

次に陥し穴の配列及び狩猟方法であるが、高橋氏の分類によればI類・丘陵・段丘等の周辺より高い地形の縁辺部に地形に沿って並列するタイプに属するものであり、動物が生息する地形に対応して陥し穴猟を行っていたのであろう。追い込み猟もしくは罾猟といった問題については、検証するには遺跡の範囲があまりにも狭く、また、囲いのための柵等も今回の調査では検証できなかったが、地形的な制約があるもの陥し穴の長軸の傾きが4通りあることから、同一場所で複数回にわたって罾をした可能性が高く、罾猟と考えたほうがよいであろう。

以上の、今回検出した10基の陥し穴について見解を加えてみた。いずれも縄文時代の遺構であり、縄文時代におけるこの地方の狩猟の様子を知るうえで貴重な資料を得たといえる。しかしながら、遺跡の周辺は、構成の開發等で大きく削られており、また、遺跡が広がると思われる丘陵先端部については「事予定区外のため、今回は遺跡の一部を調査したに過ぎなかった。罾猟・追い込み猟といった問題を含め、この地域の狩猟の実態を明らかにするためには、さらなる資料の増加が待たれるところである。

註1 高橋信武・小柳和宏 1985 『三反田遺跡発掘調査概報』直入町教育委員会

註2 高橋信武・稀賀俊一 1988 『横枕B遺跡・前田遺跡』直入町教育委員会

註3 高橋信武氏のご教授による。

註4 高橋信武1994 「九州の陥し穴の変遷」『先史学・考古学論究』熊本大学文学部考古学研究室創設20周年記念論文集



桑畑遺跡全景



桑烟遺跡北側



桑烟遺跡南側

報告書抄録

フリガナ	ナガユコアナボグン クワハタイセキ							
書名	長湯横穴墓群 桑畑遺跡							
副書名	主要地方道庄内久住線道路改良工事に伴う関係埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	大分県文化財調査報告書							
シリーズ番号								
編著名	甲斐 寿義							
編集機関	大分市教育委員会							
所在地	〒870-0021 大分県大分市府内町3-10-1							
発行年月日	2004年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	ショザイチ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながゆこあなぼぐん 長湯横穴墓群	ながゆこあなぼぐん 直入郡直入町大字 ながたまたぐわはた 長湯字桑畑			131度22分15	33度3分49	2001.11.29 ～ 2002.01.25	200	主要地方 道庄内久 住線道路 改良工事
かつらみいせき 基本遺跡	同上			131度22分23	33度3分50	2002.06.13 ～ 2002.08.09	300	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長湯横穴墓群	横穴墓	古墳	横穴墓 9基	須恵器、土師器、鉄鍬 鹿角装刀剣、貝製品、 銅鍬等の副葬品多数		人骨19体		
桑畑遺跡	土坑群	縄文時代	陥し穴 10基 土坑 1基	無				

長 湯 遺 跡

—主要地方道庄内久住線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

大分県文化財調査報告書第171輯

編 集 大分県教育委員会文化課（文化財資料室）
〒870-1113 大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
TEL(097)597-5675

発 行 大分県教育委員会
〒870-0021 大分市府内町3丁目10番1号
TEL(097)536-1111

印 刷 いづみ印刷株式会社
